箱庭の勇者　～ガイのなりあがり冒険記～

ししだ　じょうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
箱庭の勇者　～ガイのなりあがり冒険記～

【Ｎコード】
Ｎ５０９９Ｗ

【作者名】
ししだ　じょうた

【あらすじ】
異世界召喚冒険もの。
異世界に召喚された底辺にいる主人公が気づけばいつの間にやら流されるままになんとなく世界を救う……かもしれないお話。

各種設定あれこれ（前書き）

一番最初にでんとありますが、読まなくても特に問題がないように話を進めていくつもりです。

設定類が気になる方などは参考程度にどうぞ。

９／２３　武器などの装備に関して　加筆

１０／１８　種族に関して・ギルドに関して・魔法に関して　加筆・修正

各種設定あれこれ

はじめに

世界設定などに関してです。
主に種族、魔法、国、ギルド、お金なんかに関してを記述しておきます。
考えている設定をグダグダと書いていきますので、多少見栄えは意識して書きますが、見難いのは勘弁してください。
今後、感想などでこんな項目が欲しい。という意見や、多く寄せられた質問などはこちらに追記していきますので、気になることがある方はご意見などお待ちしております。

☆大陸について

箱庭の世界には、大陸がいくつか存在します。主人公たちのいる大陸をロンダーシェルと言い、面積としては地球でいうところのユーラシア大陸に相当します。人口はおよそ６０億人（亜人含む）です。

ロンダーシェル大陸は、中央にそびえるメトロエロ山脈により３分割されており、北をアルファン地方、南東をクーデルネア地方、そして１章、２章の舞台となる南西部、リンガ地方となっています。同じ大陸内ですが、メトロエロ山脈は非常に険しい山なため交流が少なく、文化的にはまったく別のものができていると言っても過言ではありません。

特に魔法文化での違いが大きく、魔法の形式は各地方でまったくの別ものになっています。言語的、人種的には非常に近しく、文明としての発展具合はどの地方も中世程度（ただし、魔法の存在によ

り随所に地球よりも高度な部分がある）のものです。

☆種族に関して

・人族

異世界『ロンダーシェル』でもっとも数が多い種族。戦争に巻き込まれることなく天寿を全うするのなら平均寿命は１００歳ほど。ただし、戦争が多発している地域などでは平均２０歳程度。
領土拡大欲が強く、戦争をするのは人族の国ばかり。
身体能力などは亜人と比較される基本とされることが多いため、すべてが平均的とされる。

・エルフ

外見的特徴は耳が長く尖っている、肌が白い、など。人族の美醜の感覚でいうと美人が多い。平均的な天寿は殺されるか病気以外で死んだ個体がいないため不明。
生まれてから２０年程度は成長が続き、それ以降はゆったりと歳をとっていく。平均すると２００歳くらいまでは１０代から２０代程度の外見。４００歳までは３０代から４０代程度、６００歳まで５０代程度、６００歳を超えると人族の老人とそれほど変わらない外見になる。ただし、個人差がかなり大きく。１０００歳を超えても１０代の外見をしている個体はいる。外見の個体差については詳細不明。
基本的に長年住みついた土地を好み、領土拡大などの野心はない。
身体能力は、筋力的な面では人族と同等か劣っている程度。魔法

的な面で見るとエルフが圧倒的に優位。

・鬼人

外見的特徴は額から角が生えている点。角の数がその人物の力の大きさと高貴さを表す基準になっている。ただ、鬼人以外の種族では2本以上の角は視認できない。

平均的な天寿は３００歳ほど。地球でいうところの日本的な雰囲気と文明を持った種族。

基本的に鎖国的。

服装は和服系、武器も日本刀的な武器が多い。

身体能力は筋力的な面では人族を圧倒する。反面で魔法の才能や耐性が低く、防御という点では全種族中で最弱。

・獣人

外見的特徴は各種族の耳が頭から生えているなどがある。種族的には犬（狼）、猫（虎）など、伝承の中では、鳥や牛、馬などの種族がいるらしいが、人族はそれらの存在を確認していない。

各部族ごとに自らの部族を賢狼族、王虎族などと呼称している。ただし、賢狼族は他の狼族より魔法の力に優れていたり、王虎族は虎族のなかでも王と呼ばれるほど強い力を有しているなどの特徴がある。

基本的に各部族ごとの縄張りを重視する。自分たちの縄張りに害がなければ、対外的にはなにもしない。

身体能力は各部族ごとに差が大きく一概にこう、と言えないが、瞬発力に優れ、筋力も人族より強い場合が多い。魔法に関しても同様だが、人族に比べ劣っている場合が多い。

・魔物

スライムやデーモンなど人族や亜人とは外見的に大きな差がある。たいていの場合知能は低く、本能で生きている。大陸のどこでも生息しているが、魔王領に生息している魔物は同種であっても力が強くなっているなど、環境によって能力に差が生まれる。

基本的に人族、亜人族とは敵対関係にある。

・魔族

外見的には人族に近いのだが、性格はたいてい残忍。人族たちが確認している魔族は現在は魔王を含め８人。身体能力は人族、亜人らすべてを圧倒し、魔法能力も高い。

人間の用いる武器では傷をつけることも難しく、伝説級の武器なんかを持った冒険者や勇者が討伐に赴いたことはあるが、討伐に成功したのは１例だけでそれ以外はすべて返り討ちにあっている。

気まぐれな性格の個体が多く、魔王領の中で生活していると推測されるが、人間の国を襲うことはあまりない。ただし、ときおりふらりとどこかの国を訪れ、滅ぼしたり壊滅的な打撃を与えることがある。

・幻獣

ドラゴンやユニコーン、グリフォンなどの種族。魔物や獣などに比べ圧倒的なまでの力を有しており、ドラゴンの下位種族であるワイバーンを倒すのにも５０人のベテラン冒険者が挑み半数以上が被

害を受けてようやく倒せるほどの力を持っている。
幻獣は一般的には最高位の種族とされているが、伝説の中には神獣と呼ばれる種族も登場している。
神獣には一部のドラゴンの中でも特に力の強いものやユニコーンの王などがいるとされている。多くの場合、人語を解し、勇者に力を授けるなど人族の味方として伝説に登場する。

☆魔法に関して

魔法には以下の種類がある。

・初等魔法
～　一般人でも使えるレベルの魔法。

・中等魔法
～　一般人以外が使う、戦いにも用いられるレベルの魔法。魔法の種類などが各魔法の中でも最も多く、各国にある魔法部隊の人間でもこのレベル。

・高等魔法
～　宮廷魔法使いなどの才能にあふれる人間ではないと使えないレベルの魔法。１０００万人に１人程度の才能が必要。

・最高位魔法
～　もはや伝説と言われるレベルの魔法。歴史上でもこのレベルの魔法を使えた魔法使いは片手で数えられる数しかいない。かつて、唯一魔族を倒した冒険者のパーティにはこのレベルの使い手がいたとされている。

・召喚魔法
～　普通の魔法とは違う形式の魔法。特殊な訓練を積んだ人間にしか使えず、どんなに大きな国でも3人程度しかいない。一般的には高等魔法を使える人間でもごく一部の大魔法使いと言われる人間が勉強し、実行できるレベル。

・契約魔法
～　伝説級と言われる魔法。語感的には単純そうな魔法だが、契約対象は幻獣のため使われる機会はめったにない。一般に確認されている契約魔法を使う人間は歴史的に見ても最高位魔法を使える人間並みに少ない。

・特殊魔法
～　普通の魔法とは違い、システム的なものに使われている魔法。主にギルドカードや魔法アイテムなどに使われている魔法。大昔に召喚された勇者が作り出した魔法体系で、厳密な意味で仕組みは理解されていない。ただ、使えるだけのもの。

初等から最高位魔法までに関しては、属性があり、基本属性は火、水、土、風、雷の５種。
使える魔法の属性の数＝魔法の才能ともいわれ、一般人では１種類しか使えない場合が多い。
各属性の使える人間を割合で示すと

火：水：土：風：雷＝４０：２５：１８：１５：２

となる。（なお、２属性以上使える人間は得意な属性をカウントし

てこの割合に含まれる）

その他特殊属性に光と闇があり、上の割合と比べると０．００１以下の割合にこの二つの属性が使える人間がいる。

光と闇の使い手は基本属性はすべて使えるが、光か闇はどちらか一方しか使えない。

☆国に関して

・バルデンフェルト帝国

総人口　７億５９００万人　　総兵力　１０００万人（予備役含む）

特徴

実力至上主義の国。優秀であれば人族、亜人と隔たりなく登用される。西方の海に面した国であったが、侵略を繰り返しリンガ地方中央あたりまで領地を伸ばしてきた。

リンガ地方では１，２を争う大国。基本的には支配を繰り返しているため同盟国はなく、属国が少しある。

・リエルド王国

総人口　１億８０００万人　総兵力　３００万人（予備役含む）

特徴

バルデンフェルトが進出してくるまではリンガ地方の中央でも中

心的な国だった。周囲は同盟国が多く、同盟国の兵力も計算に入れれば９００万人ほどの総兵数となる。
人族至上主義の国で、亜人種は非常に肩身の狭い生活をしている。なお、総人口に亜人が含まれていないため、亜人を含めた人口は１億９０００万人ほどになる。

☆ギルドに関して

ギルドはどこの国にも存在するが、国ではなくギルド議会に所属する組織。
ただし、登録している人間の本籍はそれぞれの生国にあるため、ギルド職員以外は基本的にその国の法で処罰される。職員の方は働きだしと共に本籍をギルド本部と言う国に移すため、治外法権が認められる。治外法権が認められているのはギルド本部が公明正大を地で行く組織であるから認められているのである。
ギルド本部にあるギルドの各ギルドマスターたちの話し合いをギルド議会と呼び、その決定が各国にあるギルドの大方針となる。

ギルドの種類は有名なものを上げれば以下のもの

・冒険者ギルド
～　一般人の中でも特に有名なギルド。各国で起きたトラブルを解決する代わりに各国に存在する迷宮を探索する権利を有する。一攫千金を狙う人間が登録するギルドで、仕事がら乱暴者などが多い。一般的な英雄の多くは冒険者ギルドに登録していた過去を持つ。

・商業ギルド
～　商人の多くが登録するギルド。商売をする際のトラブルや法律

なんかを手掛けるギルドで、ここに登録していない人間が商売をすると国によっては通報されて捕まる。

・一般労働ギルド
〜　早い話が派遣会社的なギルド。もしくはアルバイト紹介ギルドでもいい。

・他いくつかは省略

各ギルドにはギルドごとにランクが存在する。ランクの呼称、昇級条件はギルドによって違うが、主人公が所属することになる冒険者ギルドについては以下の通り

・Gランク　ギルドP（ポイント）0〜100
〜新人冒険者。登録したての見習い的な実力。
主な仕事、薬草の採取、草食動物の捕獲など

・Fランク　ギルドP101〜300
〜新米冒険者。少しは仕事に慣れてきたレベル。
主な仕事、草食動物の捕獲、低危険度なモンスターの討伐など

・Eランク　ギルドP301〜600
〜半人前の冒険者。それなりに仕事に慣れてきたレベル。
主な仕事、低危険度なモンスターの討伐、中危険度のモンスターの調査など

・Dランク　ギルドP601〜1000
〜一人前の冒険者。基本はできているレベル。
主な仕事、中危険度のモンスターの調査、低危険度な迷宮の探索

など

・Ｃランク　ギルドＰ１００１～２０００
～少しはできる冒険者。
　主な仕事、中危険度のモンスターの討伐、高危険度なモンスターの調査など

・Ｂランク　ギルドＰ２００１～５０００
～一流と呼ばれる一歩手前の冒険者のレベル。このランクになると死亡率が跳ね上がり、仕事の失敗確率も急上昇する。
　主な仕事、中危険度な迷宮の探索、高危険度なモンスターの調査など

・Ａランク　ギルドＰ５００１～１００００
～一流と言われるレベルの冒険者。このランクに到達できる冒険者はごく一握り。このランクの人間の多くは二つ名を持つほどの有名人。
　主な仕事、高危険度の迷宮の探索、高危険度なモンスターの討伐など

・Ｓランク　ギルドＰ１００００１～５００００
～超一流と半のレベルの冒険者。半と言っても、もはや超一流と言って過言ではない。Ａランクでも特に実力がある人間たちが到達するレベル。
　主な仕事、高危険度の迷宮の探索、高危険度のモンスターの討伐など

・ＳＳランク　ギルドＰ５００００１～
～事実上ランク最高位。超一流の冒険者。各国のギルドに数名はいるＡランクの冒険者以上の実力者で、大国と言われる国にあるギル

ドに1人いるかいないかというレベル。
　主な仕事、高危険度な迷宮の探索、高危険度なモンスターの討伐など

・SSSランク　ギルドP　名誉称号のためポイントは無関係
～伝説の冒険者レベル。かつて魔族を倒した冒険者たちに与えられた名誉職ぐらいのレベル。歴史上でも3名しかこのランクに到達した人間はいなかった。
　主な仕事、超高危険度なモンスターの討伐など

仕事で取り上げられるモンスターの危険度の基準

　ゴブリンで例を挙げるなら

低危険度→ゴブリン1，2匹
中危険度→ゴブリンの集団
高危険度→ゴブリン（上位種多数）の軍団

超高危険度は魔族のみです。

ギルドPとは
　ギルドで受注できる仕事にはそれぞれの難易度に応じてポイントがある。仕事が成功した場合、ギルドカードにそのポイントが加算されていく。ただし、失敗すると1，5倍のポイントが減点される。

受注できる仕事
　自分のランクの2つ上までが受注できる。自分より下のランクは受注できるが、ギルドポイントの加算はない。（SランクがAラン

クを受けた場合は除く）（Ａランク以上の仕事は絶対数が少ないので、Ｓランクの仕事は数年に１つあるかないかというレベルなため、Ａランクの仕事を受けても加算される）

☆お金に関して

通貨単位はＢ（ブレット）（某シミュレーションゲーム会社に登場するゲームの通貨単位のパク……通貨単位を参考にさせていただきました）

１Ｂでパンが一つ買え、成人男性１人当たりの一日の使用金額がおよそ１５Ｂ。

一般的なアパートのような借家が１月当たりの家賃が１０００Ｂ

光熱費などは魔法を使用することによりほぼ無料

一般家庭で購入するような一軒家で平均１０万Ｂほど

一般的な成人男性の収入は１月当たりで、手取りが２０００～５０００Ｂほど

貴族の収入は

バルデンフェルトのような大国の貴族の場合、領地から集める税収などが２０００万～２億Ｂほど

金額はあくまで目安です。

通貨

１Ｂ銅貨

１０Ｂ銅貨

１００Ｂ銀貨

１０００Ｂ銀貨

１００００Ｂ金貨
１０００００Ｂ金貨
１００００００Ｂ白貨
１０００００００Ｂ（１億）白貨
１００００００００Ｂ（１００億）白金貨
１０００００００００Ｂ（１兆）白金貨

白金貨は基本的に超一流の冒険者以外は使いません。国の金庫にいくつかの白金貨があったりしますが、普通はどんな金持ちでも白金貨以上は使われません。

冒険者や国の軍隊などでの需要が高い武器、防具類だけは価格の差が激しく、一部の高性能なものは価格破壊的な値段になっている。ただし、安いものは安く存在している。が、高いものは途方もなく高価。

☆武器などの装備に関して

冒険者が一番金をかけるもの。国なんかでも、兵士の装備のためにも一番の金食い虫。

・武器の材料
木＜銅＜鉄＜鋼＜特殊（ダマスカス、ミスリルなど）

・防具の材料
皮＜銅＜鉄＜鋼＜特殊

・レアリティ

コモン＜アンコモン＜レア＜スーパーレア＜伝説＜神具（魔剣、聖剣など）

属性が付与されるとレアリティに＋が付く。（例、火の剣　レアリティ：コモン＋）

また、精霊などに祝福されるとさらに＋が付く。（例、祝福された斧）

↓祝福とは、通常よりも壊れにくい、能力に補正が付くなどの特典がある。

同じ装備でも、＋が多いほどいい装備。ただし、最高は祝福された全能（光と闇を除いた全属性）の装備の＋＋＋まで。

レア以上になると、武器に名前がついている。（例、祝福された火の剣『ダンブレイド』　レアリティ：レア＋＋）

・神具

神が作ったとされる装備。主に武器に多い。

階位が存在し、1位が最も強く、数字が増えるほど弱くなる。（ただし弱いと言っても一番弱い5位の武器であっても、人族やドワーフが作ったどんな武器よりも強い）

種類は剣、槍、斧、弓、杖、盾、鎧が存在する。

それぞれ神○、聖○、魔○、真○と呼ばれる。

剣で例を挙げれば、第一位は神剣と呼ばれ、2位と3位は聖剣か魔剣と呼ばれる。4位と5位は真剣となる。

第一位は世界中に1つ、第二位で2つ、第三位で4つ、第四位で8つ、第五位で16個が存在する。

つまるところ、神具は剣、槍、斧、弓、杖、盾、鎧それぞれに3

1あり、全て合わせると217存在する。
その全てがロンダーシェル大陸にあるわけではなく、世界中に散在している。

とりあえず、以上。

各種設定あれこれ（後書き）

もっとここが詳しく知りたいとかありました場合も、言っていただければ書きますので、よろしければ感想などでお知らせください。

ここおかしくない？などの指摘も大歓迎です。

プロローグ

さて、まずは何から語るとしよう？

語るにしても言葉は陳腐で稚拙でどうしようもない戯言だがそれは勘弁してほしい。

そうだな、まずは自己紹介から。

俺の名前は獅子王　ガイ、勇気あるＧＧＧの隊員……ではない。普通の高校生だった。ちなみに本名。

あぁ、当然のことだけどサイボーグでも超進化人類とかいうエヴォリュダーでもない。だから『イー●ィップ』なんてできるわけないからその辺聞いてがっかりしないでほしい。あぁ、でもこんにゃくは嫌いだし、紅生姜たっぷりの牛丼は大好物だ。

ちなみに、小学校のときに自分の名前の由来を調べましょうってやつで、知った自分の名前の由来には心底がっかりした。

なにせ、俺の名前を考えてる時に親父が偶然見たテレビアニメでやってた主人公が偶然同じ苗字だったから、まんま使ったって言われたんだ。いや、いくらなんでもそんなテキトーな……

もう少しドラマチックな理由が欲しかったよ。

さて、そろそろ本題に入ろう。お気づきだろうか？いや、聡明な読者諸君なら気づいているだろう。

俺の職業、普通の高校生だった。そう”だった”という点に注目してほしい。そう、過去形だ。

つまり俺は現在進行形で高校生じゃない。卒業したの？ってそんな馬鹿な質問はよしてほしい。

じゃあ、大学生だ！っていうのもなしだ。不登校のニート？ってのも違うからパス。少なくとも働いたら負けだなんて思ってないしな。

あんまり引っ張ってもしょうがない、そろそろ俺の職業をお教えしよう。

かつての俺は高校生。そして今の俺は、異世界に召喚されて勇者になっちった、テヘッ☆

いや、すまん。激しく自己嫌悪だ。

召喚された俺は勇者。奇しくも名前の由来となった人物とおんなじような立場になったわけだが、一つ大きな問題がある。

これは、もう正直どうしようもないレベルの問題なんだ。

何せ俺は、あの勇者王さんが好きじゃないんだよ。

プロローグ（後書き）

あんまり変わってないプロローグ。

多少の変化を見せるのは明日以降更新される本編でってことでどうぞよろしく。

1話　俺が召喚された国は本日滅びました

俺の名前は獅子王　ガイ、勇気あるＧＧＧの隊員……ではない。普通の高校生だ。ちなみに本名。

さて、突然だが俺はある問題に直面してる。べつに試験中で数学の問題が難しいとかそんなもんじゃない。現実として直面している問題にどう対処すればいいのかわからないんだ。

では、問題だ。

「どこだここ？」

周囲を見回してみてもドーム状の建物の中にいるらしいこと以外はわからない。足元には変な光を放っているなにかの模様みたいなもの。

一応、俺以外に二人の人間がドーム内にいることは確認できたけど、少なくとも俺の知り合いじゃない。というか、ずいぶん面白いファッションセンスしてるな。特にデブの方。

上着の方はべつにいいんだ。ごてごて宝石がついているだとか、ラメが入って妙にキラキラしてるってのは別に気にしないさ。ただな、チューリップ状の半ズボンに白タイツってお前……ハムみたいですよ？

もう一人の方だって、腰の曲がり具合から見ればじじいって呼べ

るぐらいの年齢っぽいやつがぼろ布みたいなローブを着てるし……あ、顔見えた。やっぱじじいだな。つか、なんでそんな目を見開いて馬鹿みたいに口を開けてるんだ？

「おぉ！ようやく我が国も勇者の召喚に成功したでおじゃる」

……お、おじゃるだと！？

まさか、現実におじゃるなんて言葉を使うやつに会うなんて思ってもみなかった。気持ち的にはツチノコ見つけちゃいましたってぐらい衝撃的なんだけど……

誰かとこの感情を共有したいところだけど、残念ながらそれができそうな相手はこの場にいない。

「じゃ、じゃからい……言ったじゃろデ・ブー王よ。わしは天才じ、じゃとな」

おいじじい何をそんなに焦ってるんだ？なんか自分でもすごい意外ですって顔してんじゃねえよ。しかもあれか？デブーってのはそのデブの名前か？見たまんまじゃねえかよ。

「むふふ、ジ・ジーよ。よくやったでおじゃる。約束通りお前を宮廷魔法使いにしてやるでおじゃるよ」

「おぉ〜、宮廷魔法使いに……」

両手を胸の前で組んで目をキラキラと輝かせてるじじい。むふふとか超個性的な笑い方をするデブ。うん、はっきり言おう。お前らキモい。

こんな連中とはお近づきになっちゃいけないな。

俺はとりあえず二人のことは無視して外へ出ることにした。扉は一か所しかないし、あそこから外に出れるだろう。

「こりゃお前、どこに行くでおじゃる！」

っち、さすがに堂々と真横を通るのはまずかったか。

呼び止められるなんて俺もまだまだだな。

「あ〜、いや。なんか喜んでるみたいだし邪魔しちゃ悪いと思ってね。とりあえず外にでも出ていようと思ったんだけど？」

「むふふ、さすが余が召喚した勇者でおじゃる。説明せずともバルデンフェルトに攻め込もうとするなんてさすがでおじゃる」

「わしわし、召喚したのはデ・ブー王じゃなくてわしじゃよ」

は？ばるなんちゃらってなんだよ。つか、自己主張してくるじじいがうぜぇ。

ったく。さっきからこのデブとじじいの言葉から予想は立ってるだけに認めたくないな。

異世界への召喚？

ふつうこういう場合は、すげぇ可愛い巫女さんが召喚して頑張ってください勇者様！的な展開になるか。そうじゃなくともすげぇ可愛いお姫様が召喚の場に同席してどうか、この世界をお救いください。的な展開になるもんじゃねぇの？

何が好きで、じじいに召喚されてデブの言うこと聞かなきゃいけねえんだよ。

「さぁ、バルデンフェルトを攻め滅ぼすでおじゃる」

「断る」

「な、なぜでおじゃる？」

なぜ？なぜときたかこのハムデブが。

「なんで俺がお前なんぞの言うことを聞かなきゃいけないんだ？」

「……余が召喚したのだからお前が余の言うことを聞くのは当然で

おじゃる」

「だが、断る」

「……」

召喚したから言うこと聞けなんて、お前馬鹿じゃないの？

「ジ・ジー、なぜこの男は余の言うことを聞かないでおじゃる！」

「え？あぁ……隷属の魔法をかけ忘れたからじゃな。てへっ☆」

おいじじい……いや、もう何も言うまい。

でも、隷属の魔法とかかけられてなくてよかった。このデブの言うこと聞かなくなるなんて恐ろしいことこの上ないぜ。

「ぶひー！なにやってるでおじゃる！お前はやっぱり宮廷魔法使いにはせん！」

「な、なんじゃとぉ！？それは話が違うぞい」

いや……お前らそんな不毛な喧嘩を今この場でしてんじゃねえよ。

まぁいいや、今のうちに外に行かせてもらおう。

「だからどこへ行くでおじゃる！」

「いや、また忙しそうだし外へ出てようかと思ってな」

デブとじじいの不毛な言い争いを無視してドームを出ようと扉に手をかけたところで、再び止められてしまった。本当に俺もまだまだだな。

「むふふ、やっぱりバルデンフェルトへ攻めに行くつもりになったでおじゃるな？」

「……はぁ？」

……うぜぇ、マジでこいつうぜぇ。

なんか、めんどくせえし、適当にあしらうかなぁ。

「さぁ、はやくバルデンフェルトを滅ぼすでおじゃる」

「あぁ、はいはい。わかりましたよ」

扉を開いてとりあえず外に出る。

わかっちゃいたけど、完全に異世界だな。なんかどこが違うって言われると詳しく説明できないけど。

とりあえず、石造りの家が多くて、妙にでかい城がある。馬車が道を走ってて街を外れたところには草原が広がっている。

あぁ、違和感の正体がわかった。こんだけ広い場所でも車がないのが地球との違いだな。

「マジで異世界っぽいな」

こんな景色だけじゃヨーロッパの片田舎に来たってだけかもしんない。いや、さすがにそれはどうかって自分でも思うけどさ。

でも、なんとなくわかるさ。空気が違う。

とりあえず、この世界の景色も楽しんだことだしいったん戻るか。

俺は再び扉を開いてドームの中に戻った。

「デブ王様、ばるなんちゃらっての滅ぼしてきましたよ」

「むほほぉ～い！よくやったでおじゃる！」

え、まじで！？信じるの？とりあえず適当にやる気のなさをアピールしてクビにでもしてもらおうと思ったのに。どうやら俺の想像

以上にこのデブはおつむが弱いようだ。

「では、さっそく余は愛しのセリル姫を迎えに行くでおじゃる！帰ってきたらすぐに結婚式でおじゃる！」

デブは俺が種明かしをする前にさっさとドームの中から出て行った。というか、ずいぶんデブのわりに俊敏だなあいつ……。

で、セリル姫って誰だ？

翌日、俺にはよくわからないが国境でデ・ブー王と、お供のじじいがバルデンフェルトに討たれたという話が国中に流れたらしい。戦争状態の隣国にまともな護衛も連れずに向かい、「お主たちは敗戦国じゃから余に従うでおじゃる！」と言っていたらしい。

さすがにあれだけの馬鹿でも国王が討ち取られたというのは国的にも一大事だし、どうやらあいつには世継ぎも何もいなかったらしい。長年に及ぶ戦争の末に王族はみな倒れ、最後の一人だったあのデブが討ち取られたこの国はバルデンフェルトに無条件降伏。俺が召喚された国は俺が来てからたったの一日で滅びてしまったとさ。

……え、俺のせい？

1話　俺が召喚された国は本日滅びました（後書き）

ちょっと、出番が少なかったのでデブとじじいの会話を増やしてあげました。（微妙に）

2話　俺は帝国の勇者になり損ねました

俺の名前は獅子王　ガイ、勇気あるＧＧＧの隊員……ではない。普通の高校生だ。ちなみに本名。

どうやら異世界に召喚されてしまった俺は、異世界に召喚されてすぐに俺を召喚した国が亡びると言う不幸な事態に見舞われた。いや、本当に悲しいことだ。

別に召喚されてから恩を受けたわけでもないので、国が亡びたことに関してなんの感慨も浮かばないが、１日たって新たな問題が発生した。

「さて、どうしよう？」

何をすればいいのか見当もつかない。

普通の異世界に召喚された人間だったら、召喚した国の王様とか、召喚した相手に説明を受けて冒険に出発だ！とかって展開になるんだろうけど、不幸なことに、本当に不幸なことにこの国の王様は昨日お亡くなりになってしまったんだ。

ったく、あのデブ王め。死ぬ前に今後の方針の一つも残して行けってんだ。え？ばるなんちゃらを攻める？知らないな。そんな話は誰からも聞いてないさ。

ちなみに昨日は召喚されたドームに泊まった。

召喚以外に使い道はない建物なんだろう、軟らかいベッドどころか椅子の一つもありゃしない。仕方がないから床で寝たけど、石でできた床の固いこと固いこと。体中が痛いぜ、まったく。

もう二度と戻るまいとドームを出てからは行くあてもなく街中を歩いている。

さすがにばるなんちゃらに負けた昨日の今日、町中は敗戦ムードが充満しているのか、人通りはまばらで妙に思えるほど静かだ。

日も十分に上っているだけに、普段なら商人たちの活気にあふれた声で溢れているだろう大通りも、客はいないし商売人もいやしない。

「来た！」

「やったぞ！」

「ばんざーい！」

にわかに聞こえてきた歓声に顔を上げると、人だかりができている。その向こうに見えるのは騎兵？

この国の兵士たちが帰ってきたのか？いや、掲げられている旗が城に描かれてる国旗みたいなもんと違うから、あれがばるなんちゃらの軍隊なんだろう。

だったら、なんであの人だかりにいる連中は喜んでるんだ？

不意に俺の頭上で何かがはためく音がする。視線を上げてみれば、横断幕が建物の二階を跨いで掲げられている。

『歓迎、バルデンフェルト！』

……文字が読めること以上に書いてある内容が驚きだよ！

あれか？もしかしてさっきまで静かだったのはばるなんちゃらの軍隊がいつやってくるかっていう期待で静かになってたのか？どんだけあのデブ王嫌われてたんだよ。

国が滅びて喜ぶ国民。よっぽどひどい国だったんだな……

ものすごい勢いで集まりだした人の波が、ばるなんちゃらの兵隊たちが通れるだけの幅を残して、大通りを覆い尽くす。

人の波に流されて気づけば通りを囲む人垣の最前列に追いやられてしまった。

徐々に近づいてくるばるなんちゃらの兵士たちの姿。歓声で耳が痛いけど、ずいぶんと堂々としている。

「？」

不意に正面を向いていた先頭を行っていた女性騎士と目が合った。

切れ長の瞳は鮮やかな深紅。陽光を受けてきらめく金色の長い髪は、女性だったら誰もが羨むだろうほどの美しさだ。白人らしい白い肌と白銀の鎧、白馬にまたがる姿は芸術って言っていいんじゃないだろうか？

え、なに一目惚れですか？

なんかすぐ後ろの兵になんか言ってる。周りがうるさくて全然聞こえないけどどうしたんだろう。

「おいお前」

「俺？」

「あぁ、そうだ。セリル姫様から話があるそうだ、ついてこい」

女性騎士と話していた兵士がこっちへ来たけど、姫ってどういうこと？いや、あの女性騎士が姫様ってことか？それも気になるけど話ってなんですか？

やっぱり一目惚れされたか？いやぁ、照れるなぁ。

っけ、冗談だよ。残念ながら俺がモテるはずがない。生まれてこのかた彼女なんてできたためしはないし、俺なんぞが人様から好かれる柄かってんだ。

じゃあいったいなんだって言うんだろうな……

まぁいい。どうせやることもないし、ついていけば何とかなるだろう。

俺は、声をかけてきた兵士に導かれ、兵隊の行列の最後尾に続いて城へ向かった。なんか、俺に歓声が向けられてるみたいで少し気分がよかった　マル

ばるなんちゃらの兵士たちは列をなして街の中心にある城へ入城した。

こういった西洋的な世界で、戦争に勝った国の人間は本能の赴くままに略奪なんかをするイメージがあっただけに、粛々とした空気の中で入城する様はなんとも不思議な感じがした。

しばらく応接室みたいな場所で待たされた後に連れて行かれたのは謁見の間って言えばいいのか？広い造りの部屋の奥には豪奢な椅子に座った女性騎士の姿、やっぱり彼女がお姫様なんだな。

入り口から豪奢な椅子（玉座かな？）に続く床にはレッドカーペットが敷かれ、その左右には完全武装の兵士が並んでいる。

なんか知らんけど、ずいぶん厳かな空気が部屋の中を満たしてい

る。あぁ、やばいな。こんな場所での礼儀作法なんて知らねえよ……

兵士に付き添われるように謁見の間の中央あたりまで進むと、その場に立たされる。ここで止まれってことですね。あの、跪いたりしなくていいんでしょうか？

「お主、勇者じゃな？」

……は？え、あ、お？

今のは間違いなく、俺の前にいるお姫様の言葉なのか？ずいぶん変わった口調をしていらっしゃいますね？

お姫様なら、それっぽいしゃべり方をしてほしいけど……いや、まぁしゃべり方なんてその人の個性ってことでいいんだろうけど。やっぱりなぁ……

というか、あれだよ。前置きもなしにそんなこと言われてもなんて返事を返せばいいのか分かんねえよ。心の準備ぐらいさせてくれっての。

「何を呆けておる、質問に答えよ。そのポリエステールで出来たセーフクを着ている人族は勇者の場合が多いんじゃが、違うのか？」

「いや……よくわかんないっすけど、勇者らしいです」

「ふむ、そうかなるほどの。お主が……」

お姫様は興味深げに俺のことを見つめる。それこそ上から下に穴が開くほどに。おいおい、そんなに見られたら照れちまうぜ……冗談だよ。間違ってもこんなこと口にできないしな。

というか、このお姫様の纏ってる空気がやばい。あのハムデブとは大違いだ。これが王族の纏う雰囲気ってやつなのかね？下手な受け答えしたら殺されそうだよ。

「なるほどの、あの間抜けな王が死ぬ間際に勇者に騙されたと言っておったが、まさか本当に勇者を召喚しておるとはな……」

「騙されたってのはちょっと納得できませんけど、何か問題でもあるんでしょうか？」

「いや、我が国に敵対するわけでもなしに問題などありはせんよ。しかし、だ」

「しかし？」

「お主はなぜあの間抜けに嘘をついたのじゃ？」

「嘘？」

嘘なんてあのハムデブについた覚えはない。めんどくさくなって適当なことは言ったような気はするが……

「お主がバルデンフェルトを滅ぼした、とあの間抜けは言っておったぞ？」

「あぁ、あのことですか。あれは嘘じゃなくて単なる冗談です」

「冗談？」

「はい」

「……ふむ」

お姫様は顎に手を当てて何かを考えてるみたいだ。いや、笑うとか怒るとかリアクションが欲しいんですけど……

なんか、物語的にはここでこのお姫様に気に入られて、ばるなんちゃらの勇者として大活躍ー！とかあるんじゃねえの？

「わかった。もう帰っていいぞ」

「は？」

え、なにそれどゆこと？

帰れってなにさ。これから異世界に召喚されて面白くなってくるところじゃないのか？

もしかしてどっかで選択し間違えたのか俺は？

「どうした、早く帰れ」

「あの……どうやって帰ればいいんでしょうか？」

「お前は馬鹿か？来た道を戻れば外に出れるじゃろうに」

あっ！帰れってそういうこと？地球に帰れって言ってんのかと思った。

でも、勇者が召喚されたんなら魔王と戦ったりするんじゃないの？ここで帰れってのはどうなのよ。

「あの、俺って勇者ですよ？」

「だからどうした？」

だからどうしたって……

「魔王と戦ったりしなくていいんですか？」

「そんなもの我が国の勇者だけで事足りる」

え、嘘。勇者って俺以外にいるの？普通勇者って一人じゃないの？

「なんだ、お主はそんなに武芸に自信があるのか？ならば我が国の勇者を一人倒せればお前を我が国の勇者として取り立てよう」

あの一人ってことは勇者は複数いるんですか？

完全に俺の予想の斜め上の展開に思考が追い付いてこない。

「え、あの、はい、ではそうします」

俺の馬鹿！なんでそう返事をした。いくら呆けてるからってそりゃねえよ。

まずい、喧嘩ぐらいはしたことあるけど、戦いが本職の兵士との戦いなんて経験ない。さすがに学生の喧嘩と比べるのはまずいだろ。

しかもこっちは丸腰で、相手は剣もあるんだぞ？勝てるわけないじゃん。

「そうか、三井」

「はい、姫様」

三井と呼ばれた男が整然と並んでる兵隊の中から一歩歩み出た。

たぶん２０歳くらいだろう、体つきはがっしりとしていてなんか肉体系の仕事をしてそうな感じだ。（いや、勇者なり兵隊はたしかに肉体系だが）

「この男と戦え」

「かしこまりました」

三井はうなづくと腰に差された剣を抜いた。

いや、だからこっち素手ですよ？武器は反則じゃない？

「君、この世界に来たばかりだろ」

質問、というよりは確認のように三井は言った。なんでわかるかは知らんけど、その通りだからぐうの音も出ない。

「元の世界で格闘技でもしてた？そうじゃないなら俺には絶対勝てないよ」

じゃあだめじゃん。絶対勝てないじゃん。格闘技なんてやってないもん。

「はじめ！」

姫の一言で三井は一気に駆け出した。１０メートルくらいあった距離が瞬きするような時間でなくなり、気づいた時には俺ののど元に剣がつきつけられている。

「なんだ、面白くもない」

あまりにもあっけない幕切れ。というか、勝負なんて恥ずかしくて言えるもんじゃない。

どうやら姫様は完全に俺から興味をなくされたようで席を立つとさっさと部屋を出て行ってしまった。

当の俺の方は生まれてこの方ナイフや包丁すらつきつけられたことがないもんで、自分ののど元に剣なんて言う物騒なもんがつきつけられている事実にへなへなと腰を抜かしてしまった。

「さっさと城を出た方がいいよ」

三井は剣を鞘に戻しながらそう言ってさっさと俺に背中を向けた。

え、いや、あの……これでおしまい？いくらなんでも早すぎじゃね？

しかしながら勝負に負けてしまった俺は弁解も何もする暇がないうちに両腕を掴まれて城の外まで連れられて行ってしまった。

まるでゴミを頬るように門の外に投げつけられた俺は無様に地面に転がってしまう。

「さっさと帰るんだな勇者様」

俺を放り投げた一般兵B（仮）はそう言い残して城の中に戻っていった。

あっれぇ～、どこでフラグ壊したんだろ？

2話　俺は帝国の勇者になり損ねました（後書き）

今回もあんまり変わってません。

が、お姫様の描写をちょっと詳しく入れてみたりとほんの少しだけ変わってます。

次は、説明なんかが若干変わる予定です。

3話　今後の方針が決まりました

俺の名前は獅子王　ガイ、勇気あるＧＧＧの隊員……ではない。普通の高校生だった。ちなみに本名。ばるなんちゃらの勇者になり損ねた俺は、単なる元高校生だ。

ばるなんちゃらの勇者になり損ね、行くあてもなくするべきこともわからない。まじでどうしたらいいんだろう。

そもそも、人間生きていくためには金を稼がにゃなんないだろうけど、働くあてだってありやしない。

「どうしたもんか……」

とりあえず、城から大通りまでは戻ってきた。どうすればいいかわからないけど、城の前で魂が抜けたみたいに呆然としていたって事態は好転しない。

大通りに戻ったからと言って何かがあるわけじゃあないだろうけど、なにもしないよりはましだろう。

さっきばるなんちゃらの勇者になれてれば、こんな悩みはなかったんだろうけど、なれなかったもんは仕方がない。いつまでも悔やんでたら前進できないぜ！

なんて、無理やりポジティブに考えようとしたって無理なもんは無理。いったいこれからどうすればいいんだろう。

「あ！よかった、見つかったよ」

「？」

なんだか聞き覚えのある声に振り返ると、どこかで見たような顔。

……あぁ、あいつだ。城で俺が勇者になるのを妨害してくれやがった三井じゃないか。負け犬を笑いにでも来たのか？

鎧を着ていないからか、少しばかり軽装備っぽい感じの三井がこっちに駆け寄ってくる。

さすがに胸倉掴んで「よくぬけぬけと俺の前にその顔だせたな！」とか言うほどの恨みはないが、少しばかりの恨みはある。できれば、会いたくなかったな。

「時間はあるかい？よかったら話がしたいんだけど？」

ええ、おかげさまで時間は有り余ってますよ？って、嫌味を言っていても仕方がない。この世界のことなんて何一つ知らないし、情報は喉から手が出るほど欲しい。

「まぁ、特に用事はありません」

「そう？だったら、どっか飯屋にでも入って話そう。あ、金は俺が出すから心配しないでいいよ」

さすがに、この世界での先輩だ。こっちの懐事情くらいは察しがついているんだろう。

奢ってもらえるなら喜んで奢ってもらおう。なにせこっちは昨日から何も食ってなくて腹が減ってるからな。

飯屋に入って手早く注文を済ませると、俺たちは向かい合う形で席に着いた。文字が読めても料理名から料理が想像できなかったので、注文はすべて三井任せだ。

昼時と言うこともあって、ほぼ満席状態。しかも、バルデンフェルト統治記念とかって祭りがそこら中で騒がれ、文字通り町中がお祭り騒ぎだ。昼間から酒を飲んでいる客が多く、かなり店の中はうるさい。

「さて、まずは自己紹介かな？俺は三井　純、地球にいたころはW大学に通って教師を目指してた。2年なんだけど、一浪してたから歳は21ってね。はは」

一浪しようがW大だろ？何を恥ずかしそうに笑ってるんだ。こちとらW大学なんて逆立ちしたって入れないってのに。いや、これは単なる僻みだけど。

「獅子王　ガイ、高3、17です」

「え！？獅子王ガイって、ライオンの獅子に王様の王で獅子王？」

「そうです」

なんか妙に食いつくな……ヲタクだなこの人。高校でもこんな人何人かいたよ。

「ご想像の通り、あの勇者王の主人公と同姓同名です」

「すっげー！獅子王なんて名字あるんだね。まさに勇者になるべくして勇者になったって感じじゃん」

「はぁ……」

たしかに、勇者になるべくしてって感は少しばかりはあるが、今の俺は勇者って言えるのか？

「いやぁ、うらやましいよそんな名前」

こっちとしては厨二くさくて嫌な名前なんだがな。

「っと。話が脱線したね。獅子王君はいつこの世界へ？」

「ガイでいいですよ。獅子王って言いにくいでしょ？」

「そっか、わかった。で、ガイ君はいつ来たの？」

「昨日です」

「昨日！？そのわりにはずいぶん落ち着いてるね」

ぶっちゃけ、落ち着いているっていうよりもあきらめてるって感の方が強いけど。

一応、俺だってヲタクっぽい部分……というかやっぱり男の子として厨二の心は忘れてない。こんな状況にあったら、そりゃ楽しみたいとか興奮するって部分は否定できないさ。

「俺の場合、なるようになる。ってのが座右の銘なんでこうなった以上はここで生活するんだなくらいにしか思ってませんよ。落ち着いてるっていうなら、三井さんも同じだったんじゃないですか？」

「あ、わかる？まぁ俺の場合は来たばっかりのころは興奮が収まらなかったけどね」

わかりますとも。あんたは完全なるヲタクだろうからこの状況になったら狂喜乱舞するにきまってる。

「でも、昨日来たばっかりだったら、この世界のことはなにもわからないよね」

「まぁそれは」

「んじゃ、説明はそこからだね」

三井さんの通うW大学、学力が高いうえに彼は教師を目指しているだけあって説明は非常にわかりやすかった。

三井さんいわく、この世界は国家間の戦争が頻発しているため、人材が不足しがちになる。そのため、召喚の魔法を用いて異世界から勇者を召喚するそうだ。また、この世界には魔物や魔王といわれる存在がいるので、勇者の中にはその魔王や魔物と戦うために召喚された人間もいる。

召喚魔法自体は一方通行のため元の世界に戻る方法は今のところ確立していない、そのため召喚された勇者はこの世界で生きるために様々な職に就いている。軒並み地球にいたころよりも身体能力などが向上したり、この世界では上級といわれる魔法を簡単に扱えるようになる人間が居たりする。基本的には隠れた才能が開花するようなものなので戦闘向きでない人間もいるが、様々な分野で活躍しているそうだ。などなど要約するとそんなもんだ。

「まぁ、俺の場合は召喚された国がバルデンフェルトに滅ぼされち

ゃってね。その後は冒険者ギルドに登録して1年くらい活動してたんだけど、実力が認められてスカウトされたって感じかな」

国が滅ぼされる。俺もつい昨日召喚された国が滅んでしまった。国の滅亡なんてありきたりな話なのか？

「そのばるなんちゃらってのはどんな国なんですか？」

「どんな……ねぇ？」

三井さんは首をひねってしばらく考え込むと、ばるなんちゃらについて説明してくれた。

バルデンフェルトは実力至上主義の国で、実力さえ認められればどんな種族であってもそれなりの地位に就くことができる。近年、勢力を加速度的に拡大しており、リンガ地方と呼ばれる大陸南西部のおよそ半分を占領している超巨大国家だそうだ。

「三井さんのコネでそのばるなんちゃらの勇者にはなれませんかね？」

「いやぁ、俺もバルデンフェルトの勇者団の中じゃあそこまで優秀じゃないし入ってから1年も経ってないしね。さすがにそこまでできる権限はないな」

ふむ、やはりばるなんちゃらの勇者になるのはむずかしいようだ。

「とりあえずは、三井さんみたいに冒険者ギルドで活動するっていうのが一番現実的ですか？」

「ん～、ガイ君の能力がどんなものになるのかわからないからいきなり冒険者ギルドってのは考え物だね。能力がわかったらそれに見合った職に就くのが一番現実的だよ。基本的に能力が開花したらこの世界では超一流って言われるくらいの実力になる人間も少なくないしね」

確かに、自分の才能が戦闘向けじゃなくて料理人とかだったら簡単に死ねるな。

「その能力はどうやってわかるんですか？」

「ちょっとわかんないんだよね。俺の場合、こんな世界に入ったら冒険しかない。って思って冒険者ギルドに入ったからね。たまたま能力が身体能力アップみたいな感じだったからそれが幸いしたけど」

わからないんだったら、当面はどうしようもないな。金を稼がなければどうしようもないが、そのために死ぬような思いもしたくない。

「とりあえずは、どっかの店で下働きでもしながら自分の能力がど

んなものか調べるのが一番無難だと思うよ。料理屋でも宿屋でも少なくとも死ぬような心配もないし」

「……そうですか」

異世界にきてアルバイトかよ。なんか泣けてくる。勇者なのに……

でも死ぬのは勘弁してほしい。

ここで少し沈黙が訪れ、俺たち二人は話の途中で運ばれてきた料理を無言のまま口にした。

俺は三井さんに注文してもらったベルフィというリゾット風のものをぐちゃぐちゃとかき混ぜながら思考にふける。

「まぁ、考えていても埒はあかないし食べ終わったらギルドの相談所にでも行くんだね。場所はその辺の人に適当に聞けばすぐわかるだろうから」

食事を終えて席を立った三井さんが「これは餞別だよ」と言って、硬貨を何枚かテーブルに置いた。置かれていたのは銀色の硬貨、さっきの説明の中で見せてもらった１００Ｂ銀貨が４枚も置かれている。

「こんなにいいんですか！？」

「はは、何をはじめるにしても多少のお金はいるよ。下働きするにしても給金が入るのはしばらく後だしね。それまでの生活費にすればしばらく生活には困らないはずだから。これでも国家専属の勇者ってのは給料がいいから気にしなくていいよ」

「ありがとうございます」

俺は三井さんに頭を下げて銀貨を受け取った。今日まで見ず知らずだった相手からこんな大金を受け取るのはさすがに迷うところだが、無一文では人間生きていけない。

「じゃあ、俺はそろそろ休憩時間も終わるし行くから。言った通り代金は払っておくから安心してね」

三井さんはそう言い残すと手を振って料理屋を後にした。

まじでこの世界でこんないい人に会えてよかった。何も知らないままだったらいきなり死亡フラグ経ってたしな。

本当に三井さんには感謝しても感謝しきれないぜ。あんないい人をさっきまでちょっと恨んでたなんて申し訳なく思える。

俺は、三井さんの助言に従ってギルドの相談所を目指すために、ベルフィを一息にかきこんだ。

熱いわ。

さて、やってきましたギルド相談所。お祭り騒ぎのおかげで相談所の前の人通りはほとんど皆無だ。

「さて、入るか」

俺は両開きの扉を押して中に入った。木造の椅子やテーブルが多く並んでいるそこは俺のイメージ通りの荒くれどもが酒を飲み騒いでいるようなことが容易にできそうなつくりをしていた。そう、つくりをしているだけで実際にそうしている人間はいない。というか、人間がいない。

「あの、誰かいませんか？」

受付らしい場所にすら誰もいない。カウンターの目の前に立って声をかけても返事すらない。いったいどこのゴーストタウンだ？

どうしようもないので、人が来るまで待つしかないだろう。俺は適当な椅子を引いて座ろうとした。

「？」

椅子の色がなんだかおかしい。昼間だが、広い建物内は明かりを焚かなければほの暗い。しかし、それ以上にこの椅子は奇妙な色をしている。

俺はとりあえず椅子の上に人差し指を走らせた。

「……」

なんだか、いじわる小姑のおそうじ検査のようだが、すくなくとも激甘に見たところでこの状態じゃ合格できまい。汚すぎ……指が真っ黒だよ。

どうやら、この椅子はしばらく使われてなかったのだろうと判断した俺は別の椅子を引いて座ろうとした。……どうやらすべての椅子が同じ状態みたいだ。

なんか廃墟みたいだな。

疑問に思った俺は仕方がないので建物内を適当に調べてみる。すると入り口近くの扉に一つの張り紙を発見した。

『閉鎖しました。御用の際は各ギルドにてお伺いいたします』

……マジで！？っちょ、あの……じゃあどこに行けばいいんだ？

ギルドなんて三井さんから聞いてた冒険者ギルドって名前しか知らないしな。

まぁ、外に出て誰かに聞けば教えてもらえるだろう。

入ってきたばかりの扉を再びくぐって外に出る。人通りは少ないが、まぁ０じゃない。

「あの……すいません」

「あん？……うぃっく」

あ、人選間違えた。すんごい酔っぱらってるし。まぁ、いいや。

「宿屋とかの下働きをしたいんですけどそういう仕事の斡旋をしているギルドってどこにありますか？」

「ギルド？ギルドだったらそこにあんだろ……うぃっく」

酒臭ぇ。酔っぱらいの言葉を真に受けるのは危険だけど、指差された先には確かにギルドって看板が掲げられている。ギルドの上の文字がぼろぼろになって読めないけど、説明聞いて違ったら場所を聞けば大丈夫だろう。

うん、酔っぱらいに聞くよりよっぽど建設的だ。

俺は、この決定がどんな結果をもたらすのか事の時知る由もない。

少なくとも、翌日は今日一日の出来事を激しく後悔することになるのだった。

3話　今後の方針が決まりました（後書き）

旧作の3話と4話を合体

3分の2ぐらいコピペです。

なんで、ガイが冒険者ギルドに入ってしまったとか説明不足だったので、入る原因なんかを書き足させていただきました。

ちなみに酔っぱらいは単なるモブキャラなんで名前もないし再登場はしませんw

4話　なぜか冒険者になってしまいました

俺の名前は獅子王　ガイ、勇気あるＧＧＧの隊員……ではない。勇者……らしい。ちなみに本名。

日々の生活のために働くことを決心した。……ニートじゃないですよ？

とりあえずは、命の危険がない宿屋の下働きなんかをするために、そう言った仕事を斡旋しているらしいギルドに登録することにした。だが、この世界に来たばかりの俺がどこのギルドに登録すればいいのかわかるはずがない。

超絶いい人の三井さんの助言に従って、そのことを相談所で聞こうと思ったら、その相談所がつぶれてるって有様だ。いや、俺はこんなところで諦めたりしない。

道行く人（酔っぱらい）に聞こうと思ったら、なんのギルドだかはわからないが、ギルドの場所を教えてもらったので、どこのギルドで登録すればいいのかを聞けばいいと思い、建物の中に入ったのだが、そこでもまた問題があった。

もう、ここまで問題が続いたら神様に意地悪されてるんじゃないの？って思えるが、俺はこの程度で神様を嫌いになったりしない。なにせ、俺の厨二精神を震わせるこんな世界に招待してくれたんだ、この程度で嫌いになったら神様に申し訳ないぜ。……強がりじゃないですよ？

さて、説明が長くなったが今俺が直面している問題について説明

しよう。

なんか知らないが、俺は入ったばかりのギルドでメンバーに登録されてしまったらしい。そのギルドってのが問題だ。

「いきなり冒険者とか、準備もなしになれませんって！何とかならないんですか？」

「だから、無理だってば」

「そこをなんとか！」

「だぁぁ、もうあんたしつこいわね！無理なもんは無理！」

俺は美人のお姉さんを前に必死で縋り付いている。いや、冒険者にされるとかどんないじめですか？

土下座しろってんなら土下座でもなんでもしてやるから何とかしてくれって……

さて、理由を説明するために１０分ばかり時間をもどそう。

新たに始めようとする仕事は、単なる下働きっていうアルバイトみたいなもんだが、異世界に来ての生活が始まるんだ。心躍らぬわ

けがない。

スキップしながら鼻歌交じりにってほど傍目から気持ち悪いことはしないが、心ときめかせてギルドの扉をあけ放つ。

さて、やってまいりましたギルド！さっきの相談所と同じで、案の定人が居ない。

ここも閉鎖してるのかと思ったらカウンターの向こうに人はいるらしい。下働きの斡旋をしてるギルドはどこか聞いてみるとしよう。

「あの、すいません」

「？……あぁ、はいはい。町中で祭りやってんのに、ギルドに来るなんて物好きね」

なんでいきなり毒づかれなきゃいけないんだ？さもめんどくさそうに対応するのはやめてほしい。

お姉さん美人なんだからそんな顔しないで……ぶっちゃけ怖いです。

「で？」

「はい？」

いや、いきなり「で？」とか言われても何にも出来ないんですが。

「はい？じゃなくてギルドカード出しなさいよ」

「持ってないんですけど……」

「えぇ～登録なの？もうめんどくさいわねぇ……わざわざこんな日に登録に来なくたっていいじゃない。まったく」

「いや、そうじゃなくて……」

お姉さんは人の話も聞かないでカウンターの下に潜り込んでがさごそと何かを探しているようだ。

「じゃあはい、このカードに血ぃ垂らして」

「いやだから……」

お姉さんはそう言って何かの金属でできたような板とナイフをカウンターに置いた。ていうか、話を聞け。

「もぅ、ただでさえめんどくさいんだから早くしてよ」

「っちょ！？」

お姉さんは、じれったそうに俺の手を掴むとナイフで指先に小さく傷をつける。ちくりとした痛みを伴い俺の血が一滴だけ板に落ちる。

「はいかんりょー。明日には手続きも終わるから取りに来るように。わかったら帰んな」

「……だから、俺はギルドに入りに来たんじゃないんだよ」

「は？」

ようやく要件を切り出せそうになったところでお姉さんは美人だが呆けたようにあんぐりと口を開けた。美人の間抜けな面ってのは初めて見たが、美人はどんな顔しても美人だ。

「ここって宿屋とかの下働きの斡旋してますか？」

「いやしてないよ。だってここ冒険者ギルドだし」

「じゃあ、下働きの斡旋をしてるのはどこのギルドですか？」

「一般労働ギルドだけど……」

「どこにあるんですか？」

先ほどまでと違い、どうにもお姉さんの歯切れが悪くなった。なんだか気まずそうな顔をしてるがどうしたんだろう。

「……あんたそこに行ってどうするつもり？」

「いや、とりあえずそういった仕事から始めてみようと思いまして」

いきなり異世界に召喚された勇者が下働きを始めるとかって言いたくはない。詳しい説明は省きたいところだ。なにせ勇者だからな、情けないところはできるだけ隠しておきたい。

「……」

「どうしたんですか？」

「……いや、悪いけどあんた一般労働ギルドには入れないよ」

「は？な、なんでですか？」

あれか？勇者はそんな情けない仕事をしてはいけないと法律で決まっているのか？

いや、お姉さんには俺が勇者だと説明してないし……服を見ればそれっぽいとはわかるのか？

なんでもいいけど、それは困る。

「だってあんた冒険者ギルドに登録されちゃったもん」

「へ？」

なぜ？ｗｈｙ？なにゆえ？

そんな書類とかにサインした覚えは一切ないんですが。

「さっき血を垂らしたカードがギルドカードなんだけど、あれってどこのギルドとも情報の共有がされてるんだよね。だからどこかのギルドに登録したら、別のギルドでは登録できないの」

「なんでですか！？別にいいじゃないですか！」

「まぁ規則だからしょうがないってやつよ。一応半年たったらギルドは脱退できるようになるからそれまでの辛抱ってやつね」

それまでに生活費が底ついて死にますって……働こうとしても冒険者の仕事でも死ねるっぽいし。

餓死するかそれ以外の死に方か……ある意味究極の選択だな。

「そうだ！だったらそのギルドカードを提出しなければいいじゃないですか。お姉さんがそれを登録しなければ……」

「あぁ、それは無理。登録自体は血液登録した瞬間に魔法で自動的に実行されるからもう手遅れ。明日までかかるのは書類上の事務仕事があるからだし」

……どうしようもねえな。完全に退路断たれたか？いや、まだどっかに抜け道があるはずだ。

「だったら、お姉さんのミスなんだからその辺無効にしてくださいよ」

「無理無理、私にそんな権限ないから」

「せめて上に掛け合ってくださいよ。こっちには命かかってんですから」

こっちはマジで、命がけだ。今後の人生すべてが今この瞬間にかかってると言っても過言じゃないだろう。

「無理だっつの。人間諦めが肝心なんだ、あきらめな」

いや、俺はあきらめない。あきらめたらそこで試合終了だと偉大な先生が言っていたんだ。

俺は絶対あきらめない。

そして、冒頭へと戻る。

「アリア君どうしたのかね？」

「あ、マスター……」

お姉さんの背後から現れたのは初老の男性だった。うぅ～ん、ナイスミドルって感じのダンディなおじ様だ。マスターってことは、ギルドマスターでいいんだよな？

「あの！」

「実は、ちょっとした手違いで彼のことうちのギルドに登録しちゃったんですよ。で、彼の方は一般労働ギルドに入りたかったらしかったんですけど、登録終わっちゃってるんで……」

「はぁ、なるほどね」

俺が話す前にお姉さんが説明してくれた。いや、俺に言わせなかったって言うのが正しいか？

下手なこと言われて困るのはお姉さんの方だからな。

「ふむ、困ったね。……君はなぜうちのギルドへ？」

「いや、相談所が閉鎖してたんで最寄りのギルドに来たんですよ。外は酔っぱらいばっかりだったから、その一般労働ギルドですか？そのギルドの場所を聞こうとしたんですけど、最寄りのギルドを教えられたんで、最悪ここで一般労働ギルドの場所を聞こうと思いまして」

「……なるほどね。服装を見たところ、君は勇者ってことでいいのかな？」

「あ、はい」

やっぱり、学生服着てるのは勇者ってみなされるんだろうな。事実だからどうでもいいけど。

「そうか……この世界に来たのはつい最近かね？」

「はい」

「なるほど、住む場所もないから、住み込みで働ける下働きをしようとしたってところかな？」

「……はい、そのとおりです」

ここまで見事に推理されるってことは俺みたいなやつは多いのか？でも、何十人も勇者がこの世界に召喚されるってことはそれだけ、地球から行方不明者が出るってことだろ？

そんな神隠しが頻発しているなんて話、聞いたことないしそんなに数が多いとは思えないけど、どうなんだろう？

「彼女から説明されただろうが、一度ギルドに登録されると半年は待たないと解除することができない。申し訳ないとは思うが、我々ではどうしようもないんだ」

「なんでですか？」

そもそも一つのギルドにしか登録できない理由がわからん。別に二つでも三つでも登録してもいいじゃないか。

「異世界から来た君には理解しがたいかもしれないが、基本的にギルドの仕事はすべてギルドカードに大きく依存しているんだ。仕事の受領、達成か失敗かの判断、報酬の受け取りのすべてをギルドカードが自動で行っている」

あの……ギルドカードってどんだけ高性能なんですか？

そもそも仕事の達成とか失敗とかの判断ってどうやってるんだよ。詳しいシステムの説明を要求する。

「ギルドカードはすべてのギルドで統一された規格のものが使われているが、中身が違う。冒険者ギルドであれば、冒険者ギルドの仕事に関してしか、判断できないんだ。確か、君たちの世界でいうテレビゲェムとかいうもので説明すると、ピーエスのゲームはロクヨンでできないとかだったかな？」

なんで、テレビゲームとか知ってるんだ？やっぱり、俺の前にこの世界に来ていた勇者たちがそんな表現をしたのか？というか、例えが古いわ。

まぁ、自分で言っててどんなものかわかってないみたいだし、マニュアルとかでそういう説明をしろってなってるっぽいな。

「だったら、もう一度労働者ギルドで登録すればいいんでしょ？もう、登録を取り消せとは言わないんで、場所だけ教えてもらえませんか？」

「……それもできないんだ」

なんでだよ！

あれだろ？ＰＳのゲームが６４で出来ないんだからＰＳ買えばいいって話じゃないのか！？

「ギルドカードは非常に優秀な魔法具だが、優秀であるだけに条件

がある。複数を所有した場合は情報が錯綜して処理できなくなるんだ。あぁ……たしか君の世界で言うところのえぇと、一つのメアドでアカウントは二つ作れないのと同じ感じで、この場合のメアドである人間は二つのギルドカードは持てない……だったかな？」

なんだそりゃ……アカウントなら消去して登録しなおせるだろ。いや、まぁなかなか面倒なシステムってことなのか？

ちょっと納得できないけど、どうしてもできないって言うなら仕方がない。

「わかりました。百歩譲って冒険者ギルドに登録されたってことはこの際かまいません。ただ、こんな事態になったんだから、冒険者ギルドの仕事として宿屋の下働きをするとかの特例を認めてください」

「悪いがそれは無理だ。同じギルドと名のつく組織だが、冒険者ギルドと一般労働ギルド、それに他のギルドはすべて別の組織だ。お互いに利権なんかも絡んでくるし、簡単に頭を下げたりも出来ないんだ」

いや、こっちは被害者だぞ？そんな理不尽な話があるか。

「そちらに都合があろうと、こっちは何も知らずに一方的に登録されたんですよ？組織にはいろいろと制約があるのはわかりますけど、もっと誠意のある対応とかできないんですか？」

「君の気持ちもよく理解できるよ。だから、こちらの不手際で君がこのギルドに登録された以上は、最大限の便宜を図らせてもらう。低危険度の仕事の報酬は通常の倍支払うし、基本的な装備の一式はこちらで用意する」

……冒険者ギルド内での便宜は図ってもらえるのか。だからってなぁ……

俺だって男の子（厨二）だから冒険者にあこがれている部分は多大にある。もしも才能がそっち方向なら喜んで冒険者になるつもりだった。だからって、こんな無理やりな展開で冒険者になるなんて嫌だ。

あぁ、そうさ。これは単なる俺のわがままだよ。冒険者になるときはいきなり期待の新人現る！みたいな感じで颯爽と登場したかったんだよ。

それを、自分の能力もわからない現段階で冒険者になるなんて……

「あとは、そうだね……住む場所のことだが、アリア君」

「はい？」

説得なんかはギルドマスターに一任した事件の張本人（アリアさん）は突然話を振られて、驚きに目を見開いてギルドマスターの方へ顔を向けた。

お姉さん、説明をギルドマスターがしてくれるからって、我関せずって感じでいるのはどうなんだ？

「君は確かギルド管理のアパルトメントに一人で住んでいたよね？」

「えぇ……まぁ……一応……あ！もしかして、あそこに住ませる気ですか！？ダメですよ、今あそこ満室ですから。いくら、ギルドの失態とは言え、今住んでる住人を追い出すようなまねできませんから」

ギルドのって……いや、まぁギルドのって言えばギルドの失態だけど、諸悪の根源はあなたですよね？

「ははは、いくら私でもそんな真似はしないさ。ただね？たしかあのアパルトメントの間取りはキッチンにリビング、あとは個室が２つだったよね？」

「……ま、まさか……」

「君の部屋は個室がひとつ空いているわけだ」

「あの……マスター？」

「私が言いたいことはわかってもらえたかな？」

「あの……私、女ですよ？いくらなんでも見ず知らずの男と一緒に暮らすのは……」

「ははは、まさか彼を手違いで登録した張本人が、断るはずがないよね？」

「……」

……いや、いきなり見ず知らずの女の人の家に厄介になるのはこっちとしても戸惑うんですけど……

そりゃ、このお姉さんは美人だしい、一緒に暮らせるってんなら嬉しいことは嬉しいけど、ぶっちゃけ戸惑いの方が強いし、このままの空気だとめちゃめちゃ気まずいんですけど？

「で、アリア君。私の言いたいことは理解してもらえたかな？私としても、ギルドマスターとしての強権を振るって、無理やりと言うのは好ましくはないんだ」

あの、それってほとんど強権振るってるようなもんですよね？

なんか、お姉さんが気の毒になってきた……

「あぁっ、もう！わかりましたよ！私の家に住ませればいいんでしょ！？」

「君の所に彼を住まわせてくれるのかい？それは助かるよ」

……マスターさん、いけしゃあしゃあとよく言えますね。

お姉さんに心の中で合掌しつつ、マスターさんの言葉を待つ。

「というわけで、当面の間は君の住む家もたった今こちらで用意した。どうだろう、とりあえず登録が解除できるまではこのギルドで仕事をして、時を待ってはもらえないだろうか？」

登録は解除できない、冒険者ギルドで仕事をする上でサポートをしてくれる。俺に選択肢なんて残されちゃいないか……

「わかりました。よろしくお願いします」

「そうかい、それはよかった。じゃあ、とりあえずは冒険者ギルドの説明と君に渡す装備なんかの説明をするから、２階にある私の応接室に来てもらえるかな？」

ギルドマスターの応接室？そんなところで説明されんの！？

まぁ、こっちとしてはおとなしく指示に従うほかないから、とりあえずは行くけどさ……てか、それようの部屋とかないのかね？

俺は、受付にいたお姉さんとは別のギルドの職員さんに案内されて２階へと続く階段を上って行った。

……ギルドマスターの部屋ってどんなんなんだろ。

――――side　out

まさか、自分の家に今日あったばかりの少年……いやさ、青年を住まわせることになるとは思っていなかったアリアは、心の中で涙を流しつつギルドマスターである、キューマの言葉に我が耳を疑う思いだった。

彼を自分の部屋に住ませるという時点でも驚きだったが、こんなこの世界のことを何も知らないような青年をキューマが自らの応接室で応対するなど思ってもみなかったからだ。

そもそもが、彼のような勇者は1年で数名から数十名が冒険者ギルドに登録される。彼のような事情で登録されることは滅多にないが、必ずしも0ではない。だいたい、2年に1回くらいは似たような事例がギルド内で話題になる。

今までの例を見れば、装備の1つか2つとしばらく宿屋で暮らせる程度の当面の生活費を渡して、ギルドの簡単な仕事を説明して終わると言うのが対処の仕方だった。

当然のことだが、その説得などの部分は各町にある冒険者ギルドのマスターが行うのが常ではあるが、彼に対して提示された条件はあまりにも破格だ。

「マスター……どういうつもりですか？」

「なにがかね？」

彼を自分の家に住まわせるという事実に、カウンターに突っ伏していたアリアはキューマを見上げながら尋ねた。

「彼に提示した条件、普通じゃないです。それに説明なんかは一般の応接室があるじゃないですか。それをわざわざギルドマスターの執務室で説明するなんて、今までに聞いてきたトラブルの対処でも聞いたことがないです」

青年、ガイに伝えたキューマの応接室とはギルドマスターとしての執務室も兼ねている。当然、機密にかかわるような書類などは別室にて保管されているが、マスターの執務室での応対など、どこぞの貴族でもなければありえないことだ。少なくとも、一介の冒険者との話し合いに使われることなどありえない。

「提示した条件に何か不満でも？」

「今までにあった同類の事例の対処法から見ても、報酬を倍にするだとか、装備一式を渡すなんてなかったはずです」

「そうだな。今までにはないことだ」

「だったら……」

「だがね、アリア君」

「？」

「彼にはなにかある」

「なにか……ですか？」

「あぁ、長年ギルドマスターなんてやってると、その人物がどんな人間か見ただけである程度は判断できるようになるもんだ。君だってそうだろう？」

「まぁ、マスターはやってませんけど、受付も長いですからね……確かに言われてみると、受付した時にその人がどのくらいのランクかってなんとなく、わかりますけど」

少なくとも、あの青年にはそんな冒険者としての空気なんてみじんも感じられなかった。

当たり前だろう、アリアが感じ取っているのは冒険者としての経験から纏うようになった空気をなんとなく感じ取っているのだから、なんの経験もないガイの纏う空気など感じ取れるはずがない。

「まぁ、人生経験の差だな。彼は、なにかある」

「……もしかして耄碌したんじゃないですか？」

「……アリア君」

「はい？」

「今日の失敗について、明日の出勤前までに始末書を３００枚書いて提出しなさい。あと、減給１か月だ」

「え”！？」

ガイの応対のために、自室へと戻っていくキューマの後姿を見送りながら、アリアはさめざめと泣いた。

なんで、自分がこんな目に合わなくてはいけないのか……

古き人はよく言ったものだ。自業自得、口は災いの元、短気は損気、弱り目に祟り目、全部あてはまっている自分が悲しかった。

4話　なぜか冒険者になってしまいました（後書き）

遅くなりました。ちょっとプライベートがバタバタして更新が遅くなってしまいました。

モチベーションが下がったとか、ネタに詰まったとかじゃないのでご安心ください。

さて、基本的に旧作の5話から進行していないのに、文章量は倍以上になりました。
しかもギルマスに名前が！？

説得のし方なんかが、けっこう力技になってしまいましたが、ご容赦ください。

5話　新たに装備を手に入れました

俺の名前は獅子王　ガイ、勇気あるＧＧＧの隊員……ではない。勇者……らしい。ちなみに本名。

俺は今、冒険者ギルドのギルドマスターの応接室にいる。なんか、いかにもと言った風情の執務机にいろんな本やファイルなんかが並んだ本棚。そして、部屋の中央に置かれた豪奢な椅子と妙につややかな光沢を放つ机が置かれている。

想像以上に豪華であっても想像以下ではないと思う。貧困な俺のボキャブラリーではこの部屋の豪華さをなんとも説明しづらい。

まぁ、さすがにふかふかのソファってのはこの世界にないのか、椅子は木製だったけどソファに負けないぐらいすわり心地は抜群だ。

「さて、まずは自己紹介をさせてもらおう。この街で冒険者ギルドのギルドマスターをしているキューマ・ベキだ」

ギルマス、キューマさんはなんとも落ち着いた雰囲気のオジサマだ。見た目と雰囲気だけだったらジェントルマンってこういう人を言うんじゃないか？って思える。

スーツみたいな服を着こなし、蓄えられた髭もダンディの一言に尽きる。

「獅子王　ガイ、先日この世界に召喚された勇者です」

一応、キューマさんもわかってるだろうけど、勇者だってことをもう一度言っておく。いや、俺自身勇者だなんて自覚は全然ないですけどね？

「ふむ、不躾で悪いがガイ君。君はこの世界に来てどのくらいになるのかね？」

「今日で2日目です」

「2日？それはまた、ずいぶんと面白い時期に召喚されたものだね」

まぁ、召喚された当日に国が亡びるんだから、面白い時期だろうな。ほんと、国が亡びるなんて誰が原因でそんな大事になったのやら。

「しかし、2日でどうやってこの国……いや、もうバルデンフェルト領だな。どうやってこの街へ来たんだい？」

「どうやって……ってのは？」

「隣国だったバルデンフェルトにしろリエルドにしろ、召喚の神殿からこの街までは早馬を潰しながら走り続けても4日はかかる。それをどうやって、召喚されて2日でこの街まで？」

「どうやってもなにも、俺はこの街で召喚されたんですよ」

「この、街で？」

「はい」

「なるほど……あぁ、すまない話題がそれてしまったね。君をこの部屋に呼んだのはギルドの説明のためだった」

キューマさんはそう言って、一枚の板を机の上に置いた。

その板は、漆塗りっぽい机の光沢とはまた違う、かといって金属らしい光沢とも違う光方をしていた。大きさはテレカや免許証とそう大差ないみたいだ。これ何製？

「これが明日、君に渡されるギルドカードと同じものだ。血液による登録をすることでその人物の情報を記録する。たしか……ディエヌエィとか言うんだったかな、君の世界では」

こんなちゃちな板がＤＮＡを記録する？まぁ、地球での道具だってそんなに大きくないのか？いや、詳しいことなんて何も知らないけど。

「そして、この板がギルドに所属する者にとっての身分証であり、成果の一端だ」

「？」

「このカードはさっきも説明した通り、複雑な魔法がかけられていてね。一般的には特殊魔法と呼ばれる、成立から３００年以上が過ぎた今も詳しい原理なんかは解明されていない魔法なんだ。その魔法により、登録者のデータの記録、更新、実績の記録、更新、物品の譲渡契約、売買契約、様々な部分で使われている」

いや、どんなカードですか？ちょっと高性能すぎるんじゃない？だって記録はわかるよ。いや、わからないけど納得はできる。だけど、更新ってなんですか？どうやって判断してるんですか？

つか、解明してない技術ってことはオーパーツじゃん。それを普通に使ってるんですかあんたらは！

「……その、ギルドカードって貴重なんじゃないですか？」

オーパーツなくしたりしたらすんごい金額取られたりするんじゃないの？っていうか、それは貸与？それとも付与？

「いや、そんなことはない。どういった原理かはわかっていないが、作り方はわかっている。これも大量生産されたものの一つだから、なくしたところで少しの再発行手数料で作り直せるさ」

あぁ、俺以外にもそんな心配する人いるんでしょうね。なんか、説明が手馴れてますよ……いや、ギルマスがわざわざ説明することってあるのか？下積みが長かったとか？

「とりあえず覚えておいてほしいことは、このカードは君が冒険者として生きていくうえで、冒険中でも、普段の生活でも大事にしなくてはいけないということだ」

「普段の生活でも？」

「あぁ。さっきも言ったが、売買の契約つまり、普通の買い物にも使えると言うことだ。基本的にギルドの報酬はギルドカード内にデータとして記録される。使えない場所もあるから、多少はギルドで現金化して受け取る必要はあるだろうが、この街で買い物をするなら、カードさえあれば問題はない」

その後も、カードの説明を続けられたけど、それはなんでそんなに高性能なんですか？

このちっぽけなカード一枚が、クレジットカードにキャッシュカードとして使えるほか、各種契約書の保存機能、さらには一般人でも操れるレベルの魔力を流し込むことで、その場でお互いに契約の魔法をかけることができるとか……これってある種のチートアイテムじゃないですか？

「さて、次に君がこれから行う冒険者ギルドに依頼されている仕事についてだが、基本的には街の外での活動が中心になる。時折、用

心棒みたいな依頼もあるが、あれはまぁ例外ってやつだ」

そもそも戦闘力皆無……いや、不明ってことにしておこう。戦闘力不明な俺では用心棒なんてできるわけない。

「大まかに分類すると、冒険者ギルドの仕事は、採集、討伐、探索の3つに分けられる」

まぁ、名前のままだな。採集は、依頼主が欲しいものを取ってくるだけ。討伐は、依頼されたモンスターを倒すだけ。探索ってのは……ダンジョンとかを調べることか？

「前の2つはわかるんですけど、探索っていうのは？」

「そのままの意味だ。街の外にあるダンジョンに潜ることや、未開拓の地を調べることっていうのが一番多い仕事だな」

なんでもこの世界には、突如何もなかった場所に小さな山？みたいなものが出現し、その山の麓にある穴に入ると迷宮と言われるダンジョンが存在するらしい。

一般的には最下層に存在するボスを倒すとダンジョンは消滅するらしいのだが、実際に消滅したダンジョンは両手の数で数えられる程度のものらしい。

「先日もこの街の近くにダンジョンが出現した。何名かの冒険者が探索に向かったが、半数は重症、４分の１が死亡した」

……危なくない？ダンジョンって、マジで危なくない？

「……でも、ダンジョンってのは探索しなくちゃいけないものなんですか？死ぬような危険な目に遭うくらいなら、ちょっかい出さなければいいじゃないですか」

「それが、そうもいかなくてね。定期的にモンスターを間引いておかないと、迷宮からモンスターが外に出てくるようになる。そうすると近隣にある町や村が危ないし、街道も安心して往来することができない」

「……なるほど」

迷宮の出現理由や、ボスを倒すことで消滅する詳しい原理なんかは解明されてないらしい。この世界では、そういうものと半ば納得と言うか諦めているとか。

しかも、迷宮ではＲＰＧよろしくアイテムが散在しているらしい。比較的上の階層では、それほど貴重なものはないらしいが、ボスに近づけば近づくほどレア度の高いアイテムが手に入るとか。

さすがに、モンスターを倒して金を拾うことはできないが、死骸から売れる部位をはぎ取ることで結構な金になるとか……どこのモ

ン●ン？

「君にお勧めするのは、やはり採集の仕事になる。気を付けてさえいれば、危険なモンスターに会うこともなく仕事を進めることができる」

まぁ、そうでしょうね。討伐の依頼が出されるようなモンスターなんて、凶暴だとか人を殺したとかって理由で依頼が出されるに決まってる。そんな一般人が相手にできないようなモンスターを、俺が相手できるはずがない。

「さて、仕事についてはだいたい説明も終わったが、なにか質問はあるかね？」

「ん～……今のところは大丈夫だと思います」

まぁ、仕事を続けていくうちに疑問は出てくるかもしれないが、それはその時に聞けばいい。採集だったら死ぬ危険も少ないって言うし、油断は危ないかもしれないけど、気を張りすぎる必要はないだろ。

「そうかい？では、君に渡す装備を決めたいのだが、君は何が得意かね？」

「さぁ？」

物語の主人公みたいに剣道をやってただとか、武道の経験がある
なんて設定が俺にあるわけない。運動神経が悪いとは言わないが、
武道の経験なんて、中学の時に授業でやった柔道と高校の授業で選
択した剣道くらいのもんだ。

授業で習うレベルなんて、素人に毛が生えた程度。本職の人間と
比べられるようなもんじゃない。いや、でも剣道やってたし、ある
意味では剣がいいのか？でも、この世界に刀なんてあるのか？

「なら、君の世界には侍とか言うものがいたんだろ？なんとなくで
も動きが分かるぶん、剣がいいだろうな」

言いながらキューマさんは女性職員さんに言っていくつかの武器
を持ってこさせた。

けっこう重そうなロングソード、刀に近いがどちらかというとカ
トラスっぽい片刃剣、俺の身長ぐらいの長さがある大剣、皮っぽい
テカり具合の鎧、銅製の鎧、先の2つと違い全身を鉄で覆うタイプ
のプレートメイル（バラバラだけど）。

他にもよくわからん武器なんかがところ狭しと並べられる。さす
がに、一人でこれだけのものを持ってこれるわけないので、持って
きたのは男性職員を中心とした数名だが、プレートメイルを一式抱
えていた男の人なんか、俺よりも確実に力がありそうなのに息を切
らしている。

プレートメイルなんかは、訓練された人間なら普通に動けるようなものらしいけど、事務仕事中心だろうギルドの職員さんや、俺みたいに休日は日がな1日、家に籠ってゲームしてるような人間には重すぎる装備だろう。

プレートメイルと同じ理由で大剣もアウトだな。というか、ゲームならともかく、あんなデカい武器を人間が振りまわせるなんて到底思えないんだが、どうなんだろう？

「好きなものを選ぶといい。引退した冒険者の中古品や、冒険者が迷宮の上の階層で見つかったものばかりで申し訳ないんだがね」

いや、種類の豊富さから見てもあんまり気にしなくていいですよ？まぁ、中古品だと手入れとかしないといけないかもしれないから、ちょっと微妙な感じはするけど。

さて、どうするか……いくらなんでも、3つも4つも貰うのはちょっと気が引ける。というか、持って帰るのも大変だ。せいぜい武器と防具2つずつってのがいいところだな。

いくつか手に取ってみるけど、重いもの軽いものデカいもの小さいものと種類は本当に多い。

移動のことなんかを考えるとあんまり重いものはいやだけど、金属の重さはすなわち防御力の高さだろう。命の危険を考えると重いからいやだなんて言えない。

だからって、移動できないぐらい重いものは論外。適度な重さで

頑丈そうなやつがいいな。ってか、気持ち銅より鉄の方が軽いって驚きだ。なんか、銅の方が軽くてもろく、鉄の方が重くて硬いってイメージあったんだけど……

まあいいや。とりあえず防具はこの鉄の鎧にしよう。前面は胸と腹、後面は背中全体を守るタイプで、肩は出てるから、腕も動かしやすそうだし。見た目がなんとなくサ●ヤ人の戦闘服っぽいけど、まぁそれは、気にしない方向で。

でも、そうすると肩から腕までが守れないし、手甲も貰っておこう。

あとは武器だけど……どうすっかな？

手に取って振ってみたりするけど、なんとなくしっくりこない。最初に目が入った、ロングソードは結構な大きさと重さがあるから、ちょっと取り回しに難があるし、細剣は軽くていいけど、なんか頼りない。

形的に日本刀に近いものがあるし、カトラスがいいかな……

「？」

カトラスを取ろうと手を伸ばしたところでそれの存在に気が付いた。

刃は細く、長い。だいたい5センチぐらいの幅で、1メートルほどの刃と他のものに比べて少し長く作られている柄。

手に取ってみると、なんとなく他の剣とは違った印象を受ける。なんて言えばいいのか……そう剣を振った感触が違う。他の剣は刃の方が重いから、振った時に遠心力で振り回される感じがするのだが、この剣は柄が重いからそれがあまりない。

「これにします」

「これを？いや、刀身の長い剣がいいのだったら、こっちのツーハンデットソードの方がいいんじゃないかね？」

どうやら、俺が最初に手に取った剣はロングソードじゃなくてツーハンデットソードと言うらしい。ツーハンデットってことは両手で持つ剣ってことかな？

「いえ、こっちの剣の方がしっくりくるんですよ」

「ふむ……得意な武器はないと言っていたが、バスタードの訓練を受けていたのかい？」

「バスタード？この剣のことですか？」

「なんだ、知らずに選んだのか？バスタードは訓練次第では、両手持ち、片手持ち両方使え、刃が長いことで間合いが広いなど利点はあるが、普通の剣とは重心や扱い方が違うから、あまり一般的とは言えない武器だ」

なるほど、さっきの俺が感じてた他の剣と違うと感じたのは重心が違うからか。バスタードってことは……あぁ……破壊者？なんか、かっこいいじゃん。

副装備にグルカナイフを選び、それを腰に差す。誰だ、なんでグルカを選ぶんだって言ったやつ！いいじゃん、かっこいいじゃんグルカナイフ！ずっと欲しかったけど、日本じゃ使い道がないから買えなかったんだ、趣味に走って何が悪い！

まぁ、副装備って言うには、ちょっとデカいけどその分、便利な使い道がたくさんあるはずだ。うん、そういうことにしておこう。

一通り選んだ装備を身に着けて、体を動かしてみる。重さは全部で１０キロちょっとぐらいかな？少し重いけど、これは慣れるしかないな。このぐらいの重さだったらトレーニングすれば大丈夫だろ。……たぶん。

説明が終わり、装備も選び終わったので、帰り支度を整えたお姉さん。アリアさんだったか？と合流して家へと案内してもらう。

帰り道がすっごい気まずいです。

「あの……俺は獅子王　ガイです。これから、ご迷惑おかけするか

と思いますが、よろしくお願いします」

「アリア・ロントリーよ……そうね、すっごい迷惑」

……あの、アリアさん。それはこれからじゃなくて、今このときの感想ですよね？

諸手を挙げて、キューマさんの提案に賛同してしまったけど、早まったかもしれない。なにせ、俺を冒険者ギルドに引き込んだ張本人だ。

今日一日の感想だけで言うなら、短気でめんどくさがりってところか？

「なんてね。そうは言っても、あんたがうちに来る原因を作ったのは私なんだから、あんたを責めたって仕方ないわよ」

一応、自覚はあるんですね。

「ま、半年の我慢だしね。短いって言うほどじゃないけど、長くもないし、自業自得ってあきらめるわよ」

苦い笑みを浮かべながら、アリアさんはこちらに片手を差し出してきた。

「これからは一緒に暮らすんだし、ギスギスすんのはいやでしょ？ま、よろしく」

「……よろしくおねがいします」

俺はアリアさんの手を取り、握手を交わす。思ってたより、彼女はいい人なのかもしれない。脳内での評価は見直す必要があるな。

夕暮れ時の街の中を二人で歩く。

アリアさんの手はすべすべしていて気持ちよかった　マル

5話　新たに装備を手に入れました（後書き）

またまた、更新が遅くなってしまいました。申し訳ないです。

さて、フルネームが登場したキューマ氏ですが、お気づきの方いらっしゃるでしょうか？まぁ、あえて言及はしませんが、気づいた方はどうぞお1人で、にやにやとなさってください。

4話、5話と説明なんかが長くなってしまいましたが、次回から冒険が始まります。

ようやくここまでこれたって感じですが、まだまだ先は長いです。

6話　仲間が増えました？

俺の名前は獅子王　ガイ、勇気あるＧＧＧの隊員……ではない。冒険者兼一応は勇者だ。ちなみに本名。

冒険者ギルドでの悶着から3日が過ぎた今日、俺はついにギルドの仕事を受けて森へとやってきた。

さすがに、武器を持ってるからって即実践ってわけにはいかない。いくら安全性が高い採集系の仕事であっても、モンスターと出くわす可能性は０じゃない。

モンスターと出くわしても、倒すなり逃げ出すなりの対処ができるよう武器の扱い方を勉強した。今ではバスタードを小枝のように……振るえませんよ？いや、３日程度でそんな、使いこなせるような武器じゃありません。

ただ、比較的弱いモンスターが多いこの森ならば、大丈夫だろうとギルドからの依頼で、俺を指導してくれた冒険者ギルドの人（現役冒険者）も言っていた。

というわけで、ドメドメ草２０株を採集する仕事を受けて、この森に来たわけなんですが、モンスターが思いのほか出てきません。

１５分くらい歩いていれば、スライム（姿形が某ＲＰＧと同じかは不明）やゴブリン（これもまた某ＲＰＧと姿形が同じかは不明）が出て来るらしいんだが、１時間ほど歩いているのに一度も見かけない。というか、鳥以外に動物すら見かけません。

ドメドメ草が群生している場所は、ここからさらに１０分ほど進んだ場所にあるらしい。

ドメドメ草なんて見たことなかった俺は、そのことをギルドの受付のお姉さんに相談したところ、見本にドメドメ草を見してもらい、生えている場所を教えてもらった。

お姉さん曰く、道に沿って、とは言っても草木が刈られ、地面が露出しているだけのけもの道みたいなもんに沿って歩いていれば、猿でも行けるって言われた。

で、言われた通り道なりに歩いているわけだが、退屈だな。

不意にすぐそこの茂みが揺れた。間違っても風に揺れたなんてことはない、一か所だけ不自然な動きをしてた。

「？」

腰に差したバスタードの柄に手をかけ、じっと身構える。とうとう、モンスターが現れたのか？

しかし、いつまでたっても茂みから何かが姿を現すことはない。

「誰かいるのか？」

けが人でもいたのか？だとしたらうめき声とか聞こえるだろうし、

普通に誰か人がいたんなら、なんかしら動きがあるはず……

「キュウ……」

……鳴き声？動物か？

茂みをかき分けて向こう側を覗き込んでみると、そこには子猫みたいな大きさの小動物が一匹いた。

黄色っぽい毛並みで、頭や体の大きさに対して耳が異様に大きい。頭から尻尾の先までで４０センチくらい、耳の長さは２０センチくらいか？なんとなく見た目は風●谷のナウ●カに出てくるキツネリスっぽい。

怪我をしているのか知らないが、なんか弱ってる。

俺は、小動物を刺激しないようにゆっくりと近づき、逃げないのを確認するとすぐそばで屈んだ。

「どうした、怪我でもしてるのか？」

野生の動物が言葉をわかるはずなんてないのに話しかけてしまうのはなぜだろう？俺の予想に反して小動物は首を横に振った。え、わかんの？

「お前、俺の言ってることがわかるのか？」

「キュウ……」

どうやら、わかるらしい。俺の質問に答えるように、首を縦に振って一つ鳴いた。まさにファンタジー……

「怪我じゃないなら、どうしたんだ？腹でも減ってるのか？」

「……キュイ」

なるほど、腹が減ってるのか。

俺は腰に下げた袋の中から、適当に選んだ干し肉を地面に置いた。万が一迷った時や、腹が減った時のために持ってきていた携行食だ。まぁ、一つくらいなくなっても、問題ない……と思う。

それにしても、こんな小動物じゃ、モンスターがいる森の中で生きていけるのか？自力でエサも捕まえられないようじゃ、野生として失格だろ。

まぁ、今回は俺が助けてやったからよかったけど、こいつはこれからどうするんだろうな。

一心不乱に干し肉をむさぼっている小動物を軽く撫でてやりながら、ぼんやりとそんなことを考える。食事の邪魔をしているような感じだが、存外、邪険にはされないもんだ。

「さて、行くか……」

ここからドメドメ草が群生している場所まではそんなに遠くないはずだ。小動物が、食事を終えるのを見届けるとすくっと立ち上がって、歩き始める。

「じゃ、またな」

もう会えないだろうけど、そう言ってしまうのはなぜだろう。

まぁ、モンスターも出るっていう森で初めて会ったのが、あんな小動物ってのは以外と言うか、なんと言うか……

いい加減、モンスターの一匹ぐらいは出てきてほしい。いや、集団で出てこられたら困るけど。

しばらく歩き続けていると、徐々に道が開けていき、最終的には広い空間にたどり着く。ここがドメドメ草の群生している場所のはずだ。

きょろきょろとあたりを見回すと、見本として見せてもらったドメドメ草と同じ草が一本だけ生えている。群生っていうぐらいだから、密集して生えている場所があるはずだ。

なにか黒い影のようなものが動くのを視界の隅でとらえたので、

ちらりと目を向けてみると、そこにはドメドメ草がたくさん生えていた……はずだ。

なんかいるんですけど……

デカい、なんだろボスファ●ゴ？それともおっこ●ぬし様？とりあえず、猪の親玉みたいなのがいる。

あれじゃない？ちょっとデカすぎない？普通、猪って1メートルくらいじゃないの？どう見ても4倍はデカいぞ……

「ブヒェァァァ！」

鳴き声は、ブヒーじゃないのか！？

なぜだか知らんけど、俺は敵とみなされてしまったらしい。何にもしてないぞ！？

突撃してくる猪の親玉、めんどいからボス猪にしておこう。部下が見当たらないのにボス、これいかに？なんて、くだらないことを考えている場合じゃない。

原付ぐらいのスピードは出てそうな勢いで突進してくるボス猪をひらりと右に飛んで回避する。

「っふ、猪突猛進の馬鹿たれはまっすぐしか進めないんだろ？」

なんてかっこつけたことを言った矢先、ボス猪は急停止した。俺のいる位置を瞬時に悟ったのか、右に飛んで横っ飛びの体当たり。

「ぐほぁっ！」

猪は、直進しか出来ないんじゃないのか！？いや、よく考えたら、そんな生物が進化の過程で、淘汰されないはずがないか……

体当たりで2メートルはすっ飛ばされたが、慌てて体を起こすと同時に腰に差してあったバスタードを抜いて、両手で構える。

はっきり言って、体中が痛い。

ふっとばされた時にうまく受け身を取れなかった。そのせいで、足を痛めたっぽいから、逃げるのもきつそうだ。

またもこちらに向き直ると同時に突進してくるボス猪の攻撃を左の前に出ることで回避する。真横に立ったら、また体当たりを喰らってしまうから、ボス猪の進行方向とは逆の位置に抜けるしか避ける手段はない。

ついでとばかりに、すれ違いざまにボス猪の体に剣を立ててやったけど、うまく刺さらなかったのか少しばかりの皮が切れただけみたいだ。

「おいおい、今の俺の実力なら、余裕じゃなかったのかよ……」

うそつき！今の俺の実力なら、この森のモンスターは余裕って言ってたじゃないか！

この場にいない先輩冒険者に心の中で、文句を言ってやるが、生憎と返事なんか返ってこない。というか、こんな状況で返事が返ってきても困る。

なんて、くだらないことを考えている場合じゃない。

こっちの機動力は、足を痛めているせいでガタガタ、攻撃も剣の振り方の基礎を知っている程度。あっちの機動力は直進に関しては原付並み、攻撃は巨体を活かした体当たり。……勝てる気がしない。

剣の指導をしてくれた冒険者以外にも、心構えや冒険をする上での生き残り方なんかを教えてもらってはいるが、すいません……なんにも活かせそうにありません。

冷静になってお互いの戦力を分析しろ、なんて言われてたからそれぐらいは何とかなるけど、自分より明らかに上な相手からは逃げろ、なんて出来そうにない。

そもそもが、こっちがケガをしないようにするのを前提とした冒険者の心構えを、怪我した今に実践できるわけがないって。

「っと」

こっちが考えていることなどお構いなしに、ボス猪はまたも突撃してきた。それも避けると同時に切りつけてやる。

今のところはなんとか避けられるけど、このまま持久戦になったりしたらまずい。

運動不足だった元高校生ＶＳ野性を生きるボス猪。どっちのスタミナが上かなんて比べるまでもない。

勝ち目なしじゃん……

逃げられない、勝てない、どうしようもない。ないないないの３拍子。

避けてから切るのではなく、避けてから目を突くか？いや、バスタードは切るのには適してるけど、突くのにはあんまり向いてないしな……

こりもせずに突撃してくるボス猪の攻撃を避ける。とりあえず、目を狙って剣を振るってみるが、あたったのは額の上あたり。まぁ、俺の実力で、激しく動きながら狙った場所を斬れるわけないな。

狙いすぎて動きが止まってしまった俺を、ボス猪は横っ飛びの体当たりで吹っ飛ばす。

無駄な抵抗をする俺に、なかなか腹を立てていらっしゃるようです……

バスタードを杖代わりにしてなんとか立ち上がるのと、ボス猪が突進してくるのはほとんど同時だった。

やばい、足にきてる……防具類が重くてうごけねぇ……

死んだっぽい。頭がそう判断したのと、何かが俺とボス猪の戦いに割り込んだのもほとんど同時だった。

「ブゥヒュエァァァ！」

悲鳴を上げながら足を止めたボス猪。勢いが殺しきれなかったのか、地面に沈み込むように倒れこんだ。

「な、なんだ！？」

状況が全く分からん。何が起きたんだ？

突撃してくるボス猪の足元を、何か黒い小さな影が通り過ぎたのは目の端でとらえたけど、速すぎてなんだったのかはわからなかった。

「キュイ！」

「しょう……どうぶつ？」

何が起きたのかわからない俺の耳に飛び込んできたのは、元気よ

く鳴く小動物の声だった。こいつはさっき干し肉をやったあいつなのか？

なんか、白っぽい光に包まれて全身の毛が逆立ってるから、なんとなく雰囲気が違うけど、たぶんそうだろう。いや、似たような小動物が他にもいたかもしんないけど、たぶんアイツだと思う。

あ、やばい。よそ見をしてる場合じゃなかった。

慌ててボス猪に視線を向けるともがき苦しんでるだけで、起き上がって攻撃を再開しようとしていない。

何が起きたんだ？と思ったが、俺の目はどうやら節穴だったらしい。

次第に広がっていくおびただしい量の血液、流れ出ているのはボス猪の体からだ。よくよく見てみると片足がなくなり、体に穴が開いている。……え、なにごと！？

ボス猪の体に開いた穴は直径３０センチほど、ちょうどあの小動物がくぐれるくらいの大きさだ。

……まさかねぇ……

「……お前がやったのか？」

「キュイ！」

恐る恐る尋ねる俺に、小動物は元気のいい返事を返してくれました。っちょ、小動物のくせに強すぎだろ……なんでこんなに強いのに、獲物の一匹も捕まえられなかったんだ？

俺の疑問をよそに、小動物は俺の肩の上に飛び乗って、俺の首筋を舐めた。なんか、なめられた場所は、さっきからひりひりしてたし、吹っ飛ばされた時に擦りむきでもしたのかな？

傷をなめるあたり、こいつは俺に敵意はないんだろう。というか、微妙に重いです。いや、軽いんだけど、膝ががくがくしてる今の状態じゃ、ちょっときついんだよ……

「助けてくれたんだな、ありがとう」

「キュイ！」

お礼を言って頭をなでてやる俺に、小動物は気にするなとでも言うように一鳴きした。うん、さっきも思ったけど、こいつはなかなか可愛いぞ。

とりあえず、俺は敵がいなくなったことに安心し、その場にぐったりとあぐらをかいて座り込んだ。

ほんと疲れた。まぁ、最終的に俺はなんにもしてないようなもんだけど、精神的にはほんと疲れた。

こんな化け物猪がいるなんて聞いてないし。

それにしても、こいつがやったってのはいいにしても、いったいどうやってこんな穴開けたんだ？

ちらりと小動物に視線を向けてみるが、いつの間にか座り込んだ俺の膝の上で丸くなっている。……いつの間に。

でも、さっきの白っぽい光は消えてるし、逆立ってた毛もおとなしくなってる。魔法かなんかを使ったってことか？

まぁいいや。そんなこと気にしても仕方ないだろ。

1時間ほど休憩して、なんとかダメージも引いたみたいだ。さっさと仕事を終わらせて帰らないと、このままじゃ夜になっちまう。

いつまでたっても膝の上や肩の上なんかに乗って、俺から離れようとしない小動物のことはもう、あきらめた。完全に俺についてくる気だなこいつは……

肩の上に乗った小動物のことは気にしないで、あたりを見回してドメドメ草を探す。けっこうな数が生えていたのだが、ほとんどが食われかけだったり、踏みつけられたりしていて完全な状態のものがほとんどない。

……やばいな、完全な状態じゃないと引き取れないとか言ってたのに……

なんでも、傷つけられたり、踏まれたりすると成分が変わって薬

にならないんだとか。

つまりは、この荒れ果てたドメドメ草の群生地帯で、傷一つないドメドメ草を探せと……

くそ、踏んだり蹴ったりだよ！

ま、危険はもうなくなったみたいだし、遅くならない程度にゆっくり探すか。

結局、無事に採取できたドメドメ草は１９株でした……あれ、足りない？

7話　仕事に失敗しました

俺の名前は・・・（後略）。

七転八起……じゃない、七転八倒……これでもない、七難八苦……これだ。

七難八苦のドメドメ草採取の仕事を終えて街へと帰ってきました。巨大な猪に襲われたり、猪に食われたり踏まれたりして、ドメドメ草を探すのが大変だったりと本当に疲れた。

だから、それが報われてもいいと思ってたんだ。少なくとも、俺は……

「では、ドメドメ草の採取は失敗ということですね。成功時の獲得ポイントの1，5倍、15ポイントの減点です」

……マジですか？

パリッとした制服に身を包み、容姿端麗、たぶん仕事も出来そうに見える。にっこりと浮かべられた完璧な営業スマイルを見た限り、優秀そうな受付のお姉さんだが、容赦ってものは持ち合わせていないみたいだ。

「でも、あんなデカい猪が出るなんて聞いてませんよ？」

「それらの突発的なトラブルに対応するのも冒険者としての仕事に含まれます。たとえ、自然にドメドメ草が枯れていたとしても、あらゆる手段を講じて手に入れる方法はあったはずです」

……いや、確かにその通りって言えば、その通りですけどね？

「それに、ギルドカードの方で行われている自動査定での判断が、失敗となっていますので、こちらで判定を変えようとしてもできませんので」

……だったら、諦めるしかないか。

キューマさんが言っていたが、ギルドカードの決定は絶対らしい。作ることはできるが、どういった理論で動いているのかはわかっていない。自動で中身は更新されていくが、それがどうやってなされているのかはわかっていないとか。

ならば、自己申告制にすればいいのかとも思ったが、申告制にすれば、必ずと言っていいほど嘘の報告をする人間は出てくる。たとえそれが悪意を持っていなくても、例えば討伐の仕事で、本人は討伐したつもりでも止めをさせていないような状況だって出てくる。それらの問題が起こらぬよう、ギルドカードを使っている以上、ギルドカードの決定は絶対だとか。

どういう原理で判定を下しているかのかって言う疑問とか、ギルドカードが間違っている可能性だってあるとは思うってのもあるが、

今のところはそういった問題はないらしい。

今回の俺の仕事の失敗という判断だって、問題は起きたとはいえドメドメ草を集められなかったのがいけなかったってことだろう。それに、受付のお姉さんの言うとおり、ドメドメ草を手に入れる方法は他にもあった。

思い当たる理由がある以上は、文句を言うわけにもいかないか……

「ご納得いただけましたか？でしたら、違約金として１００Ｂ銀貨一枚をお願いします」

マ・ジ・で！？

違約金なんて聞いてないっすよ！？つか、１００Ｂ銀貨１枚って俺の全財産の４分の１じゃん……

無理やり冒険者にさせられて、金も払わされて……いや、くそっ！選択肢がなかったとはいえ、最終的に冒険者になることを了承したのは俺だ。しかも、装備だってもらったし、現状で俺が受けられる仕事に限っては報酬を倍支払うって条件も出されてる。相手だって譲歩してるんだから、ここで俺がごねるのもなんか違うだろ……

俺は、しぶしぶながらも財布代わりの小さな袋から１００Ｂ銀貨を取りだし、受付のお姉さんに手渡した。あぁ……お金が無くなる……

「そう言えば、その猪はどうなさったんですか？」

「？……あぁ、そう言えば」

俺は受付のお姉さんに指摘されて、ようやくあのボス猪の首を持ち帰っていたことを思い出した。

何度もバスタードを振り下ろし、ようやく切り落としたボス猪の首は、予備として持っていたドメドメ草を入れるための袋を2重にして入れてある。しばらくツタなんかを使って吊るしておいたから血はほとんど抜けていたけど、袋の底はいくらか湿っている。

ボス猪の首が入った袋をカウンターに置いて、袋の口を開いて取り出す。

「……これをあなたが倒したんですか？」

「いや、正確には俺ってわけじゃないですけど……」

倒したのは俺じゃなくて、俺の隣の椅子で丸くなっている小動物だ。まぁ、それを話したって信じてもらえるかはわからんけど。

「申し訳ありませんが、少々お待ちください」

お姉さんはそう言い残してカウンターから離れた。かなり驚いて

いた様子だし、なんかすごいモンスターなのか？

それから少しして、お姉さんはキューマさんと共に戻ってきた。

「やぁ、師子王君。さっそくやってくれたみたいだね」

剣の練習をしているときも、何度か顔を見せてくれたキューマさんとはギルドに入った初日以外でも何度か話をしている。

まぁ、仲がいいって言えるわけじゃないけど、それなりには親しくなれたと思う。

キューマさんは挨拶もそこそこに、ボス猪の首を調べ、何かの冊子と見比べ頻りに頷いている。やっぱりすごいモンスターなのか？

「やはりね。モブ子君、ありがとう。君の報告の通りだ」

お姉さん、モブ子さんって言うのか……モブ？いや、気にするまい。

「結論から言うと、この猪は前に話した迷宮にいるモンスターだ。中階層のボスが確かこんなモンスターだと報告が来ている」

中階層のボス？

迷宮ってのは、初日に説明されたこの街の近くにある迷宮のことだろう。その中階層のボスって言ったらけっこうすごいんじゃないか？

「まぁ、危険度は低危険度の最上級ってところかな？ランクで言えば、ＦとＥの丁度中間くらいだ。まぁ、集団で来られると面倒だけど、一匹だけならそれほど苦戦する相手でもないからね」

……案外たいしたことないんですね……

っていうか、中階層のボスなのにそんなしょぼいのか！？しかもあんなに苦戦したのに……

「迷宮で新たに発見された種で、一応ギルドではホワイトボアと名付けたが、まさか地上に出ていたとはね……もしも、周囲の村やキャラバンが襲われていたら間違いなく賞金が賭けられていただろう。仕事の評価は覆せないが、特別に討伐報酬として１０００Ｂ、首を持ち帰った報酬として３００Ｂ、合わせて１３００Ｂを支払おう」

１３００Ｂ……だいたい１３万円くらいか？あんな死ぬ思いしてそれだけかよ……まぁ、罰金の分を引いても１２００Ｂの儲けだからいいっちゃいいけど……

文句を言って不評を買ってもしょうがない、これで我慢するか……そもそも倒したの俺じゃないし。

報酬なんかをギルドカードに振り込んでもらい、俺は冒険者ギルドを後にした。

とりあえず、仕事は失敗だったけど金は入ったし、アリアさんのご機嫌を取るためになんか買って行くかな？

――――side　out

執務室に戻ったキューマは椅子に腰かけると深く息を吐いた。

まさか、初めての採取系の仕事でこんなトラブルが起きるとは思ってもいなかった。そもそも、今までの例を考えれば、仕事に定められたランクを逸脱したモンスターが出現した場合は、ギルドカードも判断を成功としていたはずだ。

しかし、今回のガイの仕事では失敗とされていた。そんなことは通常であればありえない。

採集するはずのドメドメ草が足りなかったからなどと言う理由では、考えられない。なぜなら、ホワイトボアは1対1ならDランク相当の冒険者が苦戦する相手だからだ。

ガイにはFかEランクと言ったが、それは彼を増長させないための方便だ。チームを組んでの仕事であれば、Eランク相当という意味では事実であるだけに、一概に嘘ともいえない。

Gランクの仕事に個人であればDランク、チームでもEランク相

当のトラブルが発生したと言うのに、なぜ失敗とみなされたのか。いくら考えようとキューマにその答えはわからなかった。

「やはり、彼は私の考えていた通りの人間と言うことなのか？」

誰もいない執務室でつぶやかれた言葉は、沈みゆく太陽と共に闇へと飲まれていった。

7話　仕事に失敗しました（後書き）

短めです。

次の話では、ガイのステータスを大公開しちゃいます。旧作の方とは、デザインを一新し、多少は細かい作りにする予定です。

さらには、そこで今後の展開に影響する新事実が明らかに！？……なるかもしれませんw

8話　ギルドカードの新機能を知りました

俺の名前は・・・（後略）。

順風満帆とは言えないまでも、異世界にきてから順調な日々を過ごしている。とは言っても、この世界にきてから5日目で、死ぬような目にもあったから、順調ともいえないかもしれない。

初めての仕事が失敗に終わったとはいえ、結構な金額の報酬が手に入ったので、良かったと言えば良かった。

いや、今日という日はまだ終わっていない。ある意味、これからが本番かもしれない。

なにせ、居候の身でありながらペットを飼おうなんて暴挙に出ようとしているんだから……

俺の肩に乗って、ぐてんと力を抜いて眠っている小動物はそんな俺の緊張を気にもしないで、のんびりモードだ。おいこら……

「た、ただいまー……」

「あ、おかえり。思ったより遅かったわね……？」

扉を開けてリビングまで足を運ぶと、エプロン姿のアリアさんが出迎えてくれた。桶に水がたまっているところを見ると、洗い物をしてたみたいだ。

「いやぁ……い、いろいろ大変でしてね……」

「ふぅ～ん。ドメドメ草の採取なんて誰でもできるぐらい簡単な仕事なのに、どんな大変なことがあったわけ？」

「……もう、馬鹿みたいにデカい猪がドメドメ草の群生地帯を荒らしててさ、そいつと戦ったりしてほんと大変だったよ」

「へぇ～、馬鹿みたいに大きい猪ねぇ……で？」

「で？って？」

「そのあんたの肩に乗ってる生き物は何？」

「……あ、あれぇ～、こんなのがいつの間にか肩に乗ってるなんて気づかなかったぞぉ～……あ、あははは……」

やばい、アリアさんの視線が痛い……。

もっと軽い調子で、森で見つけちゃってついてきちゃったから、飼ってもいい？って聞こうと思ってたのに……

無言で責めるようなアリアさんの視線が……というか、もはや空気が痛い。

「で？」

「すいません……どうも懐かれちゃったみたいでして……」

「ふぅ～ん、で？」

「……飼ってもよろしいでしょうか？」

アリアさん、「で？」っていうのが怖いです。マジで……

美人の怒り顔ってなんでこんなに怖いんだ？

なんかもう、捨て犬を拾ってきた子供を親が叱ってるような感じだな……いや、いい年こいて子供と同じことしてるってのは、ちょっとあれだが。

「あんたね、野生の動物が人間に懐くわけないでしょ！？仮にあんたには懐いてたとしても、ここはたくさんの人が暮らす街なのよ！？誰かに怪我させたらどうする気よ！」

「いや、こいつかなり頭がいいし、ちゃんと言い聞かせればそんなことしないって……しないです」

アリアさん、睨むのやめてください……

あれだな、子供なら泣く。間違いなく泣く。いい年しててても、ちびりそうなぐらい怖い。

「野生の動物がそんな人の言葉を理解できるほど頭が良いて言うわけ？そんな話聞いたことないわよ」

アリアさんの声に反応して、小動物の耳がぴくって動いた。やっと起きたのか……アリアさんの怒声を聞きながら、ここまでのんびりしてるなんてある意味尊敬するぜ……

「キュイ」

小動物は俺の肩から飛び降りると、アリアさんの足元まで寄って行き、アリアさんの足にすりすりと頬ずりをする。いいぞ、それはかなり萌える。この3日でアリアさんが世話焼きの姉さんっぽい人だってわかったし、これはきっと保護欲をそそるはずだ。

「っぐ……なかなか、可愛い……だ、だからって、飼うなんて認めないわよ」

「キュウ……」

小動物の耳がシュンと垂れ下がる、うるうるとした瞳は「飼ってくれないの？」と、訴えかけるようだ。

そう、昔のＣＭで、チワワがお父さんに訴えかけるようなあの目だ。

よし行け！このまま行けば、アリアさんもアイ●ルにお金を借りるはずだ……いや、この世界にアイ●ル無いか。でも、俺の中では完全に「どうする、アイ●ル～」って流れてる。たぶん、アリアさんだっておんなじ状況のはずだ。

「キュウ……」

止めのすりすり攻撃だぁぁぁ！挑戦者が、チャンピオンに止めを刺しにかかった！

チャンピオン、ダウン寸前。陥落は時間の問題だぁぁぁ！……何やってんだろ俺。

「はぁ～……わかったわよ。普段の世話はもちろんだけど、何かあった時の責任もしっかり取んなさいよ……」

小動物のすりすりとうるる攻撃にがっくりと肩を落としたアリアさんはやけ気味になってそう言った。

いや、ほんとありがとうございます。

「で、飼うにしてもこの子、名前は？」

「名前？」

そう言えば、全然考えていなかった。命の恩人で、一緒に居たいらしいから絶対アリアさんを説得しなくてはって事ばかり考えてたから、名前なんて候補すら上がってない……

「まさか、あんた考えてなかったわけ？そんなんで、飼いたいって言ったの！？」

「いや、あの……考えてますよ？いくつか候補があって、どれにしようかなぁって……」

「へぇ～」

すいません、ジト目でこっち見ないでください。というか、いかにも信じてませんって表情やめて……いや、事実ですけど。

とりあえず、適当に候補って言って名前を挙げて、その間に本命を考えよう……

それっぽい名前……やばい、全然思いつかん……そういや、こいつ雄か？雌か？

「なぁ、お前って雄？」

「キュイ」

鳴きながら首を横に振る。あぁ、雌なのね……

小動物、子供、成長？……未来……雌……

「……スクルド……」

「……スクルド？」

「うん、これだ。スクルドがいい。どうだ、お前はスクルドって名前は気に入るか？」

「キュイ！」

元気よく一つ鳴いてうなづく小動物、改めスクルド。なんか、なんとなくだけど、こいつの感情の機微ってのがわかる気がする。

……？

なんか、ギルドカードを入れてるポケットが一瞬熱くなったけど、どうしたんだろう……

取り出して、適当にいじってみても何の変化もない。

「どうしたの？」

「いや、なんかギルドカードが一瞬熱くなったから、どうしたのか

と思って……ずっとポケットに入れてたし、足動かしたときの摩擦で熱を持ってたとかかな？」

いや、さすがにそれはないか……

「もしかして、更新されたんじゃない？」

「更新？」

「そ、ギルドカードの所持者が何かしらして、データが更新されると中の魔法回路が働くんだけど、情報量が多すぎると熱を持つって聞いたことあるわよ」

「へぇ～、そうなんだ」

「確認しないの？」

「……できるの？」

すいません、初耳なんですが……

渡された時の説明も、身分証の提示を求められたら見せるようにとか、ギルドを使うときは何をするにもまずは最初に提示するようにとかって説明をされるばかりで、てっきり、何かしらの道具を使って中身を見ることしかできないんだと思ってた。

まさか、俺でも使える機能があるなんてなぁ……

「ギルドカードの魔法回路の露出部分。そう、そこの緑色の丸に触りながら開示するようにイメージするだけ」

「開示？」

「まぁ、わかりにくかったら、『オープン』って口で言っても大丈夫よ」

「ふぅ～ん……『オープン』」

俺の声に反応してギルドカードからいくつかのウィンドウが飛び出した。え、なにごと！？

空中にいくつかのウィンドウが浮かび上がるのって、こういうファンタジー世界じゃなくて、未来のロボットものとか科学技術がすごいことになってる世界じゃないのか！？

宙に浮いているウィンドウにはいくつかの文字が並んでるけど、タッチパネル式か？

とりあえず、本人情報ってところをタッチしようとして、俺の手は見事に空振りした。

「あぁ、あんたの世界から来た人は勘違いする人いるらしいけど、それ触れないからね。全部音声認識だから」

先に言ってください……

あぁ、恥かいた。まぁいい。

「本人情報」

Name：獅子王　ガイ＞Gai　Shishioh＜　Lv．2
Race：人族
Age：17
Job：冒険者　勇者
Title：Tamer

Ability
格闘：Lv．1
剣術：Lv．3
槍術：Lv．0
斧術：Lv．0
弓術：Lv．0
魔法：Lv．0

Passive：幸運Lv．―――　???の加護Lv．―――
???の加護Lv．―――　???の呪いLv．―――　冒険者Lv．3　肉体強化Lv．2
Action：―

＞スクルド＜

……さすが新人、空白が目立つぜ。っていうか、『ーーー』ってなってるのはなんでだろ？

？？？の加護は、『？？？』ってのが、なんなのかわかんないとわからないとかなら、無理やりでも納得できるけど、幸運も『ーーー』ってのはわけが分からん。

それにしても、勇者だったらもっとドーン！とすごい能力とかないのかね？

せっかく異世界に召喚されて、これから楽しい異世界ライフって思っても、能力低くて死にましたじゃ笑えもしない。

てか、なにこの＞スクルド＜って欄。俺の本人情報なのに、なんでスクルドの文字が？これも声に出せば中を見れるのか？

「スクルド」

……無反応……なぜ？あ、別にお前を呼んだわけじゃないから、こっちを見上げなくてもいいぞ、スクルド。

案の定、タッチパネル式でもないから、触ることも出来やしない。

「アリアさん、このスクルドって欄が見れないんですけど？」

「え？あぁ、これ本人情報でしょ？専用のレンズを通すか、ギルド

にある読み取りのアイテムがないと他人じゃ見れないのよ」

俺が指差したあたりを見て、アリアさんはそう言った。つまりは、アリアさんには俺が何を指差しているのかわからないんだろう。

「アビリティのところの、スキルの下に括弧してスクルドの名前があるんですよ。スクルドって言っても反応しないんですけど、何ですかね？」

「うぅ～ん、ちょっとわかんないわね。実際に見てみれば、わかるかもしれないけど、見ないと何とも言えない。普通は、本人情報なんて、登録者以外の名前が出ることなんてないんだけどね」

「そうっすか……」

まぁ、スクルドの名前があるから、いけないってわけでもない。別に気にする必要はないかな。

もう一度、本人情報を流し見ているうちに俺は、アビリティに不吉な文字があることに気が付いた。

『？？？の呪い』

……なにこれ？

呪いってなんですか！？え、まじで？なんで？俺呪われてんの！？

アリアさんに聞きたいけど、怖くて聞けない……もしも、呪われてる人間とは暮らせないとか言われて、家を追い出されたら住む場所が……

いや、キューマさんに相談するとか、金もあるし宿屋に泊ることはできるかもしれないけど、アリアさんみたいな美人との同居を捨てることなんて俺にはできない。

男ならば、呪われようが、美人との同居を選ぶべきだ！

……いや、でも……この呪いのせいで、アリアさんになんかあったらどうしよう……

「あの……アリアさん」

「なに？」

やっぱり、黙ってるのはよくない。きちんと話しておくべきだな。

「実は、アビリティに『？？？の呪い』ってのがあったんですよ……」

「へぇ～」

あの、それだけですか？

「へぇ～、ってそれだけですか？呪われてる人間なんかと一緒に暮らせないわ、出て行きなさい！とかってないんですか！？」

「なによ、あんた出ていきたいの？だったら、いいわよ」

「いや、俺はできればここで暮らしたいですけど、俺が呪われてるせいでアリアさんになにかあったりしたら……」

「あぁ、そんなこと心配したの？大丈夫大丈夫、基本的に呪いなんて時間が経てば消えるし、呪いによる能力低下とかは本人にしか影響しないから」

あ、呪いって能力の低下なんですか？それなら安心……できないし……

冒険者やるのに能力低下なんてシャレにならんわ！

「ふふ……」

「何が面白いんですか？」

「いや、あんたが面白いと思ってね」

「面白い？」

「そ。だって、普通呪いのことがわかんないんだったら、自分の心配するもんでしょ？それを、私の心配するなんてお人よしって言う

か、なんて言うか」

フラグ？フラグですか？

っふ、俺に惚れたらやけどするぜ？……自己嫌悪だ。そもそも、この程度で女性に惚れられるんだったら、世の中モテ男で溢れかえるだろうな。

でもまぁ、そのうち消えるらしいし、呪いの心配はそんなにする必要ないのか？

呪いが消えるまでは、安全な仕事を選ぶようにして、能力の低下が問題にならない程度の仕事をしよう。生きていくためには仕事はせにゃならんしな。

安心したら、腹減ってきた。今日は、化け物猪と戦ったり、スクルドを飼うことをアリアさんにお願いするとか、緊張の連続だったしな……

緊張の糸が切れた瞬間に腹が減るなんて、我ながら現金なやつだよ……

「すんません、アリアさん。メシってありますか？」

「はいはい、食いしん坊は椅子に座って待ってな。すぐあんたたち二人分の食事の用意するからさ」

納得したとはいえ、消極的だったのに、スクルドの飯も用意してくれるあたり、アリアさんはやっぱりいい人だ。

8話　ギルドカードの新機能を知りました（後書き）

相変わらず、説明なんかがかなり強引ですいません。

次の話は、アリアとガイの二人のお話です。

旧作の方では、いつの間にかガイに惚れていたアリアですが、今回は一味違う！？……かもしれませんw

9話　盗み聞きをしてしまいました

（略）

さて、スクルドが仲間になった次の日、つまり本日わたくしは街の中にある女性物を売っているブティックへとやってまいりました。

なぜかって？助走に……女装に目覚めてしまったからさ！……ウソデスゴメンナサイ。

「どう？これなんかどうかしら？」

「あぁ……いいんじゃないでしょうか？」

まぁ、早い話がアリアさんの付添いです。なんでも、明日の夜にバルデンフェルトの騎士たちとの合コンがあるらしい。

この世界での騎士ってのは、三井さんが給料がいいって言っていた通り、かなり高収入な職業らしい。どんな職業の人と結婚したい？ってアンケートを取れば、まず間違いなく不動の1位になるとかなんとか……地球でいうところの外資系とか、広告代理店かな？いや、例えがちょっと古いか？

とまぁ、そんなわけでアリアさんが勝負服を買うののお手伝いというか荷物持ちってわけだ。

「もぉ、さっきからいいんじゃない？しか言わないじゃん。もっとこう、アリアさんは世界一きれいだよ？とか、君の美しさにはバルデンフェルトの三姫さえ、路傍の石のようだ。とか言えないの！？」

すいません、それは服の感想ではなく、ただアリアさんを褒め称えてるだけです。

騎士との合コンってことでちょっと舞い上がりすぎじゃないですか？

そもそも、アリアさんはかなりの美人だから、何着たって似合うんだから感想一緒でも仕方ないじゃん……なんて、面と向かって言えるほどの度胸は俺にはありませんて……

つか、アリアさんが合コンなんて行ったらモテんだろうな……俺は合コンなんて行ったことないけど、こんな美人が合コンの席に居たら、男ならだれでも猛烈にアタックかけるだろ……

少なくとも、特殊な趣味の人間じゃなかったら、アリアさんは、ものすごい美人だ、と１０人中１０人が言うほどの美人だ。

肩甲骨のあたりまで伸ばされた金髪は、太陽の光を受ければ眩しく、夜にろうそくの光をあびれば妖艶に輝く。整った顔立ちをしていて、吊り上り気味の目は気の強さをうかがえるけど、なんかお姉さまって感じの彼女には、そのきつそうな感じが逆にしっくりくる。

胸はデカいし、ウェストも細く、尻もデカい。バン、キュッ、ボンのムチプリ系のスタイル。なんか、白衣着て保健室に居たら、ものすごい似合いそう……

ま、俺みたいな平平凡凡な男には、高根の花だし、本人も嫌ってはいないだろうけど恋愛対象とはみなしてないだろうから、気にしても仕方ないんだけどね。高望みしすぎて、今の日常を壊すのは馬鹿のすることだ。

ちなみにアリアさんはすでに2時間が経過しているブティックでの買い物を、3時間後に終えることとなった。一緒にいた俺は激しくげんなりしていたことを追記しておく。

翌日、アリアさんはギルドでの仕事を終えたら直接合コンの会場に行くらしい。冒険者ギルドご用達の居酒屋ではなく、騎士たちのおごりだからとかなり値の張る料理屋に行くんだとか……

朝に家を出るときはルンルンって感じで上機嫌だったからまぁ、いいけど……ちょっと年甲斐なさすぎじゃないだろうか？ルンルンはないだろ、ルンルンは……

まぁ、俺も今日はギルドのお仕事を入れてあるから、それの報酬で夕飯は外で食べることにしようと思っている。

アリアさんが奢りでうまい飯食ってんのに、俺は家でまずい飯（俺作）なんて食いたくない。

今日のお仕事は、バルデンフェルトの騎士団に付き添って草原に出てきちゃった迷宮のモンスターの討伐だそうです。

本来なら俺のランクでは受けられない仕事だし、討伐なんて危険だからあれだったけど、精強で知られるバルデンフェルト騎士団との合同の仕事なら安全性はかなり保障される。なんか、腕の一本切り落とされても治せるぐらいの魔法使いがいるとかなんとか……あ、ちなみにこの世界では、聖職者（クレリック）なんかも、総称は魔法使いなんだとか。

キューマさんが、バルデンフェルトの騎士団と仕事をするのは冒険者としても、この世界でただ暮らしていくだけでもいい経験になるからぜひ、と強く言うので受けることにした。

しかも、バルデンフェルトの騎士団ってことは、三井さんがいるはずだ。成り行きとは言え、冒険者として生活することにもなったし、いろいろ教えてくれた三井さんにはぜひとも近況の報告がしたい。

今日、アリアさんと合コンする騎士と会ったら笑えるな。

さて、やってきました。草原です。

点々とモンスターの姿が見られる草原は、大小さまざまなモンスターがいる。あのちっこいのがゴブリンかな？

「ガイ君、あんまり前に出すぎないようにしなよ。たとえゴブリンでも、初心者が油断したら大けがするからね」

「はい。でも、バルデンフェルトには腕の一本ぐらいなら簡単に治せる魔法使いがいるんですよね？」

「あぁ、あれは周りが誇張しすぎてるだけ。折れたとかなら、すぐ治せるけど、切り落とされたら秘薬とかいろいろ必要になるし、簡単には治せないよ」

……まじですか？

っくそ……治癒魔法使いがいるから、安全性が高いって安心してたのに。

ま、ここに来るまでにいろいろ話をしたら、俺の面倒を三井さんが見てくれるらしいから、油断しないようにするのは当たり前だけど、ある程度は安心できる。

さっそくゴブリンに襲い掛かろうとする三井さん。俺は、その後を追って、モンスターに攻撃を仕掛ける。

三井さんがゴブリンの両手を切り落として、俺が止めを刺す。なんでも、経験値は止めを刺した人間にしか入らないらしい。つまり、この間戦った、ボス猪の経験値は全部スクルドに持っていかれたってことだ……ちょっと悲しい。

だけど、今回の戦いで経験値はかなり稼げそうだから、そのことは忘れよう。

前は三井さんが突き進み、後ろはスクルドが警戒してくれている。ボス猪を一撃で倒せるようなスクルドは、ゴブリンくらいは軽く屠っている。

ちなみに、スクルドを三井さんに紹介したらかなり驚かれた。なんか、モンスターを使役するにはそれ用の能力が必要なんだとか……俺の、この世界に来ることで開花する能力って、モンスターテイマーとかだったのかな？

それからも休憩をはさみつつ、しばらくはあたりのモンスターを倒し続けた。太陽が傾くぐらいの時間になると、草原のモンスターは大部分が掃討されていた。

今日の成果はどんなもんかと、ギルドカードで確認したら、レベルは3になってた。それ以外にも、剣術レベルも5に、新アビリティの剣士は新しい能力だって言うのにレベル2、肉体強化もレベルが5に上がっていた。

討伐したモンスターの数はギルドカードに記録されていて、それに応じた報酬が支払われるとか……三井さんのおかげでかなり稼げたっぽい……

ほんと、三井さんには頭が上がらないぜ。なんて、思いながら馬車に乗り込もうとしたところで、馬車の中から声が聞こえた。何人かの男が話してるみたいだけど、声を潜めて何を話してるんだろう……

「で、今夜だよな……」

「あぁ、ギルドの姉ちゃんこまして、合コンって言ってセッティングさせた」

「っかぁ～、お前もワルだね」

「それに便乗してるお前はどうなんだよ」

「ま、俺は女が抱けるならなんだっていいさ」

「そうだな。薬も用意したし……」

「あの薬の効き目はすごいからな、ぐへへ」

「おい、涎垂らすなよ汚ぇな」

ちょっと、物騒なお話みたいです……

っていうか、これはもしかして、こいつらアリアさんの合コン相手か？

薬とかなんとか不穏な単語が聞こえたけど……もしかしてアリアさんピンチ？

「どうしたの、ガイ君？」

「あ、三井さん……ちょっとお話があるんですけど……」

「？」

もしかしたら、別の人かもしれないけど、念には念を入れないといけないからな。

草原から街へと戻ってきた。できることなら、さっき話していた男たちに張り付いていたいところだけど、お城には入れないし、ギルドへ報告もしに行かなくてはいけない。

ギルドでの手続きをしている間、アリアさんの姿を探したが、どうやらすでに店の方に移動しているらしい。

報酬の振り込み手続きなどが終わると同時に急いでアリアさんたちのいる店を探す。なんで俺は店を聞いていなかったんだろう……

――――side　out

アリアたち冒険者ギルドの女性職員たちは予定の時間通りに店へとやってきた。普通の合コンだったなら、わざと遅れて男たちの反応を見るところだが、騎士なんてプライドの高い相手にそんなことをするのは、よろしくない。

ただでさえ、騎士と合コンできる機会など少ないことなのだから、モブ美には感謝しないといけないとアリアは考えていた。

しかし、時間になっても騎士たちは現れない。これでは、女性と男性の立場が逆だ。

「ねぇ、遅くないかしら？」

「そ、そうね……でも、もう少し待ちましょうよ」

「？……そりゃ、少し遅れたぐらいなら待つけどさ」

妙に落ち着きがないモブ美の態度に、少しばかりの違和感を感じつつアリアはお冷を口にした。

不意に扉を開けてどやどやと何人かの男が店の中に入ってきた。モブ美が反応したのを見ても、彼らが合コンの相手なのだろう。

しかし、さすがは騎士と言える。鎧こそ簡素なものに変えられているとはいえ、腰に差された剣は帝国の紋章が掘られた騎士の身分証だ。合コンだからと武器を外すような馬鹿な真似はしないらしい。

だが、女性陣からすれば、まさか武器を持ってくるとは思っていなかったのか、少しばかり嫌そうな顔をした者も何人かいた。

アリアは、そんな女性陣の中にあって、すでにどの男を狙うのか品定めを始めていた。

「いや、すまないね。昼間は騎士団としての仕事があったから、少

し遅れてしまったよ。女性を待たせるなど、騎士として恥ずべき行為だ。お詫びしよう」

そう言って、一人の騎士が頭を下げた。

顔はまぁまぁいいが、マザコンっぽいから却下。というのがアリアの感想。

騎士たちも席に着き、酒が来るのを待つ間に軽く自己紹介をしていく。

酒が来ると乾杯し、適度に質問などを繰り返していくが、アリアはなんとなく熱が冷めていくのを感じた。

今回の合コンは失敗だったかもしれない。

騎士と言うのを鼻にかけ、面白くない人間や、なんとなく心許せない相手ばかりだ。これなら、最近居候することになった、あの青年の方がいくらもましだ。

そう、彼ならこういう場でどうするだろうか？案外、大人の女性ばかりでどぎまぎして面白いことを言うかもしれない。

そんなことを考えてアリアは一人小さな笑みを浮かべた。

自分は案外年下の方が好きなのかもしれない。自分でも世話焼きなのは認めるが、それを恋愛感情と言えるのだろうか？

もっと、頼りがいがあって、いざと言うときに自分を守ってくれ

るような男性の方がいいのではないだろうか？そうやって考えるとあの青年はちょっと頼りない。

そうやって考えていると、アリアは再び笑みを浮かべた。

合コンに来たというのに、なぜここにはいない青年のことばかりを考えているのだろうか、これでは本当にあの青年を好きに思っているようだ。

「どうかしましたか？」

「いえ……すいません、ちょっと失礼します」

青年について考えている間、ひたすらに話しかけてきていた男に一言断って立ち上がり、手洗いへ向かう。

いったん落ち着こう。もしかしたら、話しているうちに心惹かれる相手がいるかもしれない。手洗いから出たアリアはそう考えながら、男性用手洗いへと入る男に一瞬目を奪われた。

長年ギルドの受付をしている間に、できる人間の纏う空気と言うものをなんとなく感じ取れる彼女だからこそ気が付いた、その男のすごさ。

ちらりと目を向けると腰には合コン相手の騎士たちと同じ、バルデンフェルトの紋章が掘られた剣を差している。しかし、彼は合コンの相手ではない。こんな空気を纏う男はあの中にはいなかった。

こんな男があの中にいたのなら、もう少し気分は違ったのだろうが、あまり贅沢も言っていられないだろう。

アリアは、一つ息を吐くと席へと戻るのだった。

9話　盗み聞きをしてしまいました（後書き）

要点だけでいろいろと端折ってしまいました。

それでも想定外の長さになってしまったので前後編の2本立てです。

次回、ガイが新たな力に目覚める！？……かもしれませんw

１０話　騎士と戦うことになりました

（略）

俺はとにかく走っていた。事前にアリアさんから聞いていた情報は、普段ギルド職員が行く店よりもお高い店というだけだ。ギルドにいた女性職員に確認してみたが、誰も知らなかった。行きたくなるし、騎士との合コンなどうらやましいばかりだから、話は何も聞かなかったらしい。

それでもいくつかの店をリストアップしてもらったが、いかんせん土地勘がなさすぎる。道行く人に聞きつつ、見つかった店の中を確認していく。

「っくそ……予想が外れてるといいんだけどな……」

往々にして悪い予感ってのは当たるもんだ。騎士たちの話していた合コンってのがアリアさんたちとの合コンと同じってのはまず間違いないだろう。

こまして合コンって言わせた、だとか、薬、なんて不穏な単語から察するに、あいつらは女性を食い物にして悪事を働いているような人間なんじゃないだろうか？

そんな男の毒牙にアリアさんをかけさせるなど、絶対にしたくない。彼女は俺の家族のような人なんだ。

恋愛対象として見てはもらえないだろうが、家族としては扱ってもらえてると思う。まぁ、彼女が世話焼きってことは確かにあるが、世話になっているもたしかだ。

少なくとも、恋愛対象、家族云々を別にしても、自分が知っている人が何か犯罪に巻き込まれるなんて絶対に許せない。

「キュイ！」

「！？」

スクルドの鳴き声に反応して、視線を動かすと、一軒の店が目に入る。リストにある名前と一致する料理屋に戸をあけて入ると、三井さんの姿が目に入る。ビンゴだ。

「すいません、お待たせしました」

「やぁ、思ったより早かったね」

声を潜めながら席に着く。

草原での仕事の終わり際にお願いして、三井さんにはあの騎士たちをつけてもらっていた。

自分と同じ騎士団に所属する人間が悪さをしているかもしれない、って話は仕事がある三井さんでも手伝わざるを得ないだろう。まぁ、

三井さんみたいにいい人だったら、それがなくても手伝ってくれたかもしれないけど……

できれば、話だけ聞けばかなり悪質な手口をつかう連中みたいだし、さっさと捕まえてほしいと言ったが、さすがに話を聞いただけで悪と判断するわけにもいかず、現行犯逮捕をするしかないと三井さんに言われた。

まぁ、もしかしたら、万が一の可能性でも、普通に合コンをするだけかもしれないって言われたら、反論はできない。実際、話を聞いたのは俺だけ……俺と言葉を話せないスクルドだけなのだから。

不意に三井さんの目が細められた。

「どうしました？」

「飲み物に薬を入れたかもしれない……」

「！」

三井さんの言葉に、俺は睨むように視線をそちらに向けた。

アリアさんやギルドで見かけたことのある女性たちが、複数の男たちと話している。アリアさんの表情があまり楽しそうでないところに、少しばかり心が軽くなる。

「行きますか？」

「……そうだね」

俺たちは席を立つと、アリアさんたちが座る席へと歩み寄った。

何人かは俺なり三井さんに見覚えがあったのだろう、一様に不思議そうな顔をしている。いや、女性らの表情がどこかおかしい。……やっぱり、なんか怪しい薬を使ったみたいだ。

「貴様ら、バルデンフェルト騎士としての恥を知れ！」

三井さんが剣を抜くのに合わせて、俺も剣を抜く。

いきなり店中に響く大声で話した上に、剣を抜き放つような男たちの登場に、店の中がにわかに騒ぎ出す。

騎士たちの方も三井さんの登場など予想外だったのか一様に慌てている。

「なんで、三井の野郎が！？」

「やばいぞ、逃げろ！」

「くそ、もう少しだったってのに！」

騎士たちは慌てて立ち上がると三々五々と散り散りに逃げていく。

「っち！」

三井さんは舌打ちすると騎士たちを追って店を飛び出した。警笛の音があたりに響いているので、増援を呼んでいるのだろう。

でもね、あの……三井さん？

こちらに2人ほど残っているのですが……

裏手から逃げると見せかけて戻ってきたときはビビった。普通、こんな騒ぎになった店に戻るか？三井さんの後を追おうとして、アリアさんたちを残していくわけにはいけないんじゃないかと足を止めたのは、ある意味正解だったってことだ。

……でも、あの……俺が騎士を二人も相手できるとお思いですか？こちとらレベル3ですよ！？

「くそっ！三井が現れるなんて予想外だったぜ」

「今まではうまくいってたって言うのに……」

「どうせ、この国にはいられないんだ。この女たちだけでも、どっかに売りつけてやろうぜ」

ちょっと、あんたら悪すぎない？っていうか、こんな早く戻ってきたのはそのためか！？

アリアさんたちを売るって、お前ら何考えてるんだよ！

「……お前は、今日の仕事にいたギルドのガキだな」

「三井に言われて無理やり手伝わされたんだろ？見逃してやるから、さっさと逃げな」

言いながら男たちはアリアさんたちに近づいていく。やっぱり、アリアさんたちを攫おうって言うのか！？

……ちょっと待てやコラ！その薄汚ぇ手でアリアさんに触らせるか！

なんかもうプッツンといきそうです。

「その薄汚ぇ手で、その人に触るんじゃねえよ！」

「あぁん！？」

「んだと、ガキが！」

騎士二人は怒り心頭みたいだが、こっちだってかなり頭にきてる。昨日楽しそうに服を選んでいたアリアさんを、今朝合コンを楽しみ

にしながら家を出たアリアさんの期待をこいつらは薄汚い欲望で裏切ったんだ。

許せねぇ……絶対に。

「スクルド、一人相手できるか？」

「キュイ！」

「よし、いい子だ」

元気よくうなづいたスクルドは右手の男を正面に襲い掛かる。

こっちも先手必勝だ。刺し違えてでも倒してやる。

バスタードを振りかぶり、左手に立っていた男に襲い掛かる。いかんせん実力差があるためにこちらの攻撃は当たらないが、抵抗すると思っていなかったらしい男は剣を抜いてすらいない。

刀であったなら居合を警戒するところだが、この世界の西洋系の剣じゃ、日本刀みたいな素早い居合はできないのだろう。

だんだんと剣が重くなってきて息も切れるけど、部屋の隅まで追い込めばこっちが有利になるはずだ。

連続して剣を振っているうちに、攻撃が雑になり剣が地面に刺さってしまった。やばい！？

「なめんじゃねぇガキが！」

男の方も剣を抜き、俺に襲い掛かる。くそっ。

俺は剣を放して後ろに跳ぶ。肩で息をしながら腰に差してあったグルカナイフに手をかける。

即座に追撃を仕掛けてくる男の攻撃をなんとか回避し、グルカナイフを抜き放つ。

男の剣はロングソード、こっちはグルカナイフ。間合いは完全に相手の方が長いし、技量も相手が上。やべぇ、また勝ち目ないな……

だけど、アリアさんを守らなきゃいけない。

さすがに、さっき頭をよぎった刺し違えてでもってのは勘弁願いたいが、引き下がるわけにもいかない。

店の中は俺たちの戦いで大騒ぎになっているが、そんなことを気にしてる余裕はない。

思いのほかスクルドも苦戦してるのか？気になるけど、そっちに意識を向けられる状況じゃない。

男が動いた。

武器のリーチと体格の差を活かしての突き。横に避けて懐に潜り込めるか？いや、相手の攻撃が速い。

相手の攻撃が避けられそうにない、一瞬のうちに攻撃を喰らう覚悟を決めて歯を食いしばる。そんな俺の視界に飛び込んできたのは、アリアさんだった。

「え？」

男と俺の間にアリアさんが飛び込む。男の攻撃は間違いなく俺ではなく、アリアさんに達するだろう。

一瞬の時間がスローモーションのようにゆっくりと、ものすごく長い時間に感じられる。

「や」

何かがはじけたようだった。

「やめろぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

体が軽い。

男の剣を蹴りつけ、軌道を無理やりに変える。それと同時に男の懐に潜り込んだ俺は、回転するようにしてグルカナイフを下から上へ切り上げた。

鮮血をまき散らしながら男が倒れる。

「はぁ……はぁ……アリアさん！？」

慌てて振り返ると、アリアさんは怪我一つなくそこに座り込んでいた。あぁ……よかった。

急に体が重くなる。さっき一瞬感じた体の軽さが嘘のようだ。それに、ものすごく眠い……

スクルドはどうしたんだ？

ちらりと目を向けてみれば、スクルドの方も男を倒したのか、倒れ伏している男をしり目にこちらへトコトコと歩いてきている。

よかった、あいつも無事か……

だめ……だ……ね……む……い……

――――――――――――――――――――薄れゆく意識の中、誰かに名前を呼ばれるような気がした。

――――――side　out

アリアは自分の鼓動が早鐘のようになっているのを感じていた。

急に酔いとは違う体のほてりを感じ、なにかがおかしいと思った矢先に、さきほどのできる雰囲気を纏った男と、青年が現れたのだ。

最初は何事かと思った。

慌てて逃げ出す騎士たちの姿と、できる男の言葉から、騎士たちがなにかおかしなことでもやったと言うのはぼんやりとした頭でも理解できた。

目の前で繰り広げられる戦い。冒険者ギルドにある酒場で、殴り合いの喧嘩を目の前にすることなどは多々あったが、剣を抜いての戦いなど初めて目の前にした。

それは、頼りないと思っていた青年が自分を守るための戦いだったのが妙にうれしかった。

しかし、青年はこの世界に来たばかりで、剣の扱いだってまだまだだと聞いている。そんな彼が精強で知られるバルデンフェルトの騎士を相手にするなど、どんな冗談かとも思った。

気づけば、二人の戦いに割って入り、自分が死んだかもしれないと思ったが、今こうして自分は生きている。そのことがアリアには不思議に思えた。

突然青年の動きが早くなった。

時を同じくして、青年が先日連れ帰ったペットの動きも異常な速さを見せていた。

ペットは、体の小ささを活かして男を翻弄していたが、決定力にかけるのかなかなか勝負がつかずにいたが、突如として異常な速さで剣に横から体当たりをし、剣を折ると同時にその長い尾でもって相手の横っ面を強打したのだ。

男は一撃で昏倒し、その場に崩れ落ちてしまった。

その場の出来事のすべてが悪い夢のようにも思えた。しかし、夢ではない。

事切れた男、そこから流れ出る血液とその匂いが、今この場が現実であることを如実に語っている。

「……ガイ？」

アリアはようやく、はっとなって青年へと駆け寄った。

医者でも魔法使いでもないアリアには、詳しい診断などできはしないが、疲労から倒れてしまったようだ。外傷もないし、どこかを強打した様子もなかったので、間違いないと思われる。

騒ぎが一向に収まらない料理屋の中、アリアをはじめとしたギルド職員の女性たちは誰もが呆然としていた。

ただ一人、今回の合コンをセッティングしたモブ美だけが、事切れた男の死体に縋り付き、涙を流しているだけだった。

１０話　騎士と戦うことになりました（後書き）

後編です。

今回も、いろいろ端折ってあります。こうしてアリアはガイへと惹かれていくのでした……的な話にしたかったんですが、まだちょっと物足りない気が……

まぁ、ちょっと気になり始めたし、今後の展開でアリアさんはガイ君に惚れてくれるでしょう（たぶん）

次回、ガイが帝国の騎士になる！？……かもしれませんw

11話　報酬はまだ貰えませんでした

（略）

偽合コン事件から3日が過ぎた今日、俺は城へと呼び出された。

まさか総じて誇り高く、国に忠誠を尽くす騎士がそんな犯罪行為に手を染めているなどと、って感じで城の方はかなり慌ただしかったらしく、俺が呼ばれるのもだいぶ遅くなってしまったとか。

冒険者ギルドの方でも、モブ美さんが騎士たちに命じられて被害者が増えることを知りながら、合コンをセッティングしたってことで、こっちも大騒ぎ。お城の方とかなり面倒なやりとりが多くなされたらしい。

かく言う俺は、事件の翌日には目をさまし、意識がはっきりすると同時に激しくおう吐した。

事件当日の昼以来何も食っていなかったので、出てくるのは胃液ばかりで、食道がえらいことになったけど、吐き気はいつまでたっても収まらなかった。

なにせ、人を斬ったんだ。結果的に、あの騎士は死んでしまったらしいが、そうでなかったとしても俺のこの結果は変わらなかっただろう。

物語の主人公とかなら、まぁいろいろと葛藤した結果に前向きになるんだろうが、俺の気分は3日が過ぎても一向に回復しなかった。

優等生ってわけでもなかった俺は、喧嘩ぐらいしたことはある。だけど、そんな俺も不良ってほど悪いわけでもない。

不良の喧嘩だと、ナイフを出すやつだとか、明らかに人を殺せるような武器、釘バットだとかチェーンなんかを出すやつがいるのかもしれないが、普通の喧嘩では、単純に拳で殴りあうことすら稀だ。

大概は、お互いに取っ組み合いになると誰かしらが仲裁に入って終わり、って感じで終わる。だってのに、今回は自分がナイフを持って相手を斬りつけたんだ。

昼間に殺した、ゴブリンなんかのモンスターは、見た目が化け物だったからなんとなくゲーム感覚で戦えた。多少の抵抗はあるにしろ、それほど気にかかるものでもなかった。

だけど、人間相手だとやっぱり違うんだ。

いくら時間が過ぎても、この手に残る感触がなかなか消えてくれない。

俺が落ち着いた頃合いを見計らって、アリアさんがお礼を言ってくれてようやく俺は少しだけ気分を持ち直した。

人を殺してしまったっていう罪悪感と気分の悪さはまだまだ俺の気持ちを病ませているが、この世界で生きていく以上、人を殺すってことも避けては通れない道なんだろう。

物語の主人公みたいに、人を殺すのに慣れたくないとは言わない。人を殺すことに快楽を見出すのは勘弁願いたいけど、人を傷つけたり、殺したりするたびにこんだけ気分が落ちるのも嫌だから、さっ

さと慣れてしまいたい。

さて、前置きが長くなってしまったが、俺は今、お姫様の前に跪いている。

この間は、何にも知らなかったから、立ったままだったけど、三井さんがいろいろ教えてくれたのと、俺の隣にキューマさんがいるので、それに倣うって感じで礼を尽くしている。

「此度の一件、ギルドには迷惑をかけたな。そちらのギルドに所属する冒険者のおかげで助かった、礼を言う」

セリル姫様は、相変わらずの口調でそう言った。間違っちゃいけない、頭は下げていない。まぁ、王族として頭を下げるわけにはいかないのかな？

「いえ……この国に居を置く以上は当然のことでございます」

バルデンフェルトが運営するわけじゃないが、ギルドには居を構える国に最低限の最大限に協力する義務がある。らしい。

ちなみに、モブ美さんは仕事帰りに騎士たちに襲われ、薬を飲まされたらしい。その薬が、媚薬でありながら麻薬らしく、１度の服用にも関わらず激しい中毒性があるものだった。

そのため、薬欲しさに騎士たちの言うことを聞かされていたため、

ギルドとしては被害者と認定したらしい。

ただ、そう言った事態になった際に、キューマさんに報告するだとか、警兵（警察みたいなの）に相談するといった対処を怠ったとして、謹慎と減給の罰を下されたとか。ちなみに、今は中毒の治療のために入院中。

たぶん、このままこの街で仕事を続けるのは本人としても、周りとしてもいろいろやりにくいだろうから、最終的には違う国なり、違う街に異動されるんだろう。

とまぁ、モブ美さんのことは俺には関係ないので、それ以上のことを知ることはないだろう。

「うむ、問題を起こした者たちは、騎士の位を剥奪し身分を奴隷とした。一族郎党に関しても国の役に付いているものは相応の罰を下してある」

あ、奴隷制とかあるんですね。犯罪を犯したら、全員奴隷になるのか？

まぁ、懲役とかで監獄に入れられたら、国の税金なんかで食わしていくことになるんだろうから、その辺の金額考えたら無駄、それなら奴隷として売った方が金の足しになるって考え方なのかなぁ……

あれ？もしかして俺、過剰防衛で奴隷堕ち？

ははは……それはない……よな？

「さて、今日お主らを呼んだのは他でもない、ギルドには詫びと謝礼。そして、実際に動いた冒険者であるお主に褒美を取らせようと思ってな」

あ、過剰防衛じゃないんですね……よかった。褒美って言って奴隷にするとか、そんな嫌な冗談じゃないですよね？

「ありがたき、幸せにございます」

「……あ……あ、ありがたきしあわせにございます」

ほっとしてたから、礼を言うのが遅くなった。

でも、礼に対して礼をするってどうなんだ？まぁ、いいか。

「ギルドへは、１０万Ｂを支払おう。冒険者……ほぉ、お主はこの国で召喚された勇者だな」

「っは、はい」

覚えてたんですね、全然アクションがないから俺のことなんて完全に忘れたと思ってました。いや、今の今までは忘れてた、っていうか気づかなかったんだな。

「あの時は、実力を隠しておったのか？お主が殺した男は、三井ほどではないが、我が国の騎士の一人だった男だぞ？」

なんて答えればいいんですか？

謙遜？自慢？日本人的には、そんなことないって謙遜した方がいいとは思うけど、この世界ではどんな態度が望ましいかなんて知らねえし。

「まぁいい。確か、お主は我が国の勇者になりたがっていたな。いいだろう。褒美として取り立ててやろう」

マジで！？

あれからいろいろ聞いたりして、知ったけどバルデンフェルトって超大国ですよ？

俺がその国の勇者の一人って……

「あ、あのぉ……せっかくですがそのお話はお断りしてもよろしいでしょうか？」

「なぜだ？お主は我が国の勇者になりたかったのではないのか？」

「いえ、あの時はこの世界へきて間もなかったので、何もわかっていなかったんです。この世界のことを知るにつれて、やりたいことも出てきましたので、申し訳ありませんが、そのお話は……」

「ふむ……ならば、仕方ないな。ならば、何か望みはあるか？」

「……できれば、自分もお金のような形あるものの方が……」

「そうか、わかった。……待てよ？」

セリル姫様はわかったと言った後、なんかつぶやいたっぽいけど、ちょっと遠くて聞こえなかった。

それにしてお、これで正解だよな？やりたいことなんて全然見つかってないけど、バルデンフェルトの勇者にはなりたくない。

実入りが良いとはいえ、バルデンフェルトの勇者ってのは要するに軍隊の一人になるってことだ。留まることを知らず、ひたすらに領土を拡大していくバルデンフェルトの勇者になるってことは、明日にも戦場に立たなければいけないかもしれないってことだ。

いくら腕のいい回復魔法使いがいるからって、それは勘弁だ。

しかも、戦場に立つってことは、また人を殺すってことだろ？それもまだ、俺には覚悟が足りない。

というか、覚悟以上にレベルが低すぎる。俺のレベルは3なんだから……そう言えば、あの一件でレベルは上がったのか？後で調べてみよう。

「悪いが、報酬はしばし待て、少し用意しなくてはならないものがある」

用意？でも、キューマさんの分の金は横にいる侍女みたいな人が持ってますよね

いや、あれも3日のうちに用意したものってことか？１０万Ｂってことは日本円でだいたい１０００万だ、すぐには用意できないのか？

まぁ、ここはつい最近占領したばかりの街だから、手持ちが少ないってことかな。うん、もらえるなら別にいいや。

ふふふ、金さえもらえば、冒険者の仕事なんてしなくても半年は生きていける。そうしたら、冒険者辞めて、どっかで働けばいいんだ。ラッキーだぜ。

「話は以上だ。下がってよいぞ」

「セリル姫殿下、少しお話がございますのでお時間の方よろしいでしょうか？」

「？……ふむ、よいぞ」

いざ退室ってところで、キューマさんは立ち上がらず、セリル姫

様にそう言った。姫様の方も一瞬訝しげな表情をしたけど、今回の件でまだ話したいことがあるみたいだし、うなづいた。

まぁ、俺には関係ないだろうし俺の方はお暇させてもらおう。

あぁ、勇者の件断ったのは失敗だったか？いや、大丈夫だろう。

――――side out

ガイが謁見の間を後にしたが、その場にはセリルとキューマ、侍女、衛兵たちと人数はほとんど変わっていない。

セリルは、玉座に腰かけたまま、いまだに跪いているキューマの言葉を待つ。

「して、話とは？」

いつまでたっても口を開かないキューマにしびれを切らしたセリルが言葉を促す。些か性急ではあるが、セリルは気の長い方ではない。

「無礼な物言い失礼いたしますが、姫殿下は……いえ、バルデンフェルトではこの街の周囲での異変に気づいておりますでしょうか？」

「異変？」

キューマの言葉にセリルは首をかしげる。

この街の近くに迷宮が出現したことが、異変と言えば異変だが、この世界においてはそれほど珍しいことでもない。最近は、迷宮から漏れ出すモンスターも多く、近隣の村や町との行き来が阻害されているらしいが、それも迷宮がある以上は異変と言うほど珍しくない。

少なくともセリルにはキューマの言う異変に心当たりはなかった。

「はい、迷宮からモンスターがあふれ出ております」

「それは、珍しいことではなかろう」

「中階層のモンスターが溢れ出ているのです」

「なに！？」

中階層のモンスター、レベルで言えば２０相当だ。バルデンフェルト本国の王宮騎士であれば平均レベルが５０はあるから、苦も無く倒せるだろうが、今この国に駐在している騎士たちは、中階層のモンスターと同じ２０ほど。一番高いレベルの三井ならば４０は越えているので、余裕をもって戦えるだろうが、それ以外の人間ではかなりの苦戦を強いられる。

セリルたちがいる城があったもともとの国は、平均レベルが15程度の弱小国家だ。その向こうに控えるリエルド王国との戦いのために主戦力を温存していたのが裏目に出たかもしれない。

「至急本国に要請して、増援を求めよう。しかし、到着するまでどうやって時を稼ぐか……」

バルデンフェルトは大陸の西端に位置する国だ。中央に程近いここからでは、魔法による加速を用いても1週間はかかる。軍を率いての移動であれば、ゆうに3倍の時間がかかるだろう。

増援が到着するまでは1月はかかる計算になる。それまでにモンスターが増え続けては、最悪この街を放棄しなくてはいけなくなる。

「しかし、今までどのように民にその話を隠していたのだ？ひとたび気づかれれば、民衆は混乱していただろう」

「はい、私どもも初めは気づいておりませんでした。しかし、近くにあるアヌの森が少々奇怪な状況にあるとの話を受けてギルドの冒険者を派遣したのでございます」

キューマの言うギルドの冒険者とは、ギルドに所属する冒険者ではなく、冒険者のギルド職員だ。彼らは、普通の冒険者としての実績を買われ、本籍を捨てギルド議会と言う国家に所属する冒険者だ。

通常、冒険者と言っても、ギルドと言う仲介を通して仕事をする

だけの人間だが、ギルドの冒険者は違う。

彼らはギルドからの報酬やギルドPというシステムの外にあり、ギルドから依頼された仕事をこなす冒険者なのだ。

当然、実力は精鋭と言うに相応しいものを持っており、年齢、国籍を問わず様々な国のギルド支部の本部に駐在している。

「して、そこでなにが？」

「アヌの森にはただ一つの例外を除きモンスターの姿が一切なく、ドメドメ草や他の薬草が食い荒らされておりました」

「ドメドメ草が？」

ドメドメ草とは、傷薬の原料となる薬草だ。森であれば、大概の場所に自生しており、入手はかなり容易にできる。

しかし、それが食い荒らされたとあっては、傷薬の値段が高騰してしまう。

「そこで、発見されたのが、中階層のボスであるホワイトボアでした。幸い、すぐに討伐が完了しましたので、その場では事なきを得たのですが、その後も調査を続けていくと、中階層相当のモンスターが地上へ出てきているのが多く確認されました」

「なるほど、ギルドが全力を持って隠ぺいしていたということか」

「隠ぺいしていたとは聞こえが悪いですな。ギルドが全力を持って対処していたと言っていただきたい」

少なくとも、中階層のモンスターは上階層のモンスターのように草原や近隣の村を直接襲うことはなかった。地上に出てきた大部分が、森や鉱山などの資源がある場所に陣取っていた。

森にしろ鉱山にしろ、一般人はまず立ち寄らない。もともとモンスターが出現するために、そこを訪れるのは冒険者たちがほとんどだ。そういう意味でも、一般人にことが知られなかったのは、隠ぺいしていたのではなく、事実を公表していなかっただけの話だ。

キューマは立ち上がると、正面からセリルをジッと見る。

「今までは、ギルドの冒険者だけで対処していましたが、一向に数が減りません。ギルド議会にも救援を要請していますが、そちらも到着まで時間がかかります」

「それまでは、互いに協力しよう。と、お主はそう言いたいのだな？」

「はい」

少なくとも、冒険者ギルドだけで対処できない事態と言うことは、今この街にいるバルデンフェルトの騎士たちだけでは対処できない事態と同義だ。協力体制を取るのは間違いではない。

「いいだろう。三井、お前は騎士１０を引き連れて、迷宮を調査しろ。ガルデアンは冒険者ギルドと協力し、地上に出てきたモンスターの討伐の指揮を取れ」

「っは！」

「かしこまりました」

バルデンフェルトの騎士たちはそれぞれ指示されたことを迅速に行動に移す。被害が出るのを防ぐためには、時間が最大の敵だ。

その後も話し合いを続け、有力な冒険者や、騎士たちを動員することで、一応の対処は決められたが、このとき、キューマもセリルも互いにガイのことには一切触れようとしなかった。

互いが互いに、彼には何かあると気づきながら、意図して何も口にしようとはしなかった。

そして、この日からギルドも城も3日前の事件以上に慌ただしい日々を送ることとなる。しかし、彼らはこの先どんな事態が待ち受けているのか、何もわかっていなかった。

気づいた時には、全て手遅れだったのだ。

１１話　報酬はまだ貰えませんでした（後書き）

えぇ、ちょっと大事なお知らせがあります。

詳しい説明など興味ない方のために後書きでもお知らせさせてもらいますが、

今後、箱庭の勇者の更新は週に１～３回程度になります。

たぶん平均すれば、２回ぐらいに落ち着くかと思います。

詳しい理由など知りたい方がいらっしゃいましたら、活動報告の方で説明（いいわけ）しますので、そちらを一読ください。

１２話　武器はかなり高価でした

（略）

城に呼び出された翌日、俺は街を見て回ろうと散策に出ていた。

冒険者として働き始めて街の外はある程度わかってきたが、街の中のことは全くと言っていいほどわからない。

俺が知っている場所なんて、大通りと城の周り、冒険者ギルドのあるあたりぐらいで、南の一角程度しか分かってないんだ。

アリアさんに軽く教えてもらった限りだと、城を中心として南が全体的に庶民のエリア。俺の知ってるのもこのあたりだけだ。

北には鍛冶職人や縫製工場なんかのものを作る人間が多いエリア。東側は貴族とか金持ちが住んでるエリアで、西はスラムとか全体的に治安が悪いエリアって感じらしい。

西側の比較的、城に近いあたりには奴隷市場があるらしく、この間の偽合コン事件で捕まった元騎士たちはもうそこで売りに出されているらしい。

治安が悪い所ってのは怖いし、元騎士の連中を笑いに行くほど腐ってもいないので、西側には用はない。

金持ちに用があるわけでもないので、東側もどうでもいい。

と言うわけで、俺は北にある職人のエリアへとやってきたわけだ。

これがまた面白い。

技術レベルは機械どころか蒸気機関も取り入れられていないっていうのに、魔法があるおかげなのか大量生産品とかのレベルが思ったよりも高い。

プラスチックだとかの化石燃料を使った素材はさすがに見当たらないけど、木や鉄なんかを使って作られたアクセサリーだとか置物は、地球で売られていた工場で作られた物なんかと比べても遜色ないものが並んでいる。

一方で、武器や防具なんかはワンオフのものなんかが目立つ。当然、大量生産されたものだって売られているには売られているが、店の人間の技術を前面に押し出すためか、それぞれの店の見える範囲に置かれているものに同じようなものはほとんどなかった。

武器の良し悪し、技術の有無なんて俺には判断できないが、値段だけ見ると結構いいものに見える。たぶん……

興味本位で、見かけた中で一番デカい店に入ってみたけど、やばかった。

武器の値段は０が最低でも４つはあったんだ。

日本円で最低でも百万円。武器って高すぎだよ……

まぁ、他の店にも冷やかしに行ってみたけど、ピンキリってことが分かった。

比較的小さな店では一番高くて０が４つ。デカい店の最低品が、最高品として並んでた。

中くらいの規模の店では、バランスよくって感じ。

それでも本当に安いものは大量生産の粗悪品ぐらいで、それなりの武器を買おうとしたら云十万円は覚悟しないといけないってことが分かった。

バスタードはけっこう気に入ってるけど、やっぱり高い武器が欲しい。

これはもう、お姫様からもらえるご褒美に期待するしかないな。うん。

その後もテキトーにそこらの店を冷やかしながら、南地区へと戻るために足を進めていく。

知らず知らずのうちに、体は金持ちってやつに拒否反応を示していたのか、帰り道は西側沿い。

不意に視界に入ってきた店にふらりと足を運んでみれば、そこには薄汚れた布に身を包んだ人間がずらりと並んでいる。

子供や大人って区別はないらしく、老若男女けっこう多くの人がいる。

視界の隅に見覚えのある顔があった気がしたけど、気にしないことにした。

どうやら、ここは奴隷商らしい。

「ようこそいらっしゃいました。本日はどのような奴隷をお求めでしょうか？」

声をかけてきたのは、俺のイメージしていた奴隷商人とは違って、結構まともそうな男だった。

なんか、こういう場合の奴隷商人って小太りの脂ぎったおっさんじゃないのか？

まぁ、いいけど。

「いや、ここに来たのは偶然なんで。別に奴隷が欲しいわけじゃないです」

「なんと！？では、偶然にこの店に来たと言うことはこれこそ神の意志に違いありません。どうぞ、ごゆっくりと見て行ってください」

無理やりだなこの野郎……

俺は、日本人だからって、奴隷みたいな人身売買に拒否感と言うか嫌悪ってのはあんまりない。

ここに居る人間は、悪事を働いただとか、やむに已まれぬ事情が

あって売られたって理由があるんだろう。

出稼ぎで不法入国とか、何の罪もない人間が払った税金でのうのうと生活する囚人なんかのことを考えたら、奴隷のほうがマシだろう。ってのが、俺の考え方だ。

さすがに、無理やり誘拐して売っているとかだったらムカつくし、叩き潰してやりたいけど、その辺は俺には分からないしな。まぁ、見覚えのあるあいつらは間違いなく犯罪人だってのはわかってる。

「ここに居る奴隷ってのは、どうして奴隷になったんですか？」

「はぁ？多くの場合は、犯罪人への罰ですね。罪の重さによって買い戻しの額が決められるので、重犯罪者はなかなか奴隷身分から解放されません」

「つまり、罪の重い犯罪者は高いんですか？」

「いえいえ、その逆です。重犯罪者は非常に安価です。ただし、罪の重い犯罪者の場合は買う人間にそれなりの用意を求めます。逃げられたりしたら大変なので」

つまり、家に牢獄みたいなもんを持ってる必要があるってことか。

まぁ、看守とかその辺も必要だろうから、値段の安い重犯罪者は、数を求めるデカい工事とかの現場での労働力として買われるらしい。

多くの場合は、貴族が買うとか。

富裕層は重犯罪者より値は張るものの、軽犯罪者だとか、口減らしで売られた奴隷を買って、使用人にするらしい。

この場合は、軽犯罪者より口減らしで売られた奴隷の方が多いらしいけど。

まぁ、口減らしで売られた奴隷なんかは、金がたまってもよっぽどの額じゃないと、家に戻ることも出来ないし、一人暮らしだってそれなりの額が必要だから、必然的に働く期間が長くなるから、結構元が取れるとか。

「誘拐して、無理やり奴隷を売るってことはないですよね」

「ははは、さすがに私どものような店ではそのようなことはしませんよ。これでも、バルデンフェルトに認可を受けていますので」

「認可？」

「はい。私どもデレイア商会は奴隷以外に食料や衣類なども販売しておりますし、それなりに大きな部類に含まれております。南地区や東地区でも店舗を構えておりますので、お求めの際は是非デレイア商会をご利用ください」

商人ってのはさすがに商魂たくましいな。

「おっと失礼、認可のことでしたね。奴隷商というものは、お客様

のご指摘の通り、犯罪を行う者も少なくありません。そう言った、犯罪への対策として国が店舗を調査し、認められた店舗のみが店の前に看板を立てることができるのです」

「つまり、一度認可を受ければ、その後はやりたい放題ってことですか？」

「まさか。当然、定期的に調査が入りますし、年に数回予告なしでの調査も入ります。その時に誘拐した人間を奴隷として売っていれば、その店は即座に潰されてしまいます。つまり、店の前に看板がある奴隷商はそういった犯罪とは無縁の店舗と言うことで安心して奴隷をお求めいただくことができます」

誘拐した人間を奴隷として売るのは犯罪だし、それを買うのも犯罪になるらしい。

まぁ、きちんとした店で奴隷を買った場合は書類やらの手続きも多く、国に奴隷を所有することを報告しなくちゃいけないんだとか。

看板のない店で奴隷を買うと、そう言った手続きは一切なく、隷属の首輪っていうギルドカード並みのチートアイテムを渡されるだけで終わるって……まぁいいや。

治安の悪い西地区でも、奥の方に行くとそう言った店もあるらしい。

ただ、そう言った店はアングラに潜り込んでいるだけに、探すのも一苦労。

そもそも、国の騎士とか警兵以外がそう言った店を探すことも犯罪に当たるらしく、一般人が捕まったこともあるらしい。

まぁ、それぐらいの軽い犯罪だと、何日か独房に捕まって、その間の食費なんかを含めた罰金を支払って解放されるらしい。

何も知らない俺に懇切丁寧に説明してくれるなんて、この人はけっこういい人だな。うん。

でもまぁ、俺が知る必要はあんまない知識ばっかだったけど。

居候の身でペットを飼わせてもらってるんだ、奴隷が欲しいなんて言えるはずない。というか、奴隷が欲しいわけでもない。

その後、適当に話を聞いてからデレイア商会を後にした。

うん、美人の女奴隷が欲しくなったけど、少なくともアリアさんの家に居候してるのに買えるわけないな。いつか、買いたい。

で、家に帰るとアリアさんと三井さんがお茶をしていた。

いや、三井さんはけっこうイケメンだし、美人のアリアさんと二人でいるとけっこう絵になるんだけど、なぜにあんたがここに居る。

「あ、帰ってきたね。お邪魔してるよ」

「お帰り、北の方はどうだった？」

「ただいまです。北はかなり面白かったです。見るものみんな見慣れないものだし、武器屋なんかもいろんなものが置いてあったんで。で、なぜに三井さんがここに？」

三井さんは出されていたお茶に口をつけてから、まじめな表情になって口を開いた。

「実は、いろいろと面倒なことになってね。この間の件の報酬と冒険者としての君に依頼があるから、また城に来てほしいんだ」

……単なる伝言に三井さんが来るってのは、よっぽどのことじゃないのか？

聞いた話によれば、この街にいるバルデンフェルトの騎士の中で最強なのは間違いなく三井さんだ。その三井さんがメッセンジャーボーイとして寄越されるってことは、事態がよほど切迫しているか、よほど暇か……

暇なんじゃないのか？

そうだよな。よく考えれば、隣の国に戦争を仕掛けるって話はよく耳にするけど、まだ戦争が始まったわけじゃない。

戦争が始まる直前の、平和な日常を過ごしてる段階のはずだ。

……すいません。単なる現実逃避です。

間違いなく事態が切迫してるんだろう。じゃなきゃ、三井さんの表情に説明がつかない。

「わかりました。で、すぐに行った方がいいんですか？」

「いや、明日の朝に迎えの馬車をよこすから、それに乗って城にきてくれ。詳しい話は、明日」

「はい、了解です。あんまり、面倒な話は嫌なんですけどね」

「無理だろうね。覚悟しといたほうがいいよ」

三井さんの言葉に俺はため息をついて、三井さんを見送った。

世間話でもしたかったが、三井さんもけっこう忙しいらしい。

あぁ、褒美でしばらく遊んで暮らすってのはダメになったっぽい。

勘弁してくれよ……

１２話　武器はかなり高価でした（後書き）

応募作の執筆が思った以上に進まないので、先に箱庭の更新です。

奴隷の話はまぁ、適当に流してやってください。

プリル事件の前知識として、誘拐して奴隷を売るって言う馬鹿がいるって話がしたかっただけなんで。

次回はようやくレナが登場……するかもしれません。

13話　報酬は〇でした（前書き）

ずいぶんと更新が遅くなってしまいました。

いろいろとプライベートが忙しく、応募作品すらまともに書けていません。

少しはましになってきたので、できるだけ迅速に更新していきたいと思います。

ちなみにタイトルはネタです。意味が分かった方は一人でにやにやしましょう。

13話　報酬は〇でした

（略）

三井さんが家を訪れた翌日の朝、伝えられていた通りに馬車が迎えに来た。

依頼云々は激しくめんどくさい気がしたけど、ご褒美がもらえなくなると俺の幸せ未来計画が台無しになってしまうので、俺には選択肢ってものが用意されていなかった。

アリアさんは仕事があるし、呼ばれたわけでもないので、馬車に乗ったのは俺と俺の肩に乗るスクルドだけだ。

この世界にきてから11日目だってのに、城に来るのはこれで3度目だ。

なかなかにハイペースだと思う。なにせ、4日に1回のペースだ。

俺みたいな一般人なら、もともとこの世界にいる人間だってこんなハイペースで城へ来ることなんてないんじゃないだろうか？

いや、この世界の人間じゃないからこそ何度も城にくる羽目になってるのか？

まぁいいや。とりあえず、今までと同じく城に着くと控室みたいな部屋に通された。

しばらくぼけー、としていればこれまた今までと同じように騎士

の一人に呼ばれて謁見の間まで通される。

謁見の間の半ばまで歩いたところで、お姫様が来る前に跪いて無礼のないようにする。って予定だったのだが、これがいきなり崩された。

なぜにお姫様がすでに待機していらっしゃるのでしょうか？

おかげで謁見の間に入ると同時に、俺は動きを止めてしまった。

いや、俺を連れてきた騎士に小突かれたりはしなかったものの、咳払いでせかされる。

「っと」

慌てて半ばまで歩いたところで、跪いた方がいいのか、立ったままでいいのかとあたふたしているうちに、お姫様が口を開いた。

「よく来た。さっそくだが、要件に入らせてもらおう」

あの、跪かなくていいですか？

うん。突っ込まれないし、立ったままでいいか。

「三井が伝えているとは思うが、お主に依頼したいことがある」

……ご褒美は？

要件って依頼が先！？

っくそ、褒美をもらう側として急かすわけにもいかないし、とりあえず聞くしかないのか……忘れてないですよね？

「先日から周辺で魔物の動きが活発になっていてな。おそらくは迷宮の内部で何かが起こっている」

魔物とモンスターの違いはなんでしょうか？

お姫様的にモンスターって言いにくいとか？

まぁいいや、そんなんどうでもいいし。

「お主には迷宮の探索を行ってほしい」

「……あの、姫様？」

「なんじゃ」

「その迷宮って今も結構な人が入ってるんじゃないですか？」

「うむ」

うむって、あの……

「俺よりもランクが上の人間だって探索してますよね？」

「そうじゃな」

……俺、Gランクですよ？

迷宮の探索って言ったら、比較的安全な迷宮だってDランク。つまりは、俺の3つ上のランクの仕事だ。

しかも、この街の近くにある迷宮。通称『漆黒の迷宮』は迷宮発見から1年以内、最高危険度に分類される迷宮だ。

そこの探索って言ったら、Aランク相当の仕事だ。

Aランクの人間って言ったら、ギルドに入って日の浅い俺だって二つ名ぐらい聞いたことのあるレベルの人間だぞ？

さすがに、Aランクなんてこの街に2人くらいしかいないから、Bランク5人とCランク2人とかでも探索に乗り出すけど……

そんなレベルの人間が1人か2人くらい重症か瀕死、下手すりゃ動かなくなって出てくる次元の話だ。

それを俺に行けと……

「俺はGランクですよ？　ギルドに入って数日の俺だってあの迷宮の危険度くらいは話に聞いています。それを、俺に探索しろって言うんですか？」

「Gランクとは言え、元は我が国の騎士だった男を倒せるだけの実力は有しているだろう。安心しろ、お前が殺したあの男は冒険者で言えば、Cランク程度の実力はあったと聞いている」

じゃあ、死にますよね。

Cランクってあれじゃん。B5人、C2人で入って死亡する最有力候補じゃん。

しかも、俺があの騎士を倒した時だって無我夢中で、なにしたかわかってないのに。

「……でも、危険なことに変わりはありませんよね？　騎士の皆さんと一緒に探索に行くんですかねぇ？」

「そんなはずはあるまい。そもそも、我が国の騎士たちは、街の周りの魔物たちを倒すので手一杯だ。迷宮にはお主とお主の仲間だけで言ってもらう」

すいません。俺には仲間なんていません。

いや、アリアさんが仲間って言えば仲間だけど、あの人は非戦闘

員だし。

スクルドか？

スクルドだけが頼りなのか？

「……ちょっと、それは厳しすぎるので、勘弁してもらえませんか？」

「ほぉ。ならば、あの狼藉者を倒したお前への報酬は、我が自ら依頼したこの件を断る。ということでいいのか？」

……依頼を先に話したのは、このためか！

っく。俺のニートライフが……

受けても迷宮探索。断ってもギルドの仕事をしないと食っていけない。

に、逃げ場がないだとぉ！？

「……」

「そう難しく考えるな。別に迷宮を攻略するように言っているわけではない。何か異変があるかもしれんから、実際に異変があるかどうか調べてほしいだけじゃ。魔物と戦う必要はない」

なら……いいのか？

そうだ。前向きに考えよう。

金さえもらえれば、高い装備を買える。高い装備を変えるってことは俺の安全性が増すってことだ。

お姫様からの依頼ってことは、当然この依頼を完遂すれば報酬が支払われる。

これから毎日危険な仕事をするのと、今回一回だけ危険な仕事をするのはどっちが安全だ？

当然後者だな。

そうだ。これは、明日からのニートライフを送るための試練なんだ。

この試練を乗り越えれば、極上で薔薇色でメルヘンチックなニートライフが待っているんだ。

そうだ、よし頑張れ俺。負けるな俺。大丈夫さ俺。

「わかりました。その依頼、受けさせてもらいます」

「おぉ、そうか。そう言ってくれると思っていた」

お姫様は俺の言葉に諸手を上げて喜んだっぽい。

っくそ。選択肢を潰しておいてよく言うぜ。

だけど、これで１０万Ｂは手に入る。

そうだ。１０万Ｂもの大金があれば、武器と防具にそれぞれ５万近くは使える。どうせ、成功報酬がもらえるんだ、けちけちしたって仕方ない。

できるだけ怪我したくないし、防具に６万、武器に３万、残りはスクルド用の装備ってところだな。

大事な相棒だし、こいつにも怪我してほしくない。

俺は、肩に乗ってのんきにあくびしている相棒を見つめながらそんなことを考えていた。

「よし、では件の褒美を授けよう」

来たぞ。

お姫様の言葉に従って後ろの侍女さんが……大金の入った……袋……を？

あの、なんで何も持ってないんですか？

もしかして馬鹿には見えない袋に入れてるとか？

でもそれなら、中身は透けて見えますよね？

淡々とこちらに歩み寄ってくる侍女さんの手には指輪でも入ってそうな小箱。

あ、手ぶらじゃなかったんですね……でも、小箱？

ほんとに、地球でいうところの『あたりは夜の帳も落ちて、にわかに暗くなっていた。

しかし、大都会東京。無数のネオンはそんな夜の闇すらも明るく照らし出している。

そんな明かりをはるか眼下に見下ろしながら、二人はホテルの最上階にあるレストランでの食事を今まさに終えようとしていた。

「実は今夜君にプレゼントがあるんだ」

モテ男はそういって、懐に手を入れた。モテ美はそんなモテ男を不思議そうに見つめている。

不思議そうな顔をしているモテ美の前に差し出されたのは、小さな箱。周りは紫色のフェルトに包まれている小箱だ。

モテ男はそっと箱を開いた。そこに鎮座していたのは目を見張るほどの大きさをしているダイヤを乗せた指輪。

「結婚してほしい」

「う、うれしい……」

ポロリとモテ美の瞳から涙がこぼれた。

「幸せになろう」

「……はい」『ってな感じだ。

え、わかりづらい？

つまり、『モテ美の前に差し出されたのは、小さな箱』←こんな箱なんだよ。

でも、まさかねぇ……

なんで姫様が俺に指輪なんて送るんだよ……

まさか、プロポーズ！？

はいはい、そんなわけないですよねぇ……

言ってみただけですよ。ったく。

じゃあ、なんだ？

あのサイズってことは……まさか、今まで見たこともない貨幣なのか！？

俺の見たことのある中で最高のやつは、１万Ｂ金貨だ。

キューマさんが渡された１０万Ｂも、１枚の金貨でまかなえるけど、実際に渡されたときはじゃらじゃら音がしてたから、複数の硬貨で渡されていた。

今回の騒ぎで、俺とギルドは同等の働きをしたって言っていいはずだから、俺の貰える額が１０万以下ってことはないはず。

つまり、１０万以上の硬貨ってことだ。

ってことは、１００万Ｂ白貨か、１億Ｂ白貨、はたまた１００億Ｂ白金貨、１兆Ｂ白金貨ってことも……ありえないな。

いくらなんでも１００億とか１兆はありえないな。１億も微妙。でも、１００万Ｂ白貨なのか？

あんな丁寧に運ぶってことはそれだけ貴重なものってことなんだよな……

「どうした、受け取らんのか？」

「へ？」

どうやら、俺がいろいろと妄想を巡らせているうちに侍女さんは

俺のすぐそばまで来ていたようだ。

すでに小箱は開けられ、その中身が見えるようになってる。

俺は、緊張に激しくなる鼓動を感じながらゆっくりと視線を箱の中へと向けた。

「……指輪？」

そう、指輪だ。金色のシンプルなリング。

台座の下に潜り込んでいなければ、なんの装飾もなされていない、宝石の一つもついていないリングにしか見えない。

純金製とか？

これがご褒美？高く売れるのか？

「それは、マジックアイテムの一つでな。名を『賢人の指輪』と言う。魔法威力向上といった作用があるが、そんなものはおまけだ」

……俺は魔法なんて使えませんよ？

あれか、この世界では冒険者が魔法を使えるのがデフォなのか？

そういう意味でも、俺が勇者って意味でも、普通とは違う。

俺はこの世界でも異端なのか？

「というわけだ。わかったか？」

「え？　あ、はい」

「ふむ。ならば、いい。では、さっそくつけてみるといい。お前が持ち主と認められなければ、別の……そうだな。その指輪の価値とは比べ物にならないが、ギルドに払った慰謝料と同額ぐらいは支払おう」

俺的にはそっちのほうがいいです。

なんだよ、さんざん期待させてこの微妙なプレゼントって……

仕方ない、とりあえずつけてみて認められないことを願おう。

と、言うわけで指輪を手に取って指にはめる。少しデカめだし、中指ぐらいの大きさか？

指輪なんてつけたことないってのにまったく。

するり、と指輪は俺の指を通し、ずれることはない。

サイズを計ったわけでもないのにぴったりだ。

「うむ。思った通りだな。無事に持ち主と認められたか」

「え？　魔法の試し打ちとかしなくていいんですか？」

「試し打ち？　そんなものする必要はない。持ち主と認められなければ、ハメた指が消し飛んでいただけだからな」

怖えよ。

え、なに？　俺って今、自分の指が消し飛ぶかもしんない状況だったの？

先に言ってくれよ。

あぁ……でも、報酬は指輪か……

しょうがない。マジックアイテムってことは、それなりの値段で売れるだろ。

どっかの店で売るしかないな。

そう思って俺は指輪に手をかけた。が、抜けない。

「？」

いくら引っ張っても指輪はびくともしない。

まるで、俺の指に張り付いたみたいだ。

「あぁ、その指輪は一度ハメると持ち主が死ぬまで外れないぞ」

……それって呪いの装備じゃないですか？

売れないじゃん。

外れなかったら、売ることも出来ない。

俺の安心迷宮探索計画が……音を立てて崩壊していく。

さっきの依頼を断りたいけど、報酬は受け取っちゃったし……もしここであの依頼を断ろうものなら、どんな目に遭うか想像もつかない。

「まさか、報酬を受け取ったというのに依頼を断るとは言わぬよな？」

……先手を打たれました。

この間の草原のモンスター討伐の時に、世間話ついでに三井さんが言っていた。

あのお姫様は怖い。

礼節は弁え、最低限相手の意思も尊重するが、最低限の話だ。

自分の計画のためならどれだけ陰気で陰湿で陰険で凶悪な手も辞さない人。

あらゆる逃げ道をふさぎ、絶対に自分の計画通りに事を運ぼうとする人。

そんな人だと。

人生経験未熟な俺がそんな相手に立ち向かえるのか？

答えは否だ。

そして、俺は逃げ道をふさがれ、迷宮探索と言う道を歩まざるを得なくなってしまった。

安心迷宮探索計画は出鼻から崩壊し、新たに与えられた装備は俺には何の役にも立たない指輪一つ。

もともと持っていた武器のバスタードにグルカナイフ、サ●ヤ人の戦闘服的な防具に手甲。

全部、中古か迷宮でも上の階層で見つかったレアともいえない装備だ。

これで迷宮探索とか……死ねるし……

断るわけにもいかない。家に帰る馬車の中で俺は泣きたくなった。

――――side　out

街の大通りを彼女は歩いていた。

フードを目深にかぶり、その顔は隠されているが、彼女が纏う空気と言うものが彼女が一般人とは隔絶した人間だと言うことを物語っている。

見る者が見れば、彼女が殺気をまき散らし、フードに隠され表情が見えぬとはいえ、何かに怒りを覚えていると言うことに気が付いただろう。

そんな彼女が放つ殺気に気が付かぬ一般人は彼女の周りを普通に歩いていくが、ある程度の実力を持った人間は彼女からは距離を取っている。

放たれる殺気、ただ歩く姿だけでも彼女の実力は明らかだった。

「……クレイ様」

フードで顔を隠す女性、レスティアナ・ブロウティアは静かにつぶやいた。

雑踏に紛れたその声は、誰の耳にも届きはしなかった。

１３話　報酬は〇でした（後書き）

以前から指摘していただいていた、「？」「！」の後へ空白を入れるという点は、応募作を書くに当たっての最低限のルールに抵触するため、矯正中です。
１２話までの修正はしませんが、今後は空白をいれます。

ちなみに、旧作で登場したレナの名前が変更になりました。

レナ・アンストロ・リィガー　→　レスティアナ・ブロウティア

愛称は「レナ」と変わりません。変更の理由は特にありません、気分です。

１４話　迷宮挑戦は命知らずの証でした

（略）

城でお姫様から依頼（めいれい）された翌日、嫌なことはさっさと済ませるに限るので迷宮へとやってきた。

入り口には危険と書かれた看板や、富士の樹海にあるような命は大事にしましょう的な看板が立てられているけど、ここは自殺の名所なのか？正直入りたくなくなってきた……

だけど、ここで引き返したりしたらお姫様にどんな報復を食らうかわかったもんじゃない。

逃げ出したくなる気持ちを無理矢理胸の奥底に押し込めて、迷宮の中へと足を踏み入れる。

さすがに迷宮に入ると同時にモンスターが襲いかかってくるわけはなく、入ってすぐのエントランス……迷宮の中でエントランスってのも変な話だが……には、冒険者が数組。

それぞれ行きか帰りのどちらからしく、傷の治療をしているか、装備の確認をしているかといった感じだ。

で、１つ気になるんだけど。

迷宮探索ってグループでの探索しか受け付けてないの？

なんか、みなさん最低でも４人とかのパーティですよね。

いくらなんでも俺以外全員グループってのは予想してなかった……腕自慢のやつとかが、1人で入るのとかありそうなのに。

1人と1匹で迷宮へ挑もうとしている俺たちはエントランスの中で浮きまくっていた。

周りの冒険者たちはみんな装備だって豪華で強そうだ。一番あからさまにこっちを見ている身長が俺の1．5倍くらいありそうな大男なんかは顔だけで俺より強いってわかる。いや、体格だけでもわかるな。

こっちなんかは、装備だってみすぼらしく、防具だってしょぼい。唯一まともな装備は、昨日お姫様からもらった指輪くらいのもんだ。

指輪だってどれだけ使えるもんかはわからないし、もしかして俺はここで死ぬんだろうかなんて思えてくる。

やっぱり、三井さんとは言わないけど、せめて騎士さんとか兵士の数人ぐらいはお供にほしかった。

激しく帰りたい……

「おい、坊主」

「はい？」

呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃじゃ……じゃなくて、呼ばれて思わず

返事をしたけど、ここに俺の知り合いなんかはいない。

振り返ってみると、そこにいたのはいかついおっさん。

「お前もこの迷宮に入る気か？」

「えぇ……まぁ」

たぶん帰りなのかな？

肩には真新しい傷があり、ちょっと怖いくらいの血が流れている。

「ランクとレベルは？」

「言わないといけないんですか？」

ランクもレベルも地球で言えば、個人情報に匹敵する……というか、まんま個人情報だ。下手に知らない相手に話したりしたら、盗賊だとかに流れて行って襲われることもある。ってのは三井さんから教えてもらった話だ。

すくなくとも見ず知らずのおっさんに話していいもんじゃないのは確かだ。

「……その反応は、何も知らないガキってわけじゃないのか。だが、

まだまだ新人だな」

おっさんは言いながらとんとんと子供の胴体ぐらいありそうな腕に巻かれた腕章をトントンと叩いた。腕章？

見覚えなんかはないけど、変なマークが描かれてる。

「こいつをつけてるのはギルド所属の冒険者。まぁ、迷宮の管理人ってとこだな。迷宮に入る冒険者の管理をするのが俺の仕事だ」

迷宮の管理人？そんな話聞いてませんけど……

いや、あたりを見回しても腕章をつけた人間が何人かいて、他の冒険者グループと話をしてるみたいだし、本当のことなのか？

周り全員サクラってことはないよな……

「つまりは、レベルとランクで迷宮に入れるかどうかを判断するんですか？」

「ん？　いや、入りたければレベル1だろうがなんだろうが入れるぞ。ただ、命の保証はしない。まぁ、確認したのはレベルとランクからどの程度の階層で探索するのが望ましいかアドバイスをするぐらいだ」

やっぱり帰りたい。

ここで、レベルが低かったら追い返すとか言われれば、逃げられたのに……

誰でもウェルカムなんて言われたら、帰れないじゃないか。ったく、空気読めよおっさん。

「で、坊主のレベルは？」

「5」

「は？」

「だからレベル5」

「聞き間違いじゃなければ、5レベルってことでいいんだな？　15でも25でも、ましてや55でもなく5」

「そうだよ」

さすがにおっさんも目を丸くしていた。

「坊主、あの看板が読めるか？」

「命は大事にしましょう。あなたの命はご両親が云々って書いてある」

「そうだ。確かに俺もこの家業を続けて長い。冒険者になったからには迷宮探索で一山当てようって連中を何人も見てきた。だがな、そんな連中だってレベル1桁で迷宮に潜るなんて聞いたことがねえよ」

そりゃそうでしょうよ。

俺だってお姫様の依頼（めいれい）じゃなかったら、こんな危ないところに来たくなかったし。

「レベル5で迷宮探索なんて自殺行為だ。いくらなんでも認められねえよ」

「ですよね～」

もしかして、帰れる！？

ここでおっさんがダメだって言えば、面目も経つからお姫様に言い訳ができる。

よし、頑張れおっさん。頑張って俺を説得してくれ。

「今この迷宮はおかしくなってるんだ。Aランクのやつだって一人じゃ潜ったりしねぇ。一人で潜るなんてそれこそ、バルデンフェルトに認められた冒険者のシシオーって男ぐらいのもんだ」

ん？

おっさん、今なんて言った？

「坊主、いいか？　命は無駄にしちゃいけねェ。なんなら、これから来るシシオーの武勇伝を特別に聞かせてやる。だから、おとなしく家に帰んな」

聞き間違いじゃないな。どう考えても俺の名前だよね、シシオーって……

まさか、すでに根回しがされてたって言うのか？

「あの、おっさん？　そのシシオーってのはそんなにすごいのかい？」

「おぉ！　今日まで俺も聞いたことなかったんだがな。お達しが来たんだよ。シシオーって冒険者が迷宮に潜るってな。で、そいつはいったいどんな男かって聞いてみたら、なんとまぁあのバルデンフェルトの騎士を一人でバッタバッタと切り倒したって言うじゃねえかよ」

……俺が倒したのは1人ですよ？　どうやってバッタバッタと倒すんですか？

「いま街に来てる元冒険者の三井　純がその実力を認めるほどの男だ。そりゃあすごい男だろうよ。だからな、きっとそいつは有名になる。なんでもこの迷宮に潜るのは初めてらしいんだが、きっと他の迷宮はあらかた回ったんだろうよ。この街じゃ無名だが、すぐにシシオーの話題で持ちきりになるだろうさ。だからな、そいつの武勇伝を教えてやるから、坊主は帰った方がいい。武勇伝を知ってるってだけでお前、酒場じゃ一躍人気者になれるぜ」

そうですね。その武勇伝が本当にあればね……

帰れそうにない。

ここで帰ったら、お姫様からお仕置きされるだろうし、このおっさんだってシシオーを追い返したって罰を喰らうかもしれない。

見ず知らずのおっさんだけど、見ず知らずの俺の命を心配してくれるようないい人だ。

俺のせいで不幸な目に遭ってほしくない。

いや、ここで帰れたらどれだけよかったか……

「悪いけど、帰るわけにはいかないんだ」

「おいおい、命を無駄にする気か？　帰った方がいいって」

「……死んだら骨は拾ってくれ」

「死ぬってわかってて行くってのか？　……あぁ、ったく。最近のガキは命知らずって言うかなんて言うか。ちょっと待ってろ」

おっさんは、ぼりぼりと頭の裏をかきながら懐をまさぐった。

なにやらブレスレットを取り出すとこっちに差し出してくる。

「こいつをはめて行きな。死にそうになったらこのボタンを押すんだ。そうすりゃ、俺や管理人が助けに行く。だが、あんまりにも無謀なことはするんじゃねえぞ」

俺はおっさんからブレスレットを受け取ると左手にはめた。

装飾はあまりなされていないが、３つのボタンがある。

「こんな便利なもんがあるの？」

「あぁ、命の危険がつきものの迷宮だが、いくらなんでも簡単に冒険者の数を減らすわけにもいかねぇ。３つあるボタンはそれぞれ、救援要請、緊急事態通知、マップ機能だ。迷宮内では助け合いが基本。まぁ、お前みたいな坊主は自分の身を第一に考えるんだな」

なんでも、救援要請は押せば近くにいる冒険者や迷宮の管理人で

あるおっさんたちのブレスレットに通信をおくれるらしい。本来は、突然モンスターの大群に襲われたときなんかに使うらしい。

緊急事態通知は、これまたモンスターの大群が突如として迷宮を昇り始めた時に警戒を知らせるためのボタン。救援要請以上に使われる機会は少なく、全ての迷宮で使われているが過去に2度しか使われたことがないらしい。

「本来は、中階層よりも下に行く人間が使うもんなんだがな、ちょいと設定をいじってどのボタンも俺にしか通信が届かないようにしてある。特別扱いはするもんじゃないんだが、今回だけは特別だ」

おっさん……いい人だ……

あの傷だって、俺みたいなやつを助けるために無茶をしたんだろう。実際どうなのかは知らないけど。

あのさ、これ以上血が流れたらあんた死ぬんじゃないかって思うんだ。

ダメだ。おっさんにこれ以上血を流させちゃいけない。

変な使命感を胸に俺は腰に差した剣の位置を軽く直して前を見据えた。

「よし、行ってくる」

「おぉ。死ぬんじゃねえぞ」

たぶん、大丈夫……だと思う。

そうじゃなきゃ困る。

やっぱ自信ないし……

俺の不安もよそに迷宮の探索はつつがなく進んでいた。

迷宮ってのは人間が全く持ってその存在を解明できていないらしく、初めて迷宮に潜っている俺にはあらゆるものが不思議でしょうがなかった。

だってさ、緑色に光ってる魔法陣に乗ったらワープするとか意味わかんないじゃん。

おっさんに渡されていたブレスレッド、そのマップ機能で調べてみたら、一つ下の階に進んでたから、あれが階段の役割をはたしているんだろう。

魔法スゲー。

で、今は地下5階まで来ました。

暇です。モンスターが居ません。

角を曲がるたびにびくびくしながら進み、なぜそんなものが存在するのかって扉をびくびくしながら開き、魔法陣で下の階に進むたびにびくびくしていたんだが、いい加減疲れてきた。

モンスター遭遇率０％です。

一応、この迷宮は地下５２階まで探索が行われているらしいけど、３０階ぐらいが上階層と中階層の境目に当たるらしい。下階層は今のところ確認されていないから、中階層との境目に関しては不明。

で、今俺がいる上階層は雑魚モンスターが３匹くらいでまとまって現れたり、ちょい強めのモンスターが１匹で現れたりするって聞いてたんだが……

いや、うん。なんで？

もしかして、俺の前に潜った冒険者が全部倒しちゃったのか？

でも、どういう原理かわからないけど、モンスターは無限に湧き上がるらしいから、完全に０ってのはちょっとおかしいんじゃないのか？

そういや、お姫様もおっさんも迷宮で異変って言ってたけど、これがその異変なのか？

そうだろうな。うん、たぶんそうだ。

いや、待てよ？

迷宮の外にモンスターがあふれてるって言ってたよな……

たしか、モンスターは迷宮の中がいっぱいになって狭くなったから外に出るって前にキューマさんが言ってたよな。

だとしたら、これが異変ってのはおかしいか？

上階層にモンスターがいないんだから、もっと下の階で狭い思いをしたら、こっちに来るはず……

だったらなんでだ？

まぁ、それを調べるのが今回の俺の仕事なんだけど……

とりあえずもう少し進んでみよう。

と、思ったら角を曲がった先に何人かの人間が横たわっていた。

あれ、けが人？

「大丈夫ですか？」

周囲にモンスターの影がないことを確認しながら倒れている人間に近寄ってみる。

が、反応はない。

どうやらすでに事切れているようだ。

某ＲＰＧで言えば、返事はないただの屍のようだ。って感じだな。

そんな冗談はどうでもいいんだけど、この人たちはどうして死んでいるんだろう？

鎧には大きな損傷があり、頭からは血を流していた。そんな男女の死体が４つ。

普通に考えればモンスターに襲われたんだろうけど、モンスターの全く見当たらないこの迷宮でどうやってモンスターに襲われるんだ？

もしかして、俺が見てないだけでモンスターはいるのか？

しかも、俺よりもはるかに重装備の冒険者を４人も倒すようなモンスターが……

いたらやだな。

「南無阿弥陀仏」

とりあえず死体を１か所にまとめて合掌する。

どこか安全な場所に、できたら迷宮の外とかに埋めてあげたいところだが、こんな死体を４つも運べるような力は俺にはない。

仮にそんなことができたとしても、この人たちを倒したモンスターに遭遇したら俺の命だって危ないんだ。

1か所にまとめるだけで勘弁してほしい。

とりあえず、迷宮探索を続ける。

10階まで到達したが、5階で見かけた4人の死体以外は、やっぱりなんにも遭遇しなかった。

モンスターもいない。冒険者もいない。宝の番人もいない。いない。いない。いない。

何にもいない。

少し退屈だ。

8階ぐらいまではびくびくしてたけど、やっぱりなんにもいないので、少し気分も楽になってきた。

お姫様も言っていた通り、俺は調べるのが仕事でモンスターを倒したり宝を見つけるのが仕事じゃないんだ。

モンスターに遭遇しないのは実にありがたいことなんだ。

というわけで、俺は9階からはスクルドとおしゃべりをしながら

歩いている。

とはいっても、俺が話すことにスクルドがキュイキュイと返事をするだけ。

相手からも何か話題を振ってほしい。

……いや、むりか。

そんなこんなで、迷宮を進んでいく。

１１階に降りるための魔法陣が地面に描かれていた。

なんか、今までの魔法陣と違って緑色に光ってるけど、これ以外に魔法陣は見つからなかったし、これがそうだろう。

『１０階に到達しました、記録しますか？　はい／いいえ』

なにこれ？

セーブ機能？

なんでこんなもんがあるんだ？

とりあえず、『はい』を選ぶ。

『記録完了です。　地上へ戻りますか？　はい／いいえ』

どうする？

というか、どうなってるんだ？

記録機能に地上への帰還機能、迷宮の魔法陣は化け物か！って、赤い人がいいそうだ。

とりあえず帰る？

でも、なんにも迷宮の異変についてはわかってないしなぁ……

いつまでって期限も決められてないし、今日はとりあえず帰るか？

う～ん……

「どうする、スクルド」

「キュイ？」

突然聞かれたスクルドは首をかしげている。

いや、答えてくれよ。

しょうがない、まだ時間も早いしこのまま続けよう。

『いいえ』を選択し、俺とスクルドを緑色の光が包み込む。

そして、俺とスクルドの姿は１０階から消えた。

１４話　迷宮挑戦は命知らずの証でした（後書き）

迷宮に入ったのにバトルがない。

バトルがないのに迷宮に入ってしまった。

そして、まともにレナが登場していない。

ちなみに、迷宮管理人のおっさんは、武器屋のおっさんではありません。

双子の弟さんです。（ちなみに、主人公が呼ぶとどちらも「おっさん」）

１５話　魔物は白黒でした

（略）

「何も変わらないな」

１１階に到着した俺は、ため息をつきながらそう漏らした。

１０階の移動紋章（仮）が他の階と違う色をしていたし、１１階からは今までと違うんじゃないかって予想していた俺の期待は、幸か不幸か裏切られていた。

一通り１１階を回り終えた俺の前では、移動紋章が青い輝きを放っている。

スクルドもあまりに退屈なのか、俺の肩の上であくびをしている。

「１２階こそは……」

淡い期待を胸に俺は移動紋章の上に乗った。

現在２３階でございます。

案の定なにもありません。トラップすらありません。宝なんてもってのほか。

２０階の移動紋章が緑の輝きを放ち、１０階と同じ記録機能があったので、どうやらセーブは１０階ごとにできるらしいことがわかった。

なにもない。

１７階を過ぎたあたりでスクルドは寝の体勢に入ってしまいました。さっきから声をかけても何の返事もしてくれません。

というか、眠ってるのによく落ちないなこいつ……

今日何度目かわからないため息をついて俺は移動紋章に乗った。

たららたったら～！　ガイは３０階に到着した。

ヘイブラザー、今日も平和だな。

ダメだ。話し相手が居なくてさびしすぎる。

意味の分かんないことを頭の中で考えて寂しさを紛らわせているけど、そろそろ限界だ。

「なぁスクルド。そろそろ起きてくれよ」

返事はない。

マジで泣きたい。

こっから下は中階層だ。モンスターの危険度は上がるし、俺一人で無事に探索ができるのか？

ここまでと同じでモンスターが全くいないって可能性も否定はできないけど、モンスターがいた場合はシャレにならない。

奇しくも記録機能付き移動魔法陣があるはずの３０階だ。

とりあえず今日のところは退散して、お城に報告。

できたら、騎士の何人かをお供に着けてもらえるように交渉して明日出直した方がいいんじゃないだろうか。

そうしよう。

このままだと退屈すぎるのとさびしすぎるので発狂しそうだ。

「キュ」

「ん？　スクルド、起きたのか？」

ピクリと耳を動かしたかと思うとスクルドが俺の肩から飛び降りた。

帰ろうって決めた矢先に起きるなんてこの相棒は俺が嫌いなのか？

「ん？　どうしたんだ、スクルド」

スクルドは毛を逆立てて次の曲がり角を睨みつける、というか、威嚇している。

今までにない反応だ。

もしかしたら、この先にモンスターがいるのか？

ようやく、冒険者らしいことができるのか。と、俺は胸をなでおろしていた。

そう、曲がり角を曲がるまでは。

「ＧＹＵＡＡＡＡＡＡ！！！！！」

……なにこいつ？

曲がり角を曲がってほんの数歩歩いた先はドーム状の大部屋だった。

扉はなく、出入り口だけがぽつんとある大部屋。

そこで俺たちを待ち受けていたのは、巨大な……熊？　いや、パンダか？

全体的に白い色合いで、ところどころが黒い。

見た目はパンダ。ただサイズは規格外。

かなりの広さの部屋で、ビックパンダ（仮）とは結構な距離が開いているけど、どう考えても俺が知っているパンダのサイズじゃない。

目測で４メートル以上ありそうだ。

腕は俺の胴回りぐらいの太さがあり、正直エントランスにいたおっさんなんかよりもはるかに威圧感がある。

「おいおい、マジかよ……」

俺は慌てて剣を抜くと、両手で柄を握って構えた。

すいません、モンスター舐めてました。

っていうか、ここまで何もなかったから油断してたんだろう。

ビックパンダは信じらない速さで俺の目の前まで近づいたかと思

うと問答無用でその腕を、俺にたたきつけた。

偶然構えていた剣で受けていなかったら即死してただろう。

剣で受けたのが幸いしたのは確かだが、俺は3メートルはふっとばされた。

攻撃力高すぎません？

剣は折れてないけど、防具に若干亀裂が走ってる。左手の手甲なんかは一部が完全に欠落して、腕が露出している。

「っちょ！？」

俺が起き上がるよりも早く、ビックパンダは追撃をかけてくる。

即座に後ろに跳んでなかったら、これまた即死してたっぽい。

だって地面がえぐれてるんですもの。

「ＧＹＵＡＡＡＡ！！！！！」

それがパンダの鳴き声なのか！？　って突っ込みたい。

でも、たぶん理解してもらえない。

追撃を躱されたからか、ビックパンダはさらなる追撃を仕掛けてこなかった。

じっとこちらを見つめている。

たぶん、すきを見せた瞬間には襲い掛かってくるだろう。

油断なんて絶対できないし……

「キュイ！」

ビックパンダに完全に無視されていたスクルドが後ろから襲い掛かった。

が、サイズが違いすぎるからか、ビックパンダはびくともしていない。

こんなサイズが違う相手に向かっていくなんて自殺行為だぞスクルド。

ん？　待てよ。

そうだ、スクルドはあのボス猪だって倒せたんだ。このパンダを倒せないって道理はない。

あの時の突撃を喰らわせてやれば、こいつだって倒せるかも。

「スクルド、前に猪を倒した突撃は使えないのか？」

剣を構え、パンダに隙を見せないようにしながら叫んだ。

「キュイ」

ちょっと遠くてわかりづらいけど、首を横にふったっぽい。

ダメなの？　なんで？

なんか条件でもあるのか？

仕方ない。三十六計なんとやら、とりあえず逃げるしかないな。

自分で戦おうとしない小心者だと笑わば笑え、怪我はしたくないんだ。

と、言うわけで、じりじりと移動し、足の先で小石を蹴飛ばしてパンダの注意を俺から逸らすと同時に俺はスクルドを拾い上げて元来た通路へと走った。

っふ、完璧だ。

「キュイ！」

「ん、どうした？」

不意に腕の中のスクルドが鳴いたので足を止めることなく後方を確認する。

「ＧＹＵＡＡＡＡ！！！！」

……ナンデツイテキテルノ？

ちょ、おま……早い、早いよ。

なんかの本で読んだ覚えがある。熊は時速６０キロで走るって……パンダはどうなんだ？

うん、どんどん距離を詰められてるみたいだけど、パンダも例外じゃないのか？

つか、やばいって……

「ぬがぁあぁらぁおえあぇあぁあらぁぁんぎゃぁぁぁああ」

自分でも意味不明の奇声だと思う。

でもなんか知らないけど、気づいたら口から洩れていた。

曲がり角を曲がって、全力疾走。追い付かれそうになってまた曲

がる。そして全力疾走。

パンダは体がでかいせいで、そんなに広くない迷宮の通路内では、あんまり激しく動けないっぽい。

これなら逃げ切れそうだ。

で、問題はどこへ逃げるかだな。

迷宮から脱出するには専用のポイント、たぶん１０階ごとにある緑色の魔法陣に到達するか、１０万Ｂはするアイテムを使うかだ。

当然のことながら、俺がそんなレアアイテムを持ってるはずがない。

幸いなことにここは３０階だから、緑の魔法陣が存在する。つまりは、そこに到達すれば価値なわけなんだけど……

２９階の魔法陣で飛ばされた３０階の入り口（？）から、さっきの大部屋までは一本道だったんだ。

そう、緑色の魔法陣に到達するにはさっきのパンダの向こうに行かなくちゃいけない。

やばい、死亡フラグたったかも……

そうだ、こんなときこそ、おっさんにもらったブレスレッドが活躍するときだ。

今こそ、時は来た。俺は喜び勇んで救援要請ボタンを押した。

『ガイは救援要請ボタンを押した。しかし何も起こらなかった』

なぜに？

押すのが弱かったのか？

『ガイは救援要請ボタンを押した。しかし何も起こらなかった』

どういうことだ。

っくそ、もう一度。

『ガイは救援要請ボタンを押した。ブレスレットが壊れた』

な、なんだと……

俺の手の中には真っ二つになったブレスレッドだったもの。

まさか、さっきのパンダの攻撃で壊れたって言うのか？

……おっさん、すまない。あんたの好意は何の役にも立たなかったよ。

やばいな。どうしよう。

こうなったら、戦うって選択肢が有力候補。ただし、俺の死亡率高め。

第二候補、死んだふり作戦。ただし、マジで殺される可能性高め。

知ってるか？　熊は動物の死骸も食べるんだぜ。

第三候補、もう諦めて死ぬのを待つ。ただし、俺は死亡する。意味ないな……

第四候補、なんとか隙を見つけてパンダの向こう側へ抜ける。ただし、パンダに圧殺される可能性高め。体デカすぎて、隙探す以前に隙間を探さなきゃいけない。これも現実的じゃないな。

やっぱ戦うしかないんだろうな……

「キュイ！」

「ん、どうした？」

スクルドが俺の向かってる先に向かって鳴いた。

後ろからパンダが迫ってくる様子もないので足を止めて様子をうかがう。と、そいつは姿を現した。

パンダ。

なぜ？　なぜあいつが俺の前にいる。

いつの間に抜かれた？

いや、どこか抜け道でもあるのか？

しかし、これはチャンスだ。

俺の進行方向にあいつがいるってことは、後ろには誰もいない。

つまりは緑の魔法陣まで直行できるってことだ。

「よっしゃ！」

俺は思いつくや否や踵を返して走り出した。

そして、少し進んだところで再び足を止める。

なぜかって？

やつがいたからさ。

そう、なぜかやつらは前後にいる。

やつらは２匹いる。

「「ＧＹＵＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！！！！」」

前後にいるパンダが咆哮した。

誰か助けてくれよ……

――――side　out

ガイが迷宮探索に乗り出している頃、セリルは城での政務に忙殺されていた。

モンスターの出現報告があれば、討伐指示をだし、街からの陳情があれば検討し、指示を出していた。

街道や近隣の森にあふれているモンスターの数は尋常ではない。

本来であれば、三井と他数名の騎士たちを迷宮探索に向かわせる予定だったが、それすらも溢れ出てきているモンスターたちの討伐に当てなくてはならないほどに事態は切迫していた。

モンスターの異常発生の理由は間違いなく迷宮が原因だ。それを調査しないと言う選択肢はありえない。

しかし、調査するだけの余裕はない。

冒険者ギルドに依頼を出そうにも、ギルド側もモンスターの討伐で手いっぱいのため、高ランクの冒険者はほとんど迷宮にかまっている余裕がない。

バルデンフェルトにしろギルドにしろ、増援を要請しているが、到着するまではまだそれなりの日数を必要としている。

が、それを待っている余裕はない。

なぜなら、最初に地上で危険度の高いモンスターが発見されてからというもの、同様の事態が加速度的に増加しているのだ。

増援が到着するころには、増援もモンスターの討伐に当てなくてはならないほどにモンスターが増えることすらもあり得ない話ではない。

そもそも、増援が到着するまでに街が滅ぼされる可能性すらあるのだ。

「やつは、役に立つのだろうか……」

バルデンフェルトの元騎士を倒した駆け出し冒険者、獅子王　ガイ。

セリルは彼のことをよく覚えていた。

かつてはこの城を王城としていた国を滅ぼした勇者。この国に存在するはずのない人間。

まったくもって興味深い人材であるのは確かだった。

いくら腐ってようと厳しい試験を乗り越えて騎士となった男を倒したのだから、実力がないわけではない。

しかし、どうやら彼はなかなかに変わった人間だ。

大国バルデンフェルト、その専属勇者となる機会を得てもそれを

断る人間など普通はいない。

リンガ地方と呼ばれる大陸の南西で最大の領土を誇り、圧倒的な武力を持ち、ほとんどの民が不満を抱かないだけの政治を行えるだけの資金と政治力。それらをすべて持ち合わせている国などリンガ地方にはバルデンフェルトを除いてありはしない。

そんなバルデンフェルトの専属勇者となれば、富も名声も一介の勇者、冒険者とは思えないだけのものを得ることができる。

冒険者であれば、誰もかれもが喉から手が出るほどにその機会を欲するはずだが、それを彼は断った。

この世界に来てから日が浅いからバルデンフェルトの強大さを理解していないのか、とも考えられる。が、三井から彼のことを聞いていた限りでは、その程度のことがわからないほどの馬鹿ではないらしい。

だが、彼は断った。

なにか理由があるかもしれない。そうは思うが、納得はしかねる。

なぜなら、バルデンフェルトでも武・魅・政でそれぞれ名高い三姫の一人、セルフィール・シェスト・アナ・バルデンフェルトが直々に声をかけたと言うのに、それを面と向かって断るような人間などよほどの馬鹿か大人だけだからだ。

少なくとも、事前に自分がどのような人間なのか彼に吹き込むように三井に命じておいた。

曰く、目的のために手段は択ばない。

曰く、今までに達せることのできなかった目的はない。

曰く、彼女の邪魔をすれば下手をすれば命はない。

後は三井なりに工夫して、セリルの言葉に肯定的な返事を返すように誘導していたはずだ。

しかし、彼は断ったのだ。

セリルが知ることのないことではあるが、騎士の勧誘を断った際に、ガイはその話を完全に忘れていた。

だからこそ簡単に断った。

そして、それほどに求められていることを知らなかった。

事実、セリルは彼を求める理由を誰にも話していないのだから、それを彼が知る由もない。

だが、そうとは知らない、そして気づいていないセリルは、ガイが馬鹿なのか大人なのかと、心を乱されていた。

「ふん、たかだか一介の冒険者の分際で私の心を乱すとはな」

セリルは叩きつけるように判子を書類にたたきつけると新たな書類を手に取った。

わずか3秒ほどで書類に目を通し終えたセリルが、再び判子を振り下ろそうとした矢先、何者かが扉をたたいた。

「入れ」

「失礼します、姫様」

セリルに促されて彼女の執務室の戸を開いたのは、バルデンフェルトの騎士にして専属勇者の三井　純であった。

「どうした？」

「はい、新たな魔物が発見されました」

「なに？　どうせ、また中階層の魔物だろう。それらの対応はお前に任せたはずだ」

「はい。ですが、新たな魔物はギガースパンダです」

「ギガースパンダだと！？」

語感だけ見ればなかなかに滑稽だが、セリルは動物園で人気がありそうな名前を驚きに満ちた表情で言った。

「なぜだ……なぜあんな化け物が、地上に出ている」

「わかりません。わたしも下階層の魔物が地上に現れた話など聞いたことがありませんので」

三井の言うとおり、ギガースパンダとは本来ならば下階層に出現する魔物だ。

属性を持った熊のモンスターであれば地上でもその姿が確認されているし、中階層だけでなく稀ではあるが上階層にも出現することがある。

しかし、光と闇の属性を持ったギガースパンダが上階層すら通り越して地上に出ているなどと言う話は前代未聞であった。

「幸いにも確認されているのは1体だけですので、私が対応させていただきます。しかし、下階層の魔物が地上に出るのが今回だけとは限りませんので、報告に馳せ参じた次第です」

「そうか、ご苦労。だが、仮に複数の魔物が……いや、今それを問うても意味はないな。わかった、今後の対策は私の方でも考えておく。お前は、とり急ぎギガースパンダを倒してこい」

「っは！」

バッと胸に握り拳を置いてバルデンフェルト騎士流の敬礼をすると、三井は執務室を後にした。

執務室に残されたセリルは、先ほど目を通し終えた書類を手に握ったまま思考を巡らせる。

下階層の魔物を単独で倒せるのはSランク冒険者だった三井以外には今この街にはいない。

多人数でかかれば、いくらかの被害を出しつつも倒すことは可能だが、こちらの被害は拡大するし、他の場所に出現した魔物を放置することはできない。

今もほぼぎりぎりの状態で対処していると言うのに、ここにきて下階層の魔物が地上に現れるというのは完全に予想外だ。

もはや、近隣の村や森が魔物に蹂躙されるのは時間の問題になっている。

「……あの男が、うまくやってくれれば……いや、単なる冒険者に過度な期待はできないな」

セリルはため息を一つつくと、執務机に置いた書類に判子を押した。

１５話　魔物は白黒でした（後書き）

名前はジャイアントパンダにしようかと思っていたのですが、まんま普通のパンダの名前になるので却下。
ギリシャ神話で巨人を表す、ギガースにしたんですけど、かなりミスマッチですね。

次回は、第１次迷宮探索終了する……かもしれません。

１６話　迷宮は不思議でいっぱいでした

（略）

ピンチだった。

この上なくピンチだった。

逃げ場の全くない一本の道の真ん中に立つ俺の前にはパンダ。後ろにもパンダ。

前門の狼、後門の虎……と見せかけて、後門にも狼がいた。

パンダは嫌いじゃないさ。

動物園の人気者、笹を食べてる姿がキュート。

だけど、俺の進路と退路を塞いでいるパンダは、全長４メートル以上、推定体重５００キロ超の文字通りのモンスターなんだ。

可愛いって言いながら抱き着こうものなら、そのまま絞殺されるか、丸太みたいな腕でぶんなぐられると思う。

一撃喰らった感想としては、この前戦ったボス猪と同程度のモンスターだと思う。少なくともあれより弱くはない。

で、俺がそれに勝てるのかって疑問。

ボス猪は絶体絶命のところでスクルドに助けられたが、そのスク

ルドも俺を助けた時と同じ戦い方はできないと言う。

勝てる要素が見当たらない。

それにしても、あの後ろにいるパンダはどうやって現れたんだ？

湧き出てきたのかもしれないが、魔物が湧き出るのは専用の部屋があるらしく、そこから以外は突然現れる可能性はないはず。

俺が通ったこの階の道には個室など存在しなかったので、湧き出てきたってことはないはずだ。

だとしたら、どうやって？

「……もしかして、人間だけじゃなくてあの移動紋章はモンスターも転移するのか？」

だとしたら、上の階で見落としていたあのパンダがこの階に現れた理由も納得できる。

だけどそれなら、上の階にいる間に遭遇しておきたかった。

なんで2体も同時に相手しなきゃいけないんだ……

動きを止めている俺に対して、前後のパンダたちはそれぞれがじりじりと距離を詰めてきている。

もしもこいつらが俺と言うたった1人の獲物を2体で奪い合って

くれれば、その隙に逃げ出すことができるかもしれない。

だけど、まぁたぶん巻き込まれるだろう。

なにせあのデカさだ。

通路の幅と高さぎりぎりの大きさの2体が同時に暴れる中心から、怪我一つなく抜け出すなんて芸当が俺にできるわけがない。

だったらどうするか。

スクルドと同時に前にいるパンダを狙って攻撃する。だけど、そうすると背中を向けて走り出すと同時に後ろのパンダが突っ込んでくるだろう。

ならば2体を俺とスクルドそれぞれが1体ずつ相手取るか？

1対1で勝てる自信がまったくない。

毎回毎回いつも思うし、その結論に達するが、打つ手がない、勝ち目がない、生き残る手段がない。

さて、どうしよう。

いつものパターンなら、ここで誰かしら救世主が現れて助けてくれるはずだ。

だけどその救世主は？

ボス猪の時は、事前にスクルドと会って、干し肉をやるっていう

フラグを立てていた。今回はどうだろう。

おっさん？　いや、ブレスレットが壊れてるから、おっさんが今の俺の窮地を知るすべがない。

５階にあった冒険者パーティ？　いや、あの人たちはすでに死んでいる。

ゾンビになって助けに来てくれるかもなんて、考えたくもない。怖いし。

というか、あの人たちはこのパンダに襲われたのか？

いや、今そんなことを考えていたってしょうがない。

とりあえずはフラグはこんなもんだろう。つまり……

助けてくれる救世主が現れる可能性は皆無。

あぁ……どうしよう。

前後のパンダとの距離はそれぞれ１０メートルほど。一足飛びに距離を詰められたら一瞬で勝負がつきそうだ。

偶然にも前後のパンダはそれぞれお互いを牽制して足を止めたので、まだなんとか考える時間はある。

「なぁ、スクルド。やっぱりこの前の猪を倒したときみたいに一撃であのパンダを倒したりはできないんだよな？」

「キュ」

コクリと頷くスクルド。

俺はその場にがっくりと膝をつきたい気持ちになった。

俺くらいの人間の大きさであれば、速さと小さいながらも獣としての攻撃力で足止めなどはけっこうできると思う。

が、今回の相手はサイズが違いすぎる。

それに対してスクルドはどこまで行っても小動物としてのサイズを越えない。その分体重も軽いので、一撃の威力は期待ができない。

さっきもそうだったけど、あのパンダにとってはスクルドの攻撃なんて蚊に刺されたようなもんだろう。

「ったく。どうすりゃいいんだ」

次の瞬間、俺は不用意に大きな声を出したことを激しく後悔した。

俺の声に反応した2体のパンダが襲い掛かってきたからだ。

前後から同時に襲い掛かる巨大パンダ。

俺は慌てて前にいたパンダの下をくぐろうとしたが、ほとんど隙

間がない。

パンダと壁に挟まれて圧死。そうじゃなければ、パンダとパンダに挟まれて圧死。

どっちにしろすごく嫌だ。

「どちくしょー、こうなったら自棄だ」

俺は剣を抜き放つと、前方から迫りくるパンダに切っ先を向けた。

四足歩行で突撃してくるパンダ。その後ろから突っ込んでくる奴にあえて突き飛ばされ、正面にいるパンダの脳天に剣を突き立てる。

下手をすれば、背骨が折れるかもしれないし、突撃じゃなくて腕でぶん殴られるかもしれない。

勝算は高くないが、俺の思いつく限りではこれが一番それっぽい作戦だ。

案の定、後ろからパンダが俺の背中に頭突きをしてきた。

吹っ飛ばされつつも、切っ先はまっすぐと正面から迫っていたパンダへ向ける。

ザシュッ、ズババ、バターン。ってなればよかった。それが理想だった。

剣は正面のパンダの肩口に突き刺さった。が、それだけだった。

剣がつっかえ棒になってくれたおかげで、正面から来ていたパンダの頭突きを喰らうことはなかったけど、やばい。

時速６０キロ同士の正面衝突。そのど真ん中にいたんだ。

肩と手首の骨が外れたくさい。

剣から何とか手を放すと、両手が力なく垂れ下がり、動かそうにも動いてくれない。

詰んだ。

未熟とは言え剣士の俺が剣を振るえないのだ。蹴り技なんてローキックぐらいしか使えないし、攻撃手段がほとんどない。

剣を突き刺されて怒り狂ったパンダの一撃が俺に迫る。

眼前につきつけられた死神の鎌が大きく振り上げられ、俺に振り下ろされようとしている感じだな。

恐怖に目をつむり、最後の時を待とうとする俺の耳に聞こえたのは、なぜだか知らないがパンダの悲鳴のような方向だった。

「ＧＹＵＲＡＡＡ！」

驚きつつ目を開くと、いつの間にやら剣に取りついていたスクル

ドが白っぽい光を放っている。

悲鳴を上げてのた打ち回るパンダに気を引かれていると、今度は後ろにいたパンダが腕を振り上げ俺へ襲い掛かろうとしていた。

慌てて前かがみになって距離を空け、ぎりぎりとのところでパンダの攻撃を回避する。

迷宮全体が震えているんじゃないかと思わせる震動、どうやらスクルドが取りついていたパンダが倒れたようだ。

倒れたまま、ピクリピクリと痙攣するパンダをしり目に、スクルドが俺の肩へ戻ってくる。

「お前、なにしたんだよ」

「キュイ」

元より俺の問いかけに答えられないスクルドに質問をしたところで意味なんてないんだろうが、それでも俺は問いかけていた。

ついでに言うなら、肩に乗るのはやめてほしい。

ものすごく痛い。

ライバルがいなくなって獲物を独り占めできることが分かったのか、後ろにいたパンダの攻撃は苛烈を極めた。

腕を振るい、かみつこうともする。

後ろ歩きのような形で、バックステップや屈んだりしてなんとかパンダの攻撃を避け続ける。

なんだか、俺は回避能力だけ異様に高い気がする。

幸いにも移動魔法陣の方向をふさいでいたパンダが倒れた今、隙を見て逃げ出せばなんとか振り切れるかもしれない。

パンダの攻撃が止まった瞬間、一も二もなく逃げ出した。

相変わらずパンダの肩にバスタードが刺さったままだったが、両腕が使えない状態で回収することも出来ない。

腕が垂れ下がった状態で走るのは、なんとも走りにくく、外れた肩が動くたびに痛んだけど、死ぬよりははるかにマシだ。

パンダとの距離はおよそで１０メートル。

曲がり角を曲がるとその距離がわずかに開き、直線になると距離が詰まる。

時折パンダの射程に入ったのか、パンダの腕が俺の背中をかすめたりしたけど、ぎりぎりのところで回避してなんとか距離を開く。

初めにパンダと出会った広い部屋を通り、出口からわずかに進んだ先に光っていた移動魔法陣を見つけると、俺は兎にも角にも飛び込んだ。

「記録する、地上へ戻る！」

俺が早口でまくしたてると、光が俺とスクルドを包み込む。

俺たちの姿が消えるのと、パンダの一撃が俺たちのいた場所を通過したのはほとんど同時だった。

気が付いた時には、俺は迷宮に入って最初の部屋、エントランスに戻ってきていた。

相変わらず何人かの冒険者たちがその場で会話をしている。

「おぉ、坊主。なんとか無事に戻ってきたみたいだな」

「おかげさまで」

「おいおい。大丈夫か？　って、その腕どうしたんだよ」

「まぁちょっと巨大なパンダに襲われましてね」

「パンダ？　まぁいい。とにかく、ちょっと見せてみろ」

俺が戻ってきてすぐに気のいいおっさんが話しかけてきて、俺の腕の状態を見てくれた。

「あぁ。こりゃ完全に外れてるな。まぁ、こんだけきれいに外れてるんなら、すぐ治るさ」

おっさんはそう言って、俺の腕をはめてくれた。

「っつぅ……ありがとうございます。でも、脱臼なんて素人が治したらまずいんじゃないですか？」

「ん？　何いってるんだ。冒険者なら、この程度治療できて当たり前だろ。まぁ、街に戻ったら治療所で回復魔法かけてもらえば、すぐに動かせるさ」

そう言えば、この世界には魔法があるんだな。

それなら、とりあえず素人が治療しても後は回復魔法でって、やり方ができるのか。

まぁ脱臼とかってのはあんまり経験がないから、地球だとどんな風に治療するのかとかよく知らないけど、こんなもんなのか？

「にしても、パンダってのは、もしかしてギガースパンダのことか？」

「ギガース？」

「あぁ。大きさはだいたい５メートル前後で、白黒の模様の熊種だ」

「あぁ、たぶんそれですね」

「おいおい、お前。ありゃぁ、下階層のモンスターだぜ？　何階まで潜ったんだよ」

「えぇ！？　あれって、下階層のモンスターなんですか？　一応、３０階までは行ったんですけど」

「っな！？　３０階だって！　お前、レベル５のくせにフロアボス倒したのか？」

「フロアボス？」

「あぁ、５階降りるごとに、ボスがいただろ？」

「いや、そんなんいなかったけど」

「はぁ！？」

「ぜんぜんモンスターがいなかったんですよ。３０階までモンスターはまったく見つかんなくて、初めて出てきたのがパンダだったっていう」

「そりゃ、ほんとにパンダだったのか？　別の熊種のモンスターとか……」

「どう見てもあれはパンダですって。なぁ、スクルド？」

「キュイ」

スクルドだって肯定してくれる。あれは間違いなくパンダだった。

「フロアボスもいなくて、３０階でギガースパンダ。そもそもモンスターがぜんぜんいないだと……どうなってるんだ？」

「もしかして、最近の迷宮で起こってる異変ってこのことなんじゃないですかね？」

「いや、そんなはずねぇ。俺の知る迷宮でのおかしなことってのは魔物の異常発生だ。どうやら、下階層のモンスターが増えてるみたいで、中階層の魔物が上階層にまで押し寄せてきてるんだよ」

「へ？」

そりゃおかしいだろ。

だって、３０階までモンスターは影も形もなかったんだ。

なのに、異常発生だって？

「まったくもっておかしなことばっかりだ」

「そうですね」

「それにしても、ギガースパンダにあったって言うのに救援要請もしないなんて、大丈夫だったのか？」

「いやぁ、すぐに助けを呼ぼうとしたんですけど、最初にパンダから一発貰っちゃいましてね。壊れちゃったんですよ」

そう言って半分になったブレスレットをおっさんに見せた。

どうやら、逃げてる途中でもう半分は落としてしまったようで、どこにも見当たらなかった。

「あっちゃー……こりゃすげぇ。こいつは簡単に壊れないようにできてるんだがねぇ。それこそ、下階層のモンスターの一撃くらいなら耐えられる設計なんだが……」

「そうなんすか？　でも、簡単に壊れ……いや、簡単だったかなぁ」

「まぁ、なんにしても壊れちまったもんは仕方ねぇよ。モンスターの攻撃で壊れたってんなら、経費で落ちるしな」

止めを刺したのは、俺がボタンを押したせいなんだけど、それは黙ってた方がいいな。

弁償しろって言われても、金ないし。

「とにかく、詳しく調べる必要があるな。坊主はどうするんだ？」
「とりあえず、街に戻って腕の治療をしますよ。今日はもうおしまい」
「まぁ、それが妥当だな。一応、今回のことを上の方に報告もしなくちゃならんから名前を教えてもらえるか？」
「あぁ……う～ん……が、ガイです」
「ガイ、ね。了解。今回のことでお前にいろいろと聞くかもしれんから、念のために明日はギルドにも来てくれ」
「はい」

どうやら、おっさんはシシオーの下の名前は聞いてなかったようだ。

微妙に複雑な気分になりながら、俺は迷宮を後にした。

姫さんに報告もしなくちゃならんし、なんだか面倒なことになったのかな？

17話　お願いは失敗でした

（略）

迷宮を探索した翌日、俺は城へとやってきた。

昨日は両肩および両手首の脱臼っていうかなり重症じゃないのこれ？　ってぐらいの怪我をしていたわけだが、この世界のすごさってのを改めて思い知らされた。

迷宮管理人のおっさんがやっつけで応急処置したそのままの状態で、街にあるギルド付属の診療所に行き、回復魔法をかけたらあら不思議。

まったく痛みもないし、違和感もない。

なんでも、骨が外れた場合ならはめてから魔法をかけないとダメらしい。

魔法で何から何まで治すってわけにはいかないようだ。

とまぁ、そんなどうでもいい話は置いておいて、俺はお姫様に昨日の結果を報告するために城に来たわけだ。

さすがに直でお姫様に報告するわけじゃないだろうけど、やっぱり城にくるのは緊張する。

できれば三井さんあたりが担当してくれれば、あんまり緊張もしないで済むんだけどそんな都合よくは進まないよな。

「こちらへどうぞ」

門番に話をしてすぐに、身なりのいい男が現れてそう言った。

なんか見たことのない人だけど、こんな人もいたんだな。

軽く門番に会釈をしてから、男に続いて門をくぐる。

あぁっと……どう説明するかなぁ……

で、やってまいりました謁見の間でございます。

おかしいなぁ。俺の中では、適当な部屋であんまり話したこともない騎士さんかなんかに話をするのが決定事項だったんだけど……

っていうか、お姫様はそんなに頻繁に俺みたいな一介の冒険者と話すほど暇なのか？

そんなことを考えながら跪いていると、騎士の一人が声を張り上げてお姫様が入室することを告げた。

俺は一層頭を低くして、お姫様に声をかけられるのを待つ。

「早速だが、迷宮はどうなっていた？」

何の前置きもなしに姫様は言った。

あの、さっそくすぎませんか？

もうちょっと、こう前置き的なことを言ってほしい。

面を上げよとか、そんなことでいいからさ。

「あぁ、っと……依頼された迷宮探索を昨日行ってきました。回数やどのようなことを調べ上げるまでという達成条件を厳密にお知らせいただいていませんでしたので、とりあえずですが、経過報告に参った次第です」

敬語とかそれ系の言葉は苦手だ。

相手はただでさえ恐ろしいお姫様だから、変なことを言って斬首になったりしたら目も当てられない。

なんとかつっかえたりしないで言うことが出来たけど、言葉遣いは間違ってたりしてないよな？

「そう言えば、そうだな。うむ。賢明な判断だ。して、昨日の結果を聞こう」

「はい。迷宮に潜る際に確認したところ、迷宮には魔物があふれかえっていると聞いていたのですが、私が実際に潜ったところ、まったく違う結果となりました」

「全く違う結果？」

「はい。昨日はひとまず３０階まで潜ってみましたが、そこに到達するまで遭遇したモンスターはおらず、３０階にてようやく初めてのモンスターがいました」

姫様に促されて言った俺の言葉に、周りに控えていた騎士たちがざわめいた。

騎士の皆さんはたぶん、迷宮管理人のおっさんが言っていたように、モンスターが異常発生していると思っていたんだろう。

だから、「なに」だとか「馬鹿な」みたいなことを言っているけど、俺が実際にそうだったという事実を話してるんだから、仕方のないことだと思ってほしい。

「静まれ。して、３０階にて魔物を見つけたのだな？」

「はい。私はモンスターについて詳しくないのですが、よく知る人間に、私が遭遇したモンスターの特徴を話したところ、ギガースパンダではないかとの結論に達しました」

「ギガースパンダだと？」

もっと取り乱すかと思ったけど、お姫様はいたって平静なままだった。

逆に周りの騎士たちは面白いぐらいに驚愕している。

ただ一人、三井さんだけが神妙な面持ちで佇んでいるけど、どうしたんだろう。

「はい。ご存じのとおり私はGランクの冒険者です。さすがにギガースパンダと戦って無事に済むはずもなく、両肩が外れるなどの怪我を負って命からがら逃げ帰ってきました」

「ふむぅ……」

「迷宮を管理している人間に尋ねたところ、迷宮ではモンスターが異常発生しているとの話を聞きました。しかし、実際に私が潜ったところ、モンスターはまったくいなかった。そこがはなはだ疑問に思われるところです。ひとまず、その迷宮を管理している人間にも事情を話したので、ギルドでも調査をする方向になると思われます」

昨日の時点で、おっさんがギルドに報告するから、明日……つまりは今日にギルドへ行くように言っていたから、現状ではどうなっているか分からないけど、話は通っているはずだ。

「つまり、お前の調査の結果は他の冒険者たちとは違うものという

わけだな」

「はい」

「しかし、なぜそのようなことになった？」

知らんよ。

いや、迷宮の探索自体昨日が初めてのことだったし、本来はどんなもんだか知らない。

それをいきなり、なぜ？　とか聞かれてもわかるわけないじゃないか。

「それは、今のところ私には――」

「姫様、そのような男の話を聞く必要はございません！」

「――わかりません。……ん？」

なんだ、突然話に割って入りやがって。

「貴様のような男が、迷宮探索？　それも３０階まで潜るなど信じられるものか。どうせ、適当なことを言って報酬だけを受け取ろうと言う心積もりだろう！」

言いながら、控えている騎士の列から一歩前に進み出たのは、いかにも純粋培養されたようなエリート風の騎士だった。

無駄に長い前髪は顔の左半分を覆い隠し、実用性に欠けるほど磨き上げられた鎧は他の騎士たちのものに比べて、無駄に華美な印象を受ける。

こいつは、あれだ。鬼〇郎か？

顔の半分を隠してるし、頭頂部の髪の毛を一本逆立てて、「父さん妖気が」とか、言わせたらまんまそうだと思う。

いや、あれは茶髪と言うか、黒系の髪で、こっちの鬼〇郎は金髪だ。

これじゃあ、鬼〇郎じゃなくて、金〇郎だな。……あれ、日本昔話のキャラクターみたいになってる……

「冒険者とは言え、所詮はGランクの小者。ギガースパンダを前にして無事に逃げおおせるはずがない。それらしい話をして謀ろうとしたところで、その話に信憑性などまるでないわ！」

いや、確かにその通りと言えばその通りだ。

下階層に出現するはずのギガースパンダをたった一人の冒険者、それもGランクの新米が相手にして無事で済むなんて普通はない。

まぁ、俺が言っていることは事実だから例外にしても、この金鬼〇郎の言っていることにはある程度同意できる。

「自分でも嘘のような話ですが、この話は事実です。証拠を見せろと言われても、物的なものは何も持ち帰っていないので、申し訳ないですが不可能ですが」

一応、迷宮の方に冒険の記録があるけど、あれは持って帰れるようなものじゃない。

……ん？

というか、あれはどうやって記録されてるんだ？

もしかして、ギルドカードに記録されてるならそれを見せれば証拠になるかもしれない。

俺は小声で、オープンと言ってギルドカードの情報を表示すると、手早く内容に目を通す。

生憎と迷宮関連の項目もそれらしい表示もなかったので、ギルドカードに記録されてるってわけでもなさそうだ。

「貴様、何をやっている！　姫様の前で失礼だろう！　だから私はこのような下賤の者に誇りあるバルデンフェルトが仕事を依頼するなどと――」

「黙れ」

「――いうのは嫌……だった……の……だ……姫様？」

俺をぐちぐちと罵ろうとしていた金鬼〇郎の言葉をさえぎって、姫様は有無を言わさぬ口調で言った。

金鬼〇郎の間抜けな顔がなかなかに見ものだ。

「黙れキッタローン。その者を貶める言葉は、つまりその者に依頼を決めた私を、ひいては王族をも貶めるということだ。文句があるのならば私に直接言えばいい！」

「いえ、姫様。姫様の決断に異論があるはずなどありません。ただ、私はこの者の言う虚偽にまみれた言葉が――」

「私は黙れと言ったぞ、キッタローン！」

「――申し訳ありません」

……あの、金鬼〇郎はキッタローンと言うのか。

まんまだ。

あいつの両親はきっと、某リモコン下駄を履いた少年妖怪（要するに鬼〇郎）の大ファンなんだろう。

「話の途中ですまんな、現状は詳しくわかっていない。これからさらに調査を進める。と言うことでいいんだな」

「はい」

できることなら、ここまでで終わりにしたいけど。

「っと、そうだ。調査を進めるに当たり姫様にお願いがございます」

「願い？」

「はい。ご存じのとおり私はGランク冒険者で剣の腕も大したことがありません。今回のようにギガースパンダや、下階層のモンスターが現れた際に対処する術がありません。そこで、騎士の何名かを護衛につれていくことができませんか？」

これを言っておかないとな。

ギガースパンダなんて化け物が出るってわかったんだ。姫様だって助けてくれるだろう。

……あの、姫様？

なんでそんなに馬鹿を見るような眼をこちらに向けるんですか？

明らかに相手を見下したような目ではないけど、なにこいつ馬鹿

なこと言ってるんだ？　みたいな顔は辞めていただけませんか？
お美しい顔が、馬鹿に見えますよ？

やばい、口にしたら殺されそうだ。

って、なんか俺変なこと言ったか？

「お主は冒険者だろう。騎士を護衛に着けるよりも仲間を探すなり、己が強くなるなりという選択肢はないのか？」

「……あぁ」

俺は思わず手を打って納得してしまった。

確かに商人やお姫様みたいな偉い人が護衛をつけるのならわかるけど、俺は冒険者だ。

どちらかと言えば護衛する側の人間。

護衛をつけるよりも、仲間を探したり自分のレベルを上げたりするのが常識だ。

でも、仲間を探そうにもレベル５程度の俺とパーティを組んでくれそうな人間はいないだろうし、強くなろうにも迷宮ではほとんどモンスターに遭うことがなかった。

どっちも難しそうだな。

「まぁよい。願いというのはそれだけか？　以前にも話したが、騎士たちは皆、地上にあふれた魔物たちの討伐で手一杯だ。お主の護衛につける余裕はない。しかし、このままでは調査を進めるのが難しいこともわかった。報告は１週間に１度、週の終わりに城へ来るようにしろ。今週の分は今日終えたことにしてよいから、次の報告までは１０日ある」

つまりは、その間にレベルを上げるなり仲間を探すなりして、調査を進めろ、と言うわけですね。

でも週に一度の報告ってことは、ずいぶんと長期的に調査をする方向で考えてるのか？

「はい、わかりました。あと確認しておきたいのですが、報酬はどのようになるのでしょうか？」

長期的になるのはこの際仕方ないにしても、今回は報酬もちゃんと確認しとかなきゃいけない。

前回はご褒美が、俺にとって何の役にも立たない指輪だったし、今回もおんなじようなことになったら目も当てられない。

「どのように、とは？」

「この依頼が達成するまでは、他の依頼を行う余裕が私にはありま

せん。生きていくうえで最低限のお金は必要になります」
「……なるほどな。よいだろう。受けた報告に応じてそれなりの報酬を支払う。今回はそうだな……１０００Ｂと言ったところか」
１０００Ｂか……
ま、十分かな？　いや、でもなぁ……
文句言って下げられたりしたらシャレにならないけど、腕の治療費が３００Ｂ、失くしたバスタードが前見た感じだと９００Ｂぐらい。
完全に赤字ですね。
もう少し何とかしてほしい。
「念のために確認しておきたいのですが、最低額はいかほどで？」
「なに？　……そうだな。価値のない報告であれば０、有益であれば金に糸目はつけん」
「そうですか……ちなみに、今回の報酬は価値的にはどの程度のものなんでしょうか？」
「なんだ、金額に不服でもあるのか？　ふむ。まぁ、原因もわからず対策の立てようもないが、新たなる発見ではあったからな。まったくの無価値でもない、といった程度だ」

つまりは、本来なら0だったってことですね。

そりゃそうか、何もわからないけど、こんなでしたよ。って報告は誰にでもできる。

姫様が依頼したのは、原因の調査とできることなら事態の解決。

調査の方ですら不十分なんだから、文句は言えないな。

「そうですか、わかりました。ありがとうございます」

「うむ。他に何ぞあるか？」

「いえ、大丈夫です」

「そうか。では、次の報告の日に待っておる」

「はい」

お姫様は意外と心優しい？　言葉を残して謁見の間を後にする。

俺はお姫様がいなくなってから、立ち上がると、目の前にさっきの文句を言っていた男、キッタローンが立っていた。

「調子に乗るなよ、薄汚い冒険者風情が」

……なんか、こいつはずいぶんと小者くさいな。

あれだ。主人公に散々文句を言って、不満たらたらなところを悪役に利用されて使い捨てで殺されるようなやつ？

まぁ、俺が主人公かどうかは別にしても、こういうやつを俺は好きになれそうにない。

「調子になんて乗ってませんよ」

「なんだとぉ！」

「はいはい、抑えて抑えて」

激昂して剣の柄に手をかけるキッタローンと俺の間に入ってきたのは、三井さんだった。

ま、三井さんがいるってわかってたからこいつの神経逆撫でるようなことを言ったわけだけど。

……止めてくれてなかったらやばかったな。

次からは気を付けよう。

「彼を選んだのはセリル様だ。その彼を侮辱するのは姫様に忠誠を

立てた騎士としてどうなんだ？」

「……姫様はこの薄汚い冒険者を過大評価しているにすぎん。今日の報告にしても、近所の子供が買い物のついでにできるようなものではなかったか」

近所の子供って……さすがにそれは無理だろ。

「キッタローン。これ以上の暴言はセリル姫殿下直属騎士隊隊長として処罰しなくちゃいけなくなる。抑えろ」

「だが……っく、わかった」

「ありがとう、キッタローン」

キッタローンは柄から手を放すと、俺に背を向けて無言のままに謁見の間から出て行った。

ずいぶん怒ってるみたいだけど、俺にはどうしようもないかな。

「すいません、三井さん。助かりました」

「いや、こっちこそお願いしてる立場だってのに嫌な思いをさせてしまったね」

「いえ、俺が半人前の冒険者だってことは事実なんで」

「ま、誰でも最初は初心者だよ。そうそう、ギガースパンダと戦ったってのは本当？」

「三井さんも疑うんですか？　嘘みたいな話ですけど事実ですよ。まぁ、戦ったって言うよりも命からがら逃げだしたってののほうが正しいですけど」

「ごめんごめん。それにしたって、ついこの間冒険者になったばかりだって言うのに、ギガースパンダに襲われて無事ってのは驚きだよ」

「無傷ってわけじゃないですけどね。両腕の関節が外れちゃったんで、昨日はギルドにある診療所で治癒魔法かけてもらいましたよ。この世界の魔法ってのはほんとすごいですよね」

「そうだね。たしかに俺も初めて目の当たりにしたときは心の底から驚いたよ」

そりゃそうだよな。

完全脱臼をはめなおした状態にしてからとはいえ、痛みを一瞬で消せるんだ。

地球の医療では考えられないレベルだよなぁ。

「でも、信じないわけじゃないけど、ガイ君の話が本当だとしたら、迷宮はいったいどうなってるんだろうね」

「そうですね。大多数の人間が魔物が増えてるって言ってるのに、俺が潜ったらモンスターはパンダしかいなかった、なんて、普通はありえないんですよね？」

「そうだね。周りにモンスターは溢れ出てるし、実際に迷宮に潜った冒険者たちもモンスターの数が多すぎるって言ってるわけだから」

普通に考えれば、俺が嘘を言っているって判断するしかないだろう。

俺が実際に体験したことは他の誰も知らない。

幸い、お姫様も三井さんも信じてるとは言わないまでも、事実の可能性を考慮してるってのは十分にありがたい話だ。

「っと、あまり長く引き留めても悪いね。俺も仕事があるしそろそろ行くよ」

「そうですか。お仕事頑張ってください」

「うん。ガイ君も頑張ってくれよ。君の働き次第で地上でモンスターを倒してる僕らの忙しさが変わってくるんだから」

「わかりました。でも、あんまプレッシャーかけないでくださいよ。俺なんて大した冒険者じゃないんですから」

「ははは、わかったよ。あまり期待しないでおく。それじゃあ」

「はい、また来週に」

謁見の間を出て報酬を受け取りに向かう。

そして、そこで気が付いた。

どこで報酬をもらえばいいのかわからない。そして、俺は姫様にはずいぶんと失礼な口をきいていたから、今更そんなことを気にしてなくても大丈夫じゃないか？　と言う事実に……

いや、とりあえずどこで報酬をもらえばいいんだ？

１７話　お願いは失敗でした（後書き）

ずいぶんとお待たせしました、箱庭１７話でございます。

とりあえず、忙しい。忙しくて目が回りそうでしたが、ひと段落ついたので、これからはもう少しハイペースな更新ができると思います。

次回はギルドでのお話、そしてついにおっさんが登場……するかもしれません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5099w/

箱庭の勇者　～ガイのなりあがり冒険記～

2011年11月5日01時09分発行